解題

鉏雨亭隨筆　三卷　東聚著

東聚、字は伯頎、初め文亮と稱し、後ち一學と稱す、夢亭、又た悔菴と號す、伊勢山田の人なり、韓聯玉（山口凹巷）に學ぶ、菅茶山、篠崎小竹と交る、嘉永二年六月十二日歿す、享年五十九、當時、宋詩盛に世に行はれしに、夢亭は、獨、唐詩を喜び、唐詩正聲箋注を著せり、其意唐詩復興に資するにあり。

此書は經史の攷證等種々の事に渉れるも、詩に關する説述甚だ多し、且往々創見に乏しからずといふ（嘉永五年春刻、寄春草堂藏版）

序

伊勢山田夢亭東君、與余書牘交通多年、往歲爲序其所注唐詩正聲、而未相識面、聞君將以一兩年間來遊浪華、而未果、溘焉病逝、遺言寄其所著鉏雨亭隨筆三卷、亦使作之序、余慘然繙而閱之、自詩文及瑣事、隨得隨錄、其論說足以畧見所造詣、閱至下卷、有一條曰、余在浪華、一日米薪俱盡、囊無一錢、僑居日淺、無所假貸、自謂坐而忍飢、不如臥而忘之、就枕而睡、及覺、枕上有炒麥粉一包、不知所由、問之鄰翁、曰野人報小便也、乃乞茶喫之、得以一飽、是夕沿街吹笛、按摩數人、獲百餘錢、實少年客中第一厄也、余乃喟然嘆焉曰、嗚呼是夢亭之所以爲夢亭乎、以此一事、推其平生、蓋知命安遇、不變操於夷險、著書自娛者、其爲人信可珍重也、抑若余則生長市中、叨承先業、飽食煖衣、與紈袴爲伍、以至七十、無一書可傳身後、其嬾惰實

可愧之甚也、君乃不惟不鄙棄、爲所繾綣如此何也、使君而在焉、則一堂對酌、余將問其由、而今已矣、姑書報遺言云、嘉永庚戌之冬、浪華小竹老人筱崎弼撰。

門人吳策書

小竹先生嘗撰此序、淨寫未成、忽然長逝矣、東氏因囑余代書、先生於夢亭翁未識其面、而謂其遺言、慘然傷悼之意見于序中、余於先生親炙多年、今臨寫遺文、其慘然者、不啻如先生於翁、嗚呼哀哉。

辛亥暮秋

吳策識

5

鉏雨亭隨筆卷上

伊勢東聚伯頎著

乙亥之歲、余患勞症、寓于鉏雨亭、自謂難得活路、一夕四巷韓先生垂訪、適河崎良佐亦來、燈下置酒、先生曰、余數年前、夢汝養疾于此、氣體稍佳、余與良佐喜舉一盃、宛然今夕情狀、必當復常、請勿過念、調治歲餘、而痊、因效沈括夢溪之意、自號夢亭、並記先生之言、先生有奇想、蓋其所夢之事、後日往往有驗、如合符節、亦不自知其所以然云。

鉏雨亭在高倉山下藤丘之北、文化十年、吾社所建、頗爲佳地、孟夏之月、土木工成、諸子始開清宴、分韻賦詩、四巷先生詩云、藤丘之

乙亥の歲、余、勞症を患ひ、鉏雨亭に寓す、自ら謂ふ、活路を得難しと、一夕、四巷韓先生、垂訪せらる、適河崎良佐も亦來る、燈下酒を置く、先生曰く、余數年前に、汝、疾を此に養ひ、氣體稍佳なり、余、良佐と喜びて一盃を舉げしことを夢む、宛然今夕の情狀、必ず當に常に復すべし、請ふ過念すること勿れと、調治すること歲餘にして痊ゆ、因りて沈括夢溪の意に效ひ、自ら夢亭と號す、併せて先生の言を記す、（先生奇想あり、蓋し其の夢みし所の事、後日往々驗有り、符節を合すが如し、亦自ら其の然る所以を知らずと云ふ、）

鉏雨亭は、高倉山下、藤丘の北に在り、文化十年、吾が社の建つる所、頗る佳地たり、孟夏の月、土木工成る、諸子始めて清宴を開き、韻を分ち詩を賦す、四巷先生の詩に云ふ「藤丘の北半弓の地、本と將に纔に一牀杠を置かんとす、

北𣴎弓地、本將纔置、一牀杠、役工締構句餘竣、茅宇不論華與庵、誰是主人誰是客、賀成各載酒盈缸、我豈賭墅謝安石、君皆推門賈長江、社擬月泉快吾意、詩振衰弱流海邦、況逢梅雨昨初晴、山如畫幢巧無雙、翁童隱見籬邊度、雉麥風輕吹短樁、無限夕陽饒夏意、鵓鳩聲杳彼谽谾、前有古人難著句、紫藤雲木對吟牕、亭未命名之時、適備後茶山菅翁書齋牓二紙見贈、曰鉏雨、曰耕雲、因名亭曰鉏雨、卽以耕雲爲橋本氏別莊之號、是亦社友小集之所。

余病中慵把筆、偶得故人書問、不能一一答之、嘗記白香山詩、云、豈是交親向我疎、老慵自愛閉門居、近來漸喜知聞斷、免惱嵇康索

工を役し締構旬餘に竣る、茅宇論ぜず華と庵と、誰か是れ主人誰か是れ客、成を賀し各載す酒缸に盈つ、我豈に墅を賭する謝安石ならんや、君皆門を推す賈長江、社は月泉に擬して吾が意を快くし、詩は衰弱を振ふて海邦に流く、況んや梅雨昨初めて晴るゝに逢ひ、山は畫幢の如く巧無雙、翁童隱見籬邊に度り、雉麥風輕くして短樁を吹く、限り無き夕陽夏意饒し、鵓鳩聲杳かなり彼の谽谾、前に古人有り句を著け難く、紫藤雲木吟牕に對す、」と亭未だ名を命ぜざる時、適備後の茶山菅翁、齋牓二紙を書して贈らる、鉏雨と曰ひ、耕雲と曰ふ、因りて亭を名づけて鉏雨と曰ふ、卽ち耕雲を以て橋本氏の別莊の號と爲す是れ亦社友小集の所なり。

余、病中筆を把るに慵ふし、偶故人の書問を得るも、一々之れに答ふる能はず、嘗て白香山の詩を記す、云く、「豈に是れ交親我れに向つて疎ならむや、老慵自ら愛す門を閉ぢて居るを、近來漸く喜ぶ知聞の断ゆるを、嵇康を惱まして報書を索むるを免る、」按ずるに、嵇康の山濤に與ふ

報書、按嵇康與山濤絶交書云、素不便書、又
不喜作書、而人間多事堆案盈几、不相酬答、
則犯教傷義、欲自勉強、則不能久、余年未及
壯、豈可遽效白之老慵失禮於人乎、而惡札
自愧、自然至此、因讀白詩、謂獲我心。
久霖初晴、落照在山、時余睡起、牀上攤卷、農
歌一聲、似讀豳風、乃扶杖步南畝、蓑笠兩兩
出翠秧中、偶誦李紳憫農詩、世間多般不解
之、何心悠悠過了一生、林下清錄云、陶淵明
嘗聞田水聲、倚杖久聽歎曰、秫稻已秀、翠色
染人、時剖胸襟、一洗荆棘、此水過吾師丈人
矣、千歳之下、仰止高風、
經史子集、稗官小說、強仕前後、可一氣讀、然
不得其要領、則世俗所謂多識耳、是何足道、

る絶交書に云ふ、素より書に便ならず、又、書を作ること
を喜ばず、而して人間多事、案に堆く几に盈つ、相ひ酬答
せざれば、則ち教を犯し義を傷る、自ら勉強せんと欲す
れば、則ち久しきこと能はずと、余、年未だ壯に及ばず、豈
に遽に白の老慵に效ひて、禮を人に失す可けむや、而れ
どゝ、惡札自ら愧ぢ、自然に此に至る、因りて白詩を讀み、
我が心を獲たりと謂ふ。
久霖初めて晴れ、落照山に在り、時に余睡起、牀上に卷を
攤す、農歌一聲、豳風を讀むに似たり、乃ち杖に扶けられ
て南畝に歩す、蓑笠兩々、翠秧中に出ず、偶李紳の農を憫
む詩を誦す、世間多般之れを解せず、何の心か悠々一生
を過了す、林下清錄に云ふ、陶淵明嘗て田水の聲を聞き、
杖に倚りて久しく聽き、歎じて曰く、秫稻已に秀で、翠色
人を染む、時に胸襟を剖き、荊棘を一洗す、此の水、吾が師
丈人に過ぐと、千歳の下、高風を仰止す。
經史子集・稗官・小說は、強仕前後に、一氣に讀むべし、然れ
ども、其の要領を得ざれば、則ち世俗の謂はゆる多識の
み、是れ何ぞ道ふに足らん、學問の要は、博より約に入り、

學問之要、自博入約、博以開見聞、約以修心性、謂之君子儒矣、我於吾鄕、未見其人。

東坡與王郎書云、少年爲學、每一書作數次讀、譬如入海、百貨皆有、入不能兼收盡取、但得其所欲求者爾、故願學者每次作一意求之、勿生餘念、事迹文物之類、又別一次、他皆效此、若學成八面受敵、與涉獵者不可同日語、黃山谷曰、讀書欲精不欲博、用心欲純不欲雜、觀書欲博、常不盡意、用心不純、訖無功、又與洪氏甥書云、尺璧之陰、以三分之、一以治公事、一以讀書、一以爲棋酒、則公私皆辨。

陸樹聲曰、李翺復性篇主排佛也、而間用其言、王恒之廢莊論以反莊也、而多襲其語、此文章家之操戈入室者、余謂柳宗元作非國

博以て見聞を開き、約以て心性を修む、之れを君子儒と謂ふ、我れ吾が鄕に於て、未だ其の人を見ず。

東坡の王郎に與ふる書に云ふ、少年學を爲す、一書每に數次讀を作す、譬へば、海に入るが如く、百貨皆有り、人兼ね收め盡く取ること能はず、但だ其の求めんと欲する所の者を得るのみ、故に願くは、學者、每次、一意之れを求むるを作して、餘念を生ずること勿れ、事迹文物の類、又別に一次、他皆此れに效ふ、若し學成り、八面敵を受けんには、涉獵者と同日に語る可からず、黃山谷曰、讀書は精ならんことを欲し、博ならんことを欲せず、心を用ゆるは、純ならんことを欲し、雜ならんことを欲せず、書を觀るに、博ならんことを欲すれば、常に意を盡さず、心を用ゆること純ならざれば、訖に功無し、又、洪氏甥に與ふる書に云ふ尺璧の陰、以て之れを三分し、一は以て公事を治め、一は以て書を讀み、一は以て棋酒を爲さば、則ち公私皆辨ず

陸樹聲曰く、李翺の復性篇は排佛を主とす、而して間其の言を用ふ、王恒之の廢莊論は、以て莊に反するなり、而して多く其の語を襲ふ、此れ文章家の戈を操りて室に入る者と、余謂ふ、柳宗元、非國語を作る、亦た多く國語を

語、亦多以國語爲法。
邦俗謂艮隅曰鬼門、凡經營忌犯之、吾鄉一士人造宅當艮隅、家人懼而止之、士人乃向其方再呼鬼門、咲曰、鬼不在焉、就起土木、竟無他異、諺云、斷而敢行、鬼神避之、正謂此也、宋嘉祐中、將修東華門、太史言、太歲在東、不可犯、仁宗批其奏曰、東家之西、乃西家之東、西家之東、乃東家之西、太歲果何在、其興工勿忌、吾神祖討石田三成、石川家成請曰、司天之法、今年塞在西方、願厭勝而後行、神祖曰、西今正塞、我往啓之耳、遂發、宋武帝攻南燕、或曰、今日往亡、不利行師、帝曰、我往彼亡、何爲不利、英雄所見千古合符、近來流俗甚畏方位、因擧三事以破陋習、曆書、二月以驚

以て法と爲す。
邦俗、艮隅を謂ひて鬼門と曰ふ、凡そ經營すれば、之れを犯すことを忌む、吾が鄉の一士人宅を造るに、艮隅に當る、家人懼れて之れを止めんとす、士人乃ち其の方に向ひ、再び鬼門と呼ぶ、咲ひて曰く、鬼在らずと、就きて土木を起す、竟に他異無し、諺に云ふ、斷じて敢行すれば、鬼神も之れを避くとは、正に此れを謂ふなり、宋の嘉祐中、將に東華門を修せんとす、太史言ふ、太歲東に在り、犯すべからずと、仁宗其の奏に批して曰く、東家の西は乃ち西家の東、西家の東は乃ち東家の西、太歲果して何くにか在る、其れ工を興して忌むこと勿れと、吾が神祖、石田三成を討ず、石川家成、請ひて曰く、司天の法、今年塞りは西方に在り、願くは厭勝して後に行かんと、神祖曰く、西、今正に塞る、我往きて之れを啓かんのみと、遂に發す、宋の武帝、南燕を攻む、或曰く、今日往亡、師を行るに利しからず、帝曰く、我往きて彼亡ぶ、何ぞ不利と爲さんと、英雄の見る所は、千古符を合す、近來流俗甚だ方位を畏る、因りて三事を擧げて以て陋習を破る、曆書に、二月、驚蟄後十四日を以て往亡日と爲す。

蟄後十四日爲往亡日。

余攜室寓迂齋韓翁隱居、一日米盡、因賦小詩呈凹巷先生云、炊烟不上竹間扉、聊摘園蔬充曉饑、昨雨米囊花巳盡、一雙蝴蝶欲何依、先生卽賜白粲一斗、陸放翁詩云、糴米歸來午未炊、家人竊憫老翁飢、不知弄筆東窓下、正和淵明乞食詩、按陶潛有乞食詩、余不取之爲典故、僅借物以達意、陋亦甚矣、後讀沈鐘彥罌粟花詩云、炊烟時或斷貧家、曉起俄看五色霞、任爾侏儒誇獨飽、籬頭已放米囊花、當時構案之際不知有此、乍及見之、竊喜余詩有據。

東隣一小兒夜啼、父母百計慰之、余聞之不寐、燈下偶讀吳子經論性不同文、其略云、稚

余、室を攜へて迂齋韓翁の隱居に寓す、一日米盡く、因りて小詩を賦し、凹巷先生に呈す、云く「炊烟上らず竹間の扉、聊か園蔬を摘んで曉饑に充つ、昨雨米囊花已に盡き、一雙の蝴蝶何に依らんと欲す」先生卽ち白粲一斗を賜ふ、陸放翁の詩に云ふ「米を糴して歸來午未だ炊がず、家人竊に憫む老翁の飢ゆるを、知らず筆を弄す東窓の下、正に淵明食を乞ふの詩を和す」按ずるに、陶潛に食を乞ふの詩有り、余、之れを取りて典故と爲さず、僅に物を借りて以て意を達す、陋も亦甚し、後に沈鍾彥の罌粟花の詩を讀む、云く「炊烟時に或は貧家に斷ゆ、曉起俄に看る五色の霞、任す爾が侏儒獨飽に誇るに、籬頭已に放つ米囊花」と、當時構案の際、此れ有るを知らず、乍ち之れを見るに及びて、竊に余が詩の據有るを喜ぶ。

東鄰の一小兒、夜啼く、父母百計之れを慰む、余之れを聞きて寐ねられず、燈下偶ゝ吳子經の性同じからざるを論ずる文を讀む、其の略に云ふ、稚子夜啼く、背を拊し以て之れを哀む、而かも止まず、果を取りて以て之れに與ふ、而

子夜啼、拊背以哀之、而不止、取果以與之、而不止、許之以旦市物而不止、於是其母滅燭、其父戸下伏爲狐鳴、其口如窒、此雖一時取喩、亦能悉世間愚夫婦驕養癡子之情狀矣。

梁一權貴讀誤本蜀都賦注、解蹲鴟芋也、乃爲羊字、人饋羊肉、答書曰、損惠蹲鴟、唐馮光震入集賢院校文選、又注蹲鴟爲今之芋子、卽是著毛蘿蔔、張九齡知蕭炅不學、故相調謔、一日送芋書稱蹲鴟、蕭答曰、損芋拜嘉、惟蹲鴟未至耳、然僕家多怪、亦不願此惡鳥也、一出顏氏家訓、一出譚賓錄、一出諧謔錄、竝令人不堪捧腹。

晁無咎書燈銘云、武子聚螢、孫生映雪、雪自易消、螢亦易滅、惟此銀缸、不疚其光、黃簾翠

れども止まず、果を取りて以て之に與ふ、而かも止まず、之に許すに、早に物を市ふを以てす、而かも止まず、是に於て、其の母燭を滅し、其の父、戸下に伏して狐鳴を爲す、其の口窒ぐが如しと、是れ一時喩を取ると雖ども、亦能く世間の愚夫婦が癡子を驕養するの情狀を悉せり。

梁の一權貴、誤本蜀都の賦の注を讀みて、蹲鴟は芋なりといふを解して、乃ち羊の字と爲す、人、羊肉を饋る、答書に曰く、蹲鴟を損惠せらると、唐の馮光震、集賢院に入り、文選を挍す、又、蹲鴟を注して、今の芋子と爲す、卽ち是れ毛を著くる蘿蔔なり、張九齡、蕭炅の不學を知り、故に相ひ調謔す、一日、芋を送る書に、蹲鴟と稱す、蕭答へて曰く、芋を損せられて拜嘉す、惟だ蹲鴟未だ至らざるのみ、然れども、僕の家、怪多し、亦此の惡鳥を願はざるなりと、一は顏氏家訓に出で、一は譚賓錄に出で、一は諧謔錄に出づ、竝に人をして捧腹に堪へざらしむ。

晁無咎の書燈の銘に云ふ、「武子螢を聚め、孫生雪に映す、雪は自ら消し易く、螢も亦滅し易し、惟だ此の銀缸、其の光を疚しめず、黃簾翠幕、永夕煌々、經史右に在り、子集左

幕永夕煌煌、經史在右、子集在左、如或不勸、負此燈火、余寒夜讀書之際、每誦此文、肅然自警。

詩之妙在韻致、不必以理勝也、歐陽公與人行、令各作詩兩句、須犯徒以上罪者、一云、持刀哄寡婦、下海刧人船、一云、月黑殺人夜、風高放火天、公云、酒粘衫袖重、花壓帽簷偏、或問之、答曰、當此時、徒以上罪亦做了、一段巧妙出于意表、東坡云、賦詩必此詩、定非知詩人。

楊升庵曰、漢書、虞詡云、公卿巽懦、容頭過身、蓋以猫犬喩之、凡猫犬鑽穴、頭可容、身卽過矣、按梁書高祖紀、張弘策曰、徐孝嗣才非柱石、聽人穿鼻、亦喩牛被人穿鼻而受制於人。

に在り、如し或は勸めざれば、此の燈火に負く、」と余、寒夜讀書の際、每に此の文を誦し、肅然として自ら警む。

詩の妙は韻致に在り、必ずしも理を以て勝たず、歐陽公、人と行く、各をして詩兩句を作らしむ、徒以上の罪を犯す者を須ふ、一云ふ「刀を持して寡婦を哄し、海に下りて人船を刧す」一云ふ「月は黑し人を殺すの夜、風は高し火を放つの天」公云ふ「酒は衫袖に粘して重く、花は帽簷を壓して偏なり」或之れを問ふ、答へて曰く、此の時に當りて、徒以上の罪も亦做すと、一段の巧妙意表に出づ、東坡云ふ、詩を賦するに、此の詩を必とするは、定めて詩を知る人に非ず。

楊升庵曰く、漢書に虞詡云ふ、公卿巽懦、頭を容れ身を過ぐと、蓋、猫犬を以て之れに喩ふ、凡そ猫犬穴を鑽し、頭容るべくば身卽ち過ぐ、按ずるに、梁書高祖紀に、張弘策曰く、徐孝嗣、才、柱石に非ず、人の鼻を穿つに聽すと、亦牛の人に鼻を穿たれて制を人に受くるに喩ふ。

余性疎懶、加以羸痩、正坐讀書、不久而倦、薛崗天爵堂筆餘云、曹操有欹案、可臥讀、楊盈川有臥讀書案、對書而睡者當倣之、然其製不可考、一日仰臥牀上、好書數卷亂抽讀之、白香山詩云、趁涼行繞竹、引睡臥觀書、古人獲我心矣、陸放翁詩云、體倦尙凴書引睡、心安不假酒攻愁、翻用白意最妙。

沈明遠曰、閉閤焚香、靜對古人、凝神著書、澄懷觀道、或引接名勝、劇談妙理、或觴詠自娛、一斗徑醉、或儲思靜睡、心與天遊、當是之時、須謝遣萬慮、勿令相干、雖明日有大榮大辱大禍大福、皆當置之一處、無令一眼睫許壞人佳思、習熟既久、靜勝益常、群動自息、便是神仙以上人也、一世窮通付之有命、萬緣成

余性疎懶、加ふるに羸痩を以てし、正坐書を讀むに、久しからずして倦む、薛崗の天爵堂筆餘に云ふ、曹操に欹案あり、臥讀すべし、楊盈川に、臥讀書案あり、書に對し而して睡る者、當に之れを倣ふべし、然れども、其の製、考ふべからず、一日、床上に仰臥し、好書數卷、亂抽し之れを讀む、白香山の詩に云ふ「涼を趁ふて行く、竹を繞り、睡を引いて臥して書を觀る」と、古人我が心を獲たり、陸放翁の詩に云ふ「體倦んで尙ほ書の睡を引くに凴る、心安して酒を假りて愁を攻めず」と、白の意を翻用す、最も妙なり。

沈明遠曰く、閤を閉ち香を焚き、靜に古人に對し、神を凝らし書を著し、懷を澄し道を觀、或は名勝を引接し、妙理を劇談す、或は觴詠自ら娯み、一斗徑に醉ふ、或は思を儲へ靜に睡り、心、天と遊ぶ、是の時に當りて、須らく萬慮を謝遣し、相干さしむること勿かるべし、明日、大榮大辱大禍大福有りと雖も、皆當に之れを一處に置き、一眼睫許も人の佳思を壞らしむること無かるべし、習熟既に久しく、靜勝益〻常、群動自ら息む、便ち是神仙以上の人なり、一世の窮通、之れを有命に付し、萬緣の成敗、處するに無心を以てすと、余謂ふ、達識の語、意味極めて長し、以て邊

敗、處以無心、余謂、達識之語、意味極長、足以破邊幅、解束縛、區區如余者、宜寫一通以置座右、讀書會心之際、外物動壞人意、每覽此文、胸中快然、倪思經鉏堂雜志云、讀義理書、學法帖字、澄心靜坐、益友淸談、小酌半醺、澆花種竹、聽琴翫鶴、焚香煎茶、登城觀山、寓意奕棋、雖有他樂、吾不易矣、此語比諸明遠、綽有餘也。

俗謂互市馬曰博勞、初余不詳其義、偶閱韻書、伯樂一作博勞、(樂、魯刀反、音勞、)乃知、互市之際能相馬者、或稱之曰博勞、後訛爲互市之義、又至諸物交易總稱博勞、轉借失義甚矣。

方密之著物理小識、格物窮理無復餘蘊、其論海市、末段曰、秦之阿房、楚之章華、魏之銅

幅を破り、束縛を解くに足る、區々余の如き者は、宜しく一通を寫し、以て座右に置くべし、讀書會心の際、外物動もすれば、人意を壞る、此の文を覽る每に、胸中快然たり、倪思の經鉏堂雜志に云ふ、義理の書を讀み、法帖の字を學び、澄心靜坐、益友淸談、小酌半醺、花に澆ぎ竹を種え、琴を聽き鶴を翫び、香を焚き茶を煎じ、城に登り山を觀、意を奕棋に寓す、他樂ありと雖ども、吾は易へずと、此の語、諸れを明遠に比ぶれば、綽として餘り有るなり。

俗に互市馬を謂ひて博勞と曰ふ、初め余其の義を詳にせず、偶韻書を閱す、伯樂一に博勞に作る(樂は魯刀の反、音勞)乃ち知る互市の際、能く馬を相する者、或は之れを稱して博勞と曰ふ、後に訛りて互市の義と爲し、又、諸物交易、總て博勞と稱するに至る、轉借義を失すること甚し。

方密之、物理小識を著す、格物窮理、復た餘蘊無し、其の海市を論ずる、末段に曰く、秦の阿房、楚の章華、魏の銅雀、陳の臨春・結綺、突兀として雲を凌ぐ者何ぞ限らむ、瞬去り

雀陳之臨春、結綺、突兀淩雲者何限、運去代遷、蕩爲焦土浮埃、是亦蜃也、波瀾汪汪如長流水、余嘗題蜃樓圖云、海氣騰蒸物象幽、乍成城市半空浮、願他全盛消沈跡、結綺臨春亦蜃樓、本此。

浪華客中訪村上恆安家、適一伶人在、聽余聲曰、卿一兩年前病虛損耶、腎氣未復、可愼調護、余年十七八實患此症、聞之爲神、靈樞經云、內有五臟以應五音、外有六府以應六律、伶人之技至哉、（天王寺有三樂部、伶人其一員也。）

古人寄物以寓微意者多、左傳、士會乃行、繞朝贈之以策、杜預注、策馬撾、臨別授之馬撾、竝示已所策以展情、晉書、姜維歸蜀失其母、魏人使其母手書呼維令反、竝送當歸以譬

代遷り、蕩として焦土浮埃と爲る、是れも亦た蜃なりと、波瀾汪々、長流の水の如し、余嘗て蜃樓の圖に題して云ふ「海氣騰蒸物象幽なり、乍ち城市を成して半空に浮ふ、願る他の全盛消沈の跡、結綺臨春も亦蜃樓」と、此に本つく。

浪華客中、村上恆安の家を訪ふ、適ゝ一伶人在り、余の聲を聽きて曰く、卿、一兩年前、虛損を病むか、腎氣未だ復せず、調護を愼むべしと、余年十七八、實に此の症を患ふ、之れを聞きて神と爲す、靈樞經に云ふ、內に五臟有り、以て五音に應じ、外に六府有り、以て六律に應ずと、伶人の技至れるかな（天王寺に樂部あり、伶人は其の一員なり）

古人、物に寄せて以て微意を寓する者多し、左傳に、士會乃ち行く、繞朝之れに贈るに策を以てすと、杜預の注に、策は馬撾なり、別れに臨みて、之に馬撾を授け、竝に己が策する所を示し、以て情を展ぶ、晉書に、姜維、蜀に歸る、其の母を失す、魏人、其の母をして手書して維を呼ばしめ、

之、維報書曰、良田百頃不計一畝、但見遠志無有當歸、遠思當歸竝藥名、通鑑綱目、盧循遺劉裕益智粽、裕報以續命湯、注、益智子味辛濇、主益氣安神、循以益智爲粽遺之、蓋言劉裕智氣窮也、續命湯成藥名、治中風不省人事、裕以此藥報之、蓋言循不省事也、又王國珍獻明鏡於蕭衍、衍斷金以報之、注、鏡所以照物、獻鏡者欲衍照其心也、易、二人同心其利斷金、故衍取以爲報、魏書、奚康生傳、蕭衍直閤將軍徐玄明戍於郁州、殺其刺史張稷、以城內附、詔遣康生迎接、賜細御銀纒槊一張竝棗奈果、面勅曰、果者果如朕心、棗者早遂朕意、隋史、李穆使子渾奉熨斗於楊堅曰、願執威柄以慰安天下、又以十三環金帶

反せしむ、并せて當歸を送り以てこれを譬ふ、維の報書に曰く、良田百頃、一畝を計らず、但だ遠志を見て、當歸ある無し、遠思·當歸は竝に藥名、通鑑綱目に、盧循、劉裕に益智粽を遺る、裕報ずるに、續命湯を以てす、注に、益智子、味ひ辛濇、氣を益し神を安んずることを主る、循、益智を以て粽と爲して之れを遺る、蓋し劉裕智氣の窮するを言ふなり、續命湯は成藥の名、中風にて人事を省せざるを治す、裕、此の藥を以て之れに報ゆ、蓋し循の事を省せざるを言ふなり、又、王國珍、明鏡を蕭衍に獻ず、衍、金を斷ち以て之に報ゆ、注に、鏡は物を照らす所以、鏡を獻ずるは、衍の其の心を照らさんことを欲するなり、易に二人心を同じくすれば、其の利、金を斷つ、故に衍取りて以て報と爲す、魏書奚康生の傳に、蕭衍の直閤·將·軍徐·玄·明、郁州を戍す、其の刺史張稷を殺し、城を以て內附す、詔して、康生を遣して迎接し、細御銀纒槊一張、竝に棗奈果を賜ひ、面敕して曰く、果は、果して朕の心の如く、棗は、早く朕の意を遂しむと、隋史に、李穆·子渾をして熨斗を楊堅に奉ぜしめて曰く、願くは、威柄を執り以て天下を慰安せよと、又、十三環金帝を以て堅に遺る、十三環金帶とは、天子の服なり、通鑑唐紀に、雲南王異·牟·尋、使者三輩を遣し、

遺堅、十三環金帶者天子之服也、通鑑唐紀、雲南王異牟尋遣使者三輩、各齎生金丹砂、詣韋皐、金以示堅、丹砂以示赤心、明史張濆傳、寧王宸濠欲拓地廣其居、濆執不可、大恚遣人餽之、濆發視之、則棗梨薑芥、蓋隱語也、按棗梨薑芥即早理疆界之意、李長吉詩云、密書題荳蔻、隱語笑芙蓉、按荳蔻一名相思子、芙蓉蓮也、蓮與憐音同、（呉志、太史慈傳注、江表傳、孫策以慈為建昌都尉、並督諸將、拒劉磐、曹公聞其名、遺慈書以篋封之、發省無所道、而但貯當歸、此在姜維前。）

五代有兩獨眼龍、歐史李克用一目眇、號獨眼龍、五國故事、延稟者審知之養子、眇一目、亦謂之獨眼龍、北魏谷楷眇一目、而性甚嚴、時人號曰瞎虎、瞎虎亦奇。

焦弱侯曰、韋蘇州澗底束荊薪、歸來煮白石、

各生金・丹砂を齎らして、韋皐に詣る、金は以て堅を示し、丹砂は、以て赤心を示す、明史張濆傳に、寧王宸濠、地を拓き其の居を廣めんと欲す、濆、執りて可かず、大に恚り、人を遣して之れに餽らしむ、濆、發きて之れを視れは、則ち棗梨薑芥なり、蓋し隱語なり、按ずるに、棗梨薑芥は、即ち早く疆界を理するの意、李長吉の詩に云ふ、密書、荳蔻に題し、隱語、芙蓉を笑ふ、按ずるに、荳蔻は一名相思子、芙蓉は蓮なり、蓮は憐と音同じ（呉志太史慈の傳の注に、江表傳に、孫策、慈を以て建昌都尉と爲し、並に諸軍を督せしめ、劉磐を拒ぐ、曹公、其の名を聞き、慈に書を遺り、篋を以て之れを封ず、發省、道ふ所無く、而して但だ當歸を貯ふ此れ姜維の前に在り）。

五代に兩獨眼龍有り、歐史に、李克用、一目眇す、獨眼龍と號す、五國故事に、延稟は、審知の養子にして、一目を眇す、亦之れを獨眼龍と謂ふ、北魏の谷楷、一目を眇す、而て性甚だ嚴なり、時人號して瞎虎と曰ふと、瞎虎亦た奇なり。

焦弱侯曰く、韋蘇州の「澗底荊薪を束ね、歸來白石を煮る」

讀者謂其寓言耳、按晉書、鮑靚爲南陽太守、嘗行部入海、遇風饑甚、取白石煮之以自濟、則實有其事矣、余嘗讀神仙傳云、白石先生常煮白石爲糧、此寄全椒山中道士詩、故引白石先生事、以謂仙家之趣耳、焦說近迂。

丹鉛錄云、王維老將行、恥令越甲鳴吾君、此舊本也、近刻爲不知者改作吳軍、蓋越甲吳軍、似是連對、不思前韻已有詔書五道出將軍、五言古詩有用重韻、未聞七言有重韻、隨園詩話、曹子建美女篇押二難字、謝康樂述祖德詩、押二人字、阮公詠懷押二歸字、以故、杜甫飮中八仙歌、香山渭村退居、昌黎寄孟郊詩、皆沿襲之、余謂飮中八仙歌、船眠天前複韻、就中用三前字、此是少陵創意、自我作

は、讀者其の寓言を謂ふのみ、按ずるに、晉書に、鮑靚・南陽の太守と爲る、嘗て部を行り海に入る、風に遇ひ饑ゆること甚し、白石を取りて之れを煮て以て自ら濟ふと、則ち實に其の事有り、余嘗て神仙傳を讀む、云く、白石先生、常に白石を煮て糧と爲すと、此れ全椒山中道士に寄する詩、故に白石先生の事を引きて、以て仙家の趣を謂ふのみ、焦說迂に近し。

丹鉛錄に云ふ、王維の老將行に「恥づらくは越甲をして吾が君を鳴らさしむ」と、此れ舊本なり、近刻は、知らざる者に、吳軍に改め作らる、蓋し越甲吳軍、是連對に似たり、前韻已に詔書五道、將軍を出だすといふあるを思はず、五言古詩は、重韻を用ふることあるも、未だ七言の重韻あることを聞かず、隨園詩話に、曹子建の美女篇は、二の難の字を押す、謝康樂の祖德を述ぶる詩は、二の人の字を押す、阮公の詠懷は、二の歸の字を押す、故を以て、杜甫の飮中八仙歌、香山の渭村退居、昌黎の孟郊に寄する詩、皆之を沿襲す、余謂ふ、飮中八仙歌の、船・眠・天・前複韻、中に就て、三の前の字を用ふ、此れは是少陵の創意、我より

古、隨園引以爲證、未確、盧照鄰長安古意、別有豪華稱將相、轉日回天不相讓、意氣由來排灌夫、專權判不容蕭相、用二相字、李白粉圖山水歌、洞庭瀟湘意遐綿、三江七澤情洄沿、東崖合沓蔽輕霧、深林雜樹空芊綿、用二綿字、廬山謠、影落明湖青黛光、金闕前開二峯長、翠影紅霞映朝日、鳥飛不到吳天長、用二長字、杜甫冬狩行、夜發猛士三千人、淸晨合圍步驟同、春蒐冬狩候得同、使君五馬一馬驄、用二同字、白居易琵琶行、別有幽愁暗恨生、此時無聲勝有聲、潯陽地僻無音樂、終歲不聞絲竹聲、用二聲字、長恨歌、侍兒扶起嬌無力、始是新承恩澤時、春風桃李花開夜、秋雨梧桐葉落時、七月七日長生殿、夜半無

古を作す、隨園引きて以て證と爲す、未だ確ならず、盧照鄰の長安古意に、「別に豪華の將相と稱する有り、日を轉じ天を回して相讓らず、意氣由來灌夫を排し、專權判、蕭相を容れず」と、二の相の字を用ふ、李白の粉圖山水歌に「洞庭瀟湘意遐綿、三江七澤情洄沿、東崖合沓輕霧を蔽ひ、深林雜樹空く芊綿」と、二の綿の字を用ふ、廬山謠に「影落ちて明湖青黛の光、金闕前に開いて二峯長し、翠影紅霞朝日に映じ、鳥飛んで到らず吳天長し」と、二の長の字を用ふ、杜甫の冬狩行に「夜、猛士三千人を發し、淸晨圍を合し步驟同じ、春蒐冬狩候得同じ、使君五馬一馬驄なり」と、二の同の字を用ふ、白居易の琵琶行に「別に幽愁暗恨の生ずる有り、此の時聲無きも聲有るに勝る、潯陽地僻にして音樂無し、終歲聞かず絲竹の聲」と、二の聲の字を用ふ、長恨歌に「侍兒扶け起して嬌にして力無く、始て是れ新に恩澤を承くる時、春風桃李花開く夜、秋雨梧桐葉の落つる時、七月七日　生殿、夜半人無く、私語の時」と、三の時の字を用ふ、盧仝の所思有りに「心斷絕す幾千里、夢中

人私語時、用三時字、盧仝有所思、心斷絶幾千里、夢中醉臥巫山雲、美人兮美人兮、不知爲暮雨兮爲行雲、用二雲字、王翰古長城吟、麒麟殿前拜天子、走馬爲君兩擊胡、秦王築城何太愚、天實亡秦非北胡、用二胡字、此餘複韻不可勝數、升菴曰、未聞七言有重韻、亦失考。

顔之推曰、治點子弟文章、以爲聲價、太弊事也、一則不可常繼、終露其情、二則學者有憑、益不精厲、余於此言深有感焉、凹巷先生好稱故人門生詩、見其所不妥貼、輙必苦思改之、如吾詩然、甚至全篇塗抹不存一字、故吾社詩斐然可觀、而亦不免有此二弊也、余戲同窓曰、僕駑庸劣終無所成、先吾師而死者

醉臥す巫山の雲、美人や美人や、知らず暮雨と爲り行雲と爲る」と、二の雲の字を用ふ、王翰の古長城吟に「麒麟殿前に天子を拜し、馬を走らして君が爲に雨び胡を撃つ、秦王城ヲ築く何ぞ太だ愚なる、天實に秦を亡ぼす北胡に非ず」と、二の胡の字を用ふ、此の餘、複韻勝げて數ふべからず、升庵曰く、未だ七言にして重韻あるを聞かずと、亦考を失す。

顔之推曰く、子弟の文章を治點し、以て聲價を爲すは、太だ弊事なり、一は則ち常に繼ぐべからず、終に其の情を露はす、二は則ち學者、憑あり、益精厲せずと、余、此言に於て、深く感ずるあり、凹巷先生、好みて故人門生の詩を稱す、其妥貼ならざる所を見れば、輙ち必ず苦思して之れを改む、吾が詩の如く然り、甚しきは、全篇塗抹、一字をも存せざるに至る、故に吾が社の詩、斐然として觀るべし、而して亦此の二弊あるを免れず、余、同窓に戲れて曰く、僕駑庸劣、終に成る所無し、吾が師に先ちて死する者は、反りて拙を露さず、古人の謂はゆる不幸の幸なり、(呆翁竹譜・霞亭涉筆・嵯峨樵歌、皆先生の筆削を經、霞亭後に

反不露拙、古人所謂不幸之幸也、（呆翁竹譜、鏗亭渉筆、嵯峨樵歌、皆經先生筆削、鏗亭後在備後、著三原三觀歸省游囊、如出於別人之手。）

凹巷先生登賤岳詩云、賤岳登臨弔古還、江雲越樹戰爭閑、七槍競鋭人如夢、電影時過夜雨山、一時膾炙人口、有一鴻儒、以茶山鍾馗詩、五山早發遠州作、爲天下三絶、改其起承云、唶谷悲風弔古還、江雲越樹戰爭間、如余淺才不知孰優、然詩話之弊多失於鑿、古人亦所不免也、周紫芝竹坡詩話云、柳子厚別弟宗一詩、欲知此後相思夢、長在荊門郢樹烟、烟字只當用邊字、蓋前有江邊故耳、不然當改云、欲知此後相思處、望斷荊門郢樹烟、如此卻是穩當、可謂癡人說夢矣、賤岳七槍前有蠏江七檜、然人稱彼而不稱此、一顯

備後に在り、三原三觀・歸省游囊を著す、別人の手に出づるが如し。）

凹巷先生の賤岳に登る詩に云ふ「賤岳登臨古を弔して還る、江雲越樹戰爭閑なり、七槍鋭を競ふ人夢の如し、電影時に過ぐ夜雨の山」と、一時人口に膾炙す、一鴻儒あり、茶山の鍾馗の詩と、五山の早く遠州を發する作とを以て、天下の三絶と爲し、其の起承を改めて云ふ「唶谷悲風古を弔して還る、江雲越樹戰爭の間」と、余の如き淺才、孰か優れるを知らず、然れども、詩話の弊多く鑿に失す、古人も亦免れざる所なり、周紫芝の竹坡詩話に云ふ柳子厚の弟宗一に別るゝ詩に「此の後相思の夢を知らんと欲せば、長く荊門郢樹の烟に在り」と、烟の字は、只だ當に邊の字を用ふべし、蓋し前に江邊有る故のみ、然らざれば、當に改めて「此の後相思の處を知らむと欲せば、望は斷ゆ荊門郢樹の烟」と云ふべし、此く如くのなれば、卻りて是れ穩當と、癡人夢を說くと謂ふべし、賤岳七槍、前に蟹江七檜あり、然れども、人、彼を稱して而して此れを稱せず、一顯一晦、各其の數あり。

一晦各有其數。

徐陵詩、相看不得語、密意眼中來、盧思道詩、深情出豔語、密意滿橫眸、二詩一意、橫眸最豔、而不如徐詩之含蓄無限、然亦有據、劉孝綽詠眼詩、欲知密中意、浮光逐笑廻。

晉書習鑿齒傳、苻堅陷襄陽、素聞鑿齒名、與釋道安俱輿而至、以其有蹇疾云、昔晉氏平吳利在二陸、今破漢南獲士才一人半耳、唐施肩吾與崔嘏同年不睦、嘏舊失一目、以珠代之、施嘲之曰、二十九人及第、五十七眼看花、元和十五年也、排調相類、可發一笑、金史、王兢轉河內令、夏秋之交、沁水泛溢、歲發民築堤、豪民猾吏因緣爲姦、兢覈實之、減費幾半、縣民爲之語曰、西山至河岸、縣官兩人半、

徐陵の詩に「相看て語るを得ず、密意眼中に來る」、盧思道の詩に「深情豔語を出だす、密意橫眸に滿つ」、二詩一意、橫眸最も豔なり、而して徐詩の含蓄限り無きに如かず、然れども、亦た據有り、劉孝綽の眼を詠ずる詩に「密中の意を知らむと欲せば、浮光笑を逐ふて廻る。」

晉書習鑿齒傳に、苻堅、襄陽を陷いる、素と鑿齒の名を聞く、釋道安と倶に輿して至る、其の蹇疾有るを以て云ふ、昔、晉氏の吳を平ぐる、利二陸に在り、今、漢南を破り、士才一人半を獲たるのみと、唐の施肩吾、崔嘏と同年、睦じからず、嘏舊と一目を失す、珠を以て之れに代ふ、施、之を嘲りて曰く、二十九人及第、五十七眼花を看ると、元和十五年なりと、排調相類す、一笑を發すべし、金史に、王兢、河內の令に轉ず、夏秋の交、沁水沾溢す、歲ごとに民を發し堤を築く、豪民猾吏、因緣姦を爲す、兢、之れを覈實し、費を減ずること幾むど半なり、縣民之れが語を爲して曰く、西山より河岸に至る、縣官兩人半と、蓋し前政韓希甫と兢と、相繼ぎて縣を治む、皆幹能あり、絳州の正平張元も亦た治續あり、而して差及ばざるを以ての故に然

蓋以前政韓希甫與魏相繼治、皆有幹能、絳州正平張元亦有治績、而差不及、故云然。

余多年所作詩凡千餘首、驢鳴狗吠聒耳而已、然經吾師潤色者、一二可觀焉、嘗求一胡蘆、投草稿其中、凹巷先生題云、舊詩刪稿探猶在、零紙隨塵恨未焚、近余檢之、半爲烏有、令人悵然自失、因謂、自今以往、每得一篇、輙手錄之、而病中詩思益苦、不可多作。

周易一書、玄妙不測、孔子曰、加我數年、五十以學易、可以無大過矣、孟子七篇多引詩書、斷之、獨不及易、所謂神而明之、存乎其人、非言說之所能盡也、管公明曰、善易者不論易、今人饒舌談易、何其容易也、容齋隨筆云、夏曰連山、以艮爲首、商曰歸藏、以坤爲首、周曰周易、以乾爲首、乾天也、周匝四時、故曰周易、非周公之周也、初余讀之以爲

か云ふ。

余多年作る所の詩、凡て千餘首、驢鳴狗吠、耳に聒するのみ、然れども、吾が師の潤色を經る者、一二觀るべし、嘗て一胡蘆を求めて、草稿を其中に投す、凹巷先生題して云ふ「舊詩删稿探つて猶在り、零紙塵に隨ふて恨くは未だ焚かず」と、近余之を檢するに、半ば烏有と爲る、人をして悵然自失せしむ、因りて謂ふ、今より以往、一篇を得る毎に、輙ち之れを手錄せむと、而して病中詩思益苦し、多く作るべからず。

周易の一書、玄妙不測、孔子曰く、我れに數年を加して、五十以て易を學ばゞ、以て大過無かる可しと、孟子七篇、多く詩書を引きて之を斷ず、獨り易に及ばず、謂はゆる神にして而して之れを明にするは、其の人に存す、言說の能く盡す所に非ざるなり、管公明曰く、易を善くする者は易を論ぜず、今人饒舌易を談ず、何ぞ其れ容易なるや、(容齋隨筆に云ふ、夏には連山と曰ふ、艮を以て首と爲す、商には歸藏と曰ふ、坤を以て首と爲す、周には周易と曰ふ、乾を以て首と爲す、乾は天なり、四時を周匝す、故に周易と曰ふ、周公の周に非ざるなりと、初め余之れを讀みて、以て確說と爲す、然れども、孔穎達の正義に據れば、則

確說、然據孔穎達正義、則亦不可信也。

毛西河曰、夫子三十五、卽游仕齊魯間、五十而爲中都宰、未至五十、則游仕之餘、猶思學易、所謂易則無時不學者、蓋思借此入官之年、爲窮經之年、故曰假曰借曰五十、此鑿鑿不可易者、古者五十以後不復親學、故養老之禮以五十始、故曰四十五十而無聞焉、斯亦不足畏也、先仲兄曰、魯魚亥豕、必其字形相類者、故曰形近致誤、卒與五十不近也、案說文、五者互也、从二从乂、謂陰陽交互于二大間也、卒者隸人給事名也、古以染衣題識、故从衣从十、謂衣飾有異色也、則識以今文觀之、五字與衣字相近乎、否乎、卽因而觀古文、㐅與卆相近乎否乎、毋亦宋後陋儒習見、

ち亦信ずべからざるなり。

毛西河曰く、夫子三十五、卽ち齊魯の間に游仕す、五十にして而して中都の宰と爲る、未だ五十に至らざれば、則ち游仕の餘も、猶易を學ばむことを思ふ、謂はゆる易は、則ち時として學ばざる無き者、蓋し思ふ此の官に入るの年を借りて、窮經の年と爲す、故に假と曰ひ借と曰ひ五十と曰ふ、此れ鑿々易ふべからざる者、古者、五十以後は、復た親ら學ばず、故に養老の禮、五十を以て始む、故に曰く、四十五十にして而して聞ゆること無きは、斯れ亦た畏るゝに足らざるなりと、先仲兄曰く、魯魚亥豕、必ず其の字形相類する者、故に曰く、形近く誤を致す、卒と五十と近からざるなり、案ずるに、說文に、五は互なり、二に从ひ乂に从ふ、陰陽、二大の間に交互するを謂ふなり、卒とは、隸人給事の名なり、古は染衣を以て題識す、故に衣に从ひ十に从ふ、衣飾に異色あるを謂ふなり、則ち識るに今文を以て之を觀れば、五の字、衣の字と相近きや否や、卽ち因りて而して古文を觀るに、㐅と卆と相近きや否や、亦た宋後の陋儒の習見なること毋からむや、草書に、草卆の字有るは、卒の字を以て、九十を合して文と爲す、

草書有草卆字者、以卒字合九十為文、九字近五、故以云。

梁書朱齡石傳、軍人緣河南岸牽百丈、有漂度北岸者、演繁露、劈竹為辮、以索連貫為牽具、名百丈、杜甫詩、百丈誰家上瀨船、又云、銅瓶未失水、百丈有哀韻、此借以名汲水之綆、鮑照詩、百丈不及泉、即此、木華海賦、候勁風揭百尺、維長綃挂帆席、李善注、百尺帆檣也、是百尺亦可入詩、未見用之者。

近時桑門以詩鳴者、余聞三人、曰道光、曰月航、曰鶚空、嘗於韓氏櫻葉館觀其詩、各數首、不唯無酸餡氣、句句精錬深入文字、東坡贈惠通詩云、語帶烟霞從古少、氣含蔬筍到公無、余於三人亦云、近得月航萬歲樂詩、不勝

九の字は五に近し、故に以て云ふ。

梁書朱齡石傳に、軍人、河の南岸に緣り、百丈を牽く、漂ひて北岸に度る者有り、演繁露に、竹を劈きて辮と爲し、索を以て連貫し、牽具を爲る、百丈と名づく、杜甫の詩に「百丈誰家ぞ瀨に上る船」又、云ふ「銅瓶未だ水を失はず、百丈哀韻有り」、此れ借りて以て水を汲むの綆に名づく、鮑照の詩に「百丈泉に及ばず」と、即ち此れなり、木華の海賦に「勁風を候し、百尺を揭げ、長綃を維ぎ、帆席を挂く」李善の注に、百尺は、帆檣なり、是れ百尺も亦詩に入るべし、未だ之れを用ふる者を見ず。

近時、桑門、詩を以て鳴る者、余、三人を聞く、曰く道光、曰く月航、曰く鶚空と、嘗て韓氏の櫻葉館に於て其の詩を觀る、各數首、唯だに酸餡の氣無きのみならず、句々精錬、深く文字に入る、東坡の惠通に贈る詩に云ふ「語、烟霞を帶ぶ古より少し、氣、蔬筍を含む公に到つて無し」と、余、三人に於て亦云ふ、近月航の萬歲樂の詩を得たり、欣賞に勝へず、此に附載す、詩に云ふ「大和村伶京師に入る、烏帽

欣賞、附載於此、詩云、大和村伶入京師、烏帽青袍賀新禧、擊鼓家奏萬歲樂、此曲亦可答清時、君不見二百年前事戰爭、群雄割據互敗興、擊鼓動地血漂杵、此時誰聽萬歲聲、又不見如今正遇治平世、文物聲名被四裔、只願今政無變更、四海相安樂萬歲、國學鄉庠開化元、養老恤孤民歸敦、汝曹安樂是誰力、一飯無忘國王恩。

隋唐嘉話、煬帝善屬文、而不欲人出其右、司隸薛道衡由是得罪、後因事誅之、曰、更能作空梁落燕泥否、又帝爲燕歌行、文士皆和、著作郎王冑獨不下帝、帝每啣之、冑竟坐此見害、而誦其警句、曰、庭草無人隨意綠、復能作此語耶、按空梁燕泥、隋史亦載之、何帝忌人

青袍新禧を賀す、擊鼓家に奏す萬歲樂、此の曲亦淸時に答ふ可し、君見ずや二百年前戰爭を事とし、群雄割據互に敗興、鼓を擊ち地を動かし血、杵を漂す、此の時誰か聽かむ萬歲の聲、又見ずや如今正に治平の世に遇ひ、文物聲名四裔に被る、只だ願ふ今政變更無く、四海相安じ萬歲を樂み、國學鄉庠化元を開き、老を養ひ孤を恤み民敦に歸す、汝が曹安樂是れ誰が力ぞ、一飯忘るゝ無かれ國王の恩。」

隋唐嘉話に、煬帝善く文を屬す、而して人の其の右に出づることを欲せず、司隸薛道衡、是に由りて罪を得たり、後に事に因りて之れを誅して曰く、更に能く「空梁燕泥を落す」を作るや否や、又、帝、燕歌行を爲る、文士皆和す、著作郞王冑、獨り帝に下らず、帝每に之れを啣む、冑、竟に此れに坐して害せらる、而して其の警句を誦して曰く、「庭草人無く隨意に綠なり」復た能く此語を作さむかと、按ずるに、空梁燕泥、隋史にも亦之を載す、何ぞ帝の人才の多きを忌むや、驕淫徼しと雖、其れ斯れ以て亡を取る

才之多、雖微驕淫、其斯足以取亡矣、北史、廣自直爲隋煬帝改詩、許其詆訶、帝必削改至于再三、俟其稱善而後已、由此觀之、亦似不必忌人才。

四巷先生觀九枝松記云、九枝松在五鈴川之南、凡十有八里而近、始度溪紅、水淺深皆可鑑、新樹淡翠如染、此間鰒岩鏡石、余往年歷渉、距鏡石七八里有三大石、下臨潭水、對岸山木清美、蓋尤可憩之佳處、余恨來遊之晩也、又七八里、觀所謂九枝松、其圍徑一丈八尺、高可五丈、但本幹至九尺許、支分爲九、其中央一枝竪直、八枝圍之、宛如九燭之在盤、故俗名燈臺松、今曰九枝、自余肇始、既徘徊松下、重山複水、鹿竄蛇潛、石鴨之聲與谷

に足る、北史に、廣自直、隋の煬帝の爲に詩を改む、其の詆訶を許す、帝必ず削改して再三に至る、其の善しと稱するを俟ちて而して後に已むと、此れに由りて之れを觀れは、亦必ずしも人才を忌まざるに似たり。

四巷先生、九枝松を觀る記に云ふ、九枝松は、五鈴川の南に在り、凡そ十有八里にして近し、始め溪矼を度る、水淺深皆鑑す可し、新樹淡翠染むるが如し、此の間、鰒巖鏡石あり、余往年歷渉す、鏡石を距る七八里にして三大石有り、下、潭水に臨む、對岸山木清美、蓋し尤も憩ふべきの佳處、余來遊の晩きを恨むなり、又、七八里にして、謂はゆる九枝松を觀る、其の圍、徑一丈八尺、高さ五丈可り、但だ本幹九尺許りに至り、支分して九と爲る、其の中央、一枝堅直し、八枝之れを圍む、宛も九燭の盤に在るが如し、故に俗に燈臺松と名づく、今、九枝と曰ふは、余肇より始む、既にして松下に徘徊す、重山複水、鹿竄し蛇潛す、石鴨の聲、谷と相響ふ、人跡杳絶、是の遊、余、朝に西維祺と、薩雲義

相瞑、人跡杳絶、是遊、余朝與西維祺、詣薩雲義隆二禪師、倶發、期餘子於中路、尋及者、春松洞田柳坡、又有不至者、獨山伯頎取野徑先行、竢余輩不至、謂已後期、遂獨遊究勝、余躑回歩數里、有從後呼余名者、聲出叢薄、顧則伯頎也、喜甚、乃相與歸、時已夕陽、景物閑麗、采野蕨盈把、仰看歸鳥、竊悵然感往事之不回今遊之難繼也、丁卯晩春廿四日記、時余年十七、未解古詩之法、途上漫賦五古一篇、誤蒙先生過賞、古人所謂強作解事語者、詩云、獨登朝暾山、適見溪上松、高標數百尺、堅心幾十冬、蒼如清雨洗、鬱若翠嵐重、初驚老龍鱗、斑斑苔痕封、仰看氣象雄、俯疑神秀鍾、暮風吹密葉、絶壁靈籟空、孤鶴巢猶在、閑

隆の二禪師に詣り、倶に發す、餘子を中路に期す、尋ぎて及ぶ者、春松・洞田・柳坡、又、至らざる者あり、獨り山伯頎、野徑を取り、先行き余輩を俟つに、至らず、謂へらく、已に期に後ると、遂に獨遊、勝を究む、余躑回歩數里、後より余が名を呼ぶ者あり、聲、叢薄より出づ、顧みれば則ち伯頎なり、喜ぶこと甚し、乃ち相與に歸る、時已に夕陽、景物閑麗、野蕨を采りて把に盈つ、仰ぎて歸鳥を看、竊に悵然として往事の回らず、今遊の繼ぎ難きを感ずるなり、丁卯晩春二十四日記す、時に余年十七、未だ古詩の法を解せず、途上漫に五古一篇を賦す、誤りて先生の過賞を蒙る、古人の謂はゆる強ひて解事の語を作す者、詩に云ふ「獨り朝暾山に登り、適〻溪上の松を見る、高標數百尺、堅心幾十冬、蒼として清雨の洗ふが如く、鬱として翠嵐の重るが若し、初は驚く老龍鱗、斑々苔痕封ず、仰いで氣象の雄なるを看、俯して神秀の鍾るかと疑ふ、暮風密葉を吹き、絶壁靈籟空し、孤鶴巢猶在り、閑雲去て蹤無し、予亦幽抱を恣にす、積翠衣上に濃なり、松子何の所の處ぞ、茶を采つ

雲去無蹤、予亦恣幽抱、積翠衣上濃、松子何所處、采苓永此從、是遊、余與諸公參差山中、饑甚、適逢燒炭夫、隨到其廬、同居數人、皆無賴之徒也、然喜余到、供飯勸酒、陶然一飽、頗似仙境、此地南距九枝松二十町許、簷外有細流、蓋五鈴川源云。

陳子昂詩云、聖人不利己、憂濟在元元、黃屋非堯意、瑤臺安可論、吾聞西方化、清淨道彌敦、奈何窮金玉、彫刻以爲尊、雲構山林盡、瑤圖珠翠煩、鬼功尚未可、人力安能存、夸愚適增累、矜智道逾昏、子昂仕武后朝、佛敎方盛、此首感遇三十八章之一、議論正大、維持風化、黃面老子、亦當首肯。

雍陶詩、處處春風枳殼花、枳本單名、橘類、醫

て永く此に從はん」と、是の遊、余、諸公と、山中に參差す、饑ゆること甚し、適燒炭夫に逢ひ、隨ひて其の廬に到る、同居數人、皆無賴の徒なり、然れども、余の到るを喜び、飯を供し酒を勸む、陶然一飽、頗る仙境に似たり、此の地、南、九枝松を距ること二十町許り、簷外に細流あり、蓋五鈴川の源と云ふ。

陳子昂の詩に云ふ「聖人は己を利せず、憂濟元々に在り、黃屋は堯の意に非ず、瑤臺安んぞ論ず可けん、吾聞く西方の化、淸淨道彌敦しと、奈何んぞ金玉を窮め、彫刻以て尊と爲す、雲構山林盡き、瑤圖珠翠煩なり、鬼功尚未だ可ならず、人力安んぞ能く存せん、愚に夸るは適累を增す、智に矜るは道逾昏し」と、子昂、武后の朝に仕へ、佛敎方に盛なり、此の首、感遇三十八章の一、議論正大、風化を維持す、黃面老子も亦當に首肯すべし。

雍陶の詩に「處々の春風枳殼の花」と、枳は本と單名、橘の

家用其實皮、名曰枳殼、此句於理不通、溫庭筠詩、枳花明驛牆、眞得名物之義、然枳殼花反似通稱、西京賦、楷枳落突棘藩、李善注、落亦籬也、按此邦俗所云枳殼籬也、張潮詩、蓮子花開猶未還、此非子實之子、亭子笠子皆助語辭、王漁洋、有開遍空山白芨花之句、白芨卽紫菀根名、邦人用此種字面、無不嗤笑、是亦不知詩中消息故也、

曹操呼孫策爲猘兒、關羽罵孫權使爲狢子、猘兒狢子可以爲對、魏書司馬叡傳、中原冠帶呼江東之人、皆爲狢子。

梁書、張率傳、率在新安、遣家僮載米三千石還吳宅、既至、遂耗大半、率問其故、答曰、雀鼠耗也、率咲曰、壯哉雀鼠、竟不研問、五代史王

類なり、醫家其の實の皮を用ふ、名づけて枳殼と曰ふ、此の句、理に於て通ぜず、溫庭筠の詩に「枳花驛牆に明」と、眞に名物の義を得たり、然れども、枳殼花、反て通稱に似たり、西京賦に「楷枳落突棘藩」と、李善注に、落も亦籬なりと、按ずるに、此れ邦俗に云ふ所の枳殼籬なり、張潮の詩に「蓮子花開いて猶未だ還らず」、此れ子實の子に非ず、亭子笠子、皆助語の辭、王漁洋に「開き遍し空山白芨花」の句あり、白芨は卽ち紫菀の根の名、邦人此の種の字面を用ひば、嗤笑せざるは無し、是れ亦詩中の消息を知らざるが故なり。

曹操、孫策を呼びて猘兒と爲す、關羽、孫權の使を罵りて狢子と爲す、猘兒、狢子、以て對と爲すべし、魏書司馬叡傳に、中原の冠帶、江東の人を呼びて、皆狢子と爲すと。

梁書張率傳に、率、新安に在り、家僮をして、米三千石を載せて吳宅に還らしむ、既に至る、遂に大半を耗す、率、其の故を問ふ、答へて曰く、雀鼠耗するなりと、率笑ひて曰く、壯なる哉雀鼠と、竟に研問せず五代史王章傳に、往時民

章傳、往時民租一碩輸二升、爲雀鼠耗、蓋祖於此。

人才天分不可學而長、余十年讀書、不下千卷、當作文下筆之際、反思平生所讀、茫然不湊、畢竟屬無用、劉子玄曰、夫有學無才、猶愚賈操金不能貨殖、蓋不才如余者之謂也。

枚乘七發云、皓齒蛾眉、命曰伐性之斧、甘脆肥醲、命曰腐腸之藥、余多病常稱之、鄭雲叟詩云、翠蛾紅粉嬋娟劍、殺盡世人人不知、最是激切、令人竦然、又有謂酒爲伐性之斧者、郭璞別傳、璞時有酔飽之失、友人于令升戒之曰、此伐性之斧也。

攝州湊川楠公碑陰、舜水朱先生文、敍事簡約、而楠公忠勳中興成敗、一筆能振收之、余

租一碩に二升を輸す、雀鼠耗と爲すと、蓋し此れを祖とす。

人才は天分、學びて而して長ずべからず、余十年讀書、千卷に下らず、當に文を作り筆を下すの際に當り、反つて平生の讀む所を思ふに、茫然として湊らず、畢竟無用に屬す、劉子玄曰く、夫れ學有りて才無きは、猶愚賈の金を操りて、貨殖する能はざるがごとし、蓋し不才、余の如き者の謂ひならん。

枚乘の七發に云ふ「皓齒蛾眉、命じて伐性の斧と曰ふ、甘脆肥醲、命じて腐腸の藥と曰ふ」と、余多病、常に之れを稱す、鄭雲叟の詩に云ふ「翠蛾紅粉嬋娟の劍、世人を殺盡して人知らず」最も是れ激切、人をして竦然たらしむ、又、酒を謂ひて伐性の斧と爲す者あり、郭璞別傳に、璞、時に酔飽の失あり、友人于令升之れを戒めて曰く、此れ伐性の斧なり。

攝州湊川の楠公碑陰の舜水朱先生の文は、敍事簡約にして、而して楠公の忠勳、中興の成敗、一筆能く之れを振收す、余嘗て其の墨搨を觀るに、楷法勁潤、頗る顏柳の風あ

按 三之字衍

嘗觀其墨搨、楷法勁潤、頗有顏柳之風、當今昇平二百餘年、海內立碑不少、余特推此爲第一、近來寺僧謹此碑、扃鑰、禁人搨去、故世罕傳也、按年山紀聞、西山公命佐佐宗淳、建楠公碑于攝州湊川、買其旁近之田、屬諸廣嚴寺、以修冥福、自書嗚呼忠臣楠子之墓、碑陰刻舜水先生文、末有故河攝泉三州守贈正三位近衞中將楠公贊、明徵士舜水朱之瑜字魯璵之所撰、勅代碑文以垂不朽、四十三字、乃西山公書也、或謂、此碑祖唐玄宗題張說父碑、云嗚呼積善之墓、玄宗亦有所本、吾丘衍學古編、延陵季子十字碑、在鎭江、人謂孔子書、文曰、嗚呼有吳延陵君子之墓、按古法帖止云於乎有吳君子而已、篆法敦古、

り、當今昇平二百餘年、海內碑を立つること少からず、余特に此れを推して第一と爲す、近來、寺僧此の碑を謹し、扃鑰して、人の搨し去ることを禁ず、故に世に傳ふること罕なり、按ずるに、年山紀聞に、西山公、佐々宗淳に命じ、楠公の碑を攝州湊川に建つ、其の旁近の田を買ひ、諸れを廣嚴寺に屬し、以て冥福を修す、自ら嗚呼忠臣楠子の墓と書す、碑陰に、舜水先生の文を刻す、末に、故河攝泉三州の守、贈正三位近衞中將楠公の贊、明の徵士舜水朱之瑜字は魯璵の撰する所、勅して碑文に代へ、以て不朽に垂るの四十三字あり、乃ち西山公の書なり、或ひと謂ふ、此の碑、唐の玄宗の張說父の碑に題して、嗚呼積善の墓と云へるを祖とす、玄宗も亦本づく所あり、吾丘衍の學古編に、延陵季子の十字碑、鎭江に在り、人、孔子の書と謂ふ、文に曰く、嗚呼有吳延陵君子の墓と、按ずるに、古法帖に止だ於乎有吳の君子と云ふのみ、篆法敦古、信ずべきに似たり、今、此の碑、妄に延陵之墓の四字を增す、之れを除くの外三字は、是れ漢人の方篆、前の六字と合せず、夫子

似乎可信、今此碑妄增延陵之墓四字、除之外三字是漢人方篆、不與前六字合、借夫子以欺後人、罪莫大于此、余謂、西山公以嗚呼二字冠之、所以慨當世振名教、不徒效彼歎美也、朱子書蔡西山墓碣云、嗚呼有宋蔡季通父之墓、亦效延陵十字碑也。

劉昌詩蘆浦筆記、京口有十字碑、世傳爲孔子書、曰嗚呼有吳延陵季子之墓、而季字作蜀、予攷篆文皆無之、得曾鮻元豐中編潤州類集、乃曰君子之墓、後湖居士李仲殊題季子廟詩亦曰、溪邊君子墓、始悟爲君子、非季子也、六一先生謂、古以竹簡書、今字濶盈尺、必非孔子作、然古法帖有魯司寇仲尼書、僅存十有二字、內有有吳君子之五字、與碑字

を借りて以て後人を欺く、罪、此れより大なるは莫し、余謂ふ、西山公、嗚呼の二字を以て之れに冠す、當世を慨し名教を振ふ所以、徒に彼の歎美に效ふのみにあらざるなり、朱子、蔡西山の墓碣に書して云ふ、嗚呼有宋蔡季通父の墓と、亦延陵十字の碑に效ふなり。

劉昌詩の蘆浦筆記に、京口に十字の碑あり、世に傳へて孔子の書と爲す、曰く、嗚呼有吳延陵季子の墓と、而して季の字蜀に作る、予、篆文を攷ふるに、皆之れ無し、曾鮻の元豐中に編せる潤州類集を得たり、乃ち君子の墓と曰ふ、後湖居士李仲殊の季子廟に題する詩にも亦曰く、溪邊君子の墓と、始めて君子たるを悟る、季子に非ざるなり、六一先生謂ふ、古は竹簡を以て書す、今字濶さ尺に盈つ、必ず孔子の作に非ず、然れども、古法帖に、魯司寇仲尼の書あり、僅に十有二字を存す、內に、有吳君子之の五字あり、碑と字畫一の如し、或は後人此を衍して墓上に題す、要するに知る、夫子蓋、嘗て是の書を爲すのみ。

畫如一、或者後人衍此題墓上、要知夫子蓋嘗爲是書爾。

張長史學吳畫不成、而爲草書、顏魯公學張草不成、而爲眞書、各開一家傳于後世、學問之法亦然、不必攻吾所短也。

七律第二句、有用通韻者、杜詩、不見旻公三十年、封書寄與淚潺湲、以下皆押先韻。

老子有二義、後漢書韓康曰、此自老子與之、是以老子爲自稱、陳簡齋詩、從今老子都無事、是亦自稱也、老學庵筆記、余在南鄭見西陲俚俗謂父曰老子、雖年十七八、有子亦稱老子、乃悟西人所謂大范老子、蓋尊之以爲父也。

張長史吳畫を學びて成らず、而して草書を爲す、顏魯公、張草を學びて成らず、而して眞書を爲す、各一家を開き、後世に傳ふ、學問の法も亦然り、必ずしも吾が短なる所を攻めざるなり。

七律の第二句に、通韻を用ふる者あり、杜詩に「旻公を見ざること三十年、封書寄與して淚潺湲」以下皆先韻を押す。

老子に二義あり、後漢書に、韓康曰く、此れ老子より之れを與ふと、是れ老子を以て、自稱と爲す、陳簡齋の詩に「今より老子都べて事無し、」是れ亦た自稱なり、老學庵筆記に、余、南鄭に在り、西陲の俚俗、父を謂ひて老子と曰ふを見る、年十七八と雖ども、子有れば、亦た老子と稱す、乃ち悟る、西人の謂はゆる大范老子は、蓋、之れを尊びて以て父と爲すなり。

5 歐陽公豐樂亭遊春三首、其一云、春雲淡淡

歐陽公の豐樂亭遊春三首、其の一に云ふ「春雲淡々日輝

日輝輝、草惹行襟、絮拂衣、行到亭西逢太守、籃輿酩酊挿花歸、風流溫藉、令人敬羨、又簡梅聖兪詩云、樓臺碧瓦輝雲日、蓮芰清香帶水風、對仗精密出乎自然。

理氣之說古今紛然、王陽明曰、理者氣之條理、氣者理之運用、直截痛快、不待多辯。

司馬溫公曰、修萬物之體用、莫過於字、包衆字之形聲、莫過於韻、故讀書須識字、作詩須辨韻、晁景迂曰、吾晚年日課識十五字、凡爲文者宜略識字、楊誠齋曰、無事好看韻書。

輟耕錄、凡男女締親者、兩家相謂曰親家、此二字見唐蕭嵩傳、邦俗所稱親類即此。

余七八歲時、祉師授童子句讀者、除四書五經之外、必讀古文眞寶・唐詩選、余亦暗誦、及

々、草は行襟を惹き絮は衣を拂ふ、行いて亭西に到つて太守に逢ふ、籃輿酩酊花を挿んで歸る」風流溫藉、人をして敬羨せしむ、又、梅聖兪に簡する詩に云ふ「樓臺碧瓦雲日に輝く、蓮芰清香水風を帶ぶ」と、對仗精密、自然に出づ。

理氣の說、古今紛然、王陽明曰く、理は氣の條理、氣は理の運用と、直截痛快、多辯を待たず。

司馬溫公曰く、萬物の體用を修むるは、字に過ぎたるは莫し、衆字の形聲を包むは、韻に過ぎたるは莫し、故に書を讀む、須らく字を識るべし、詩を作る、須らく韻を辨ずべし、晁景迂曰く、吾晩年の日課、十五字を識る、凡そ文を爲る者、宜しく畧字を識るべし、楊誠齋曰く、無事、好し韻書を看ると。

輟耕錄に、凡そ男女親を締する者、兩家相謂ひて親家と曰ふ、此の二字、唐の蕭嵩傳に見ゆ、邦俗の稱する所の親類は即ち此れなり。

余七八歲の時、祉師、童子に句讀を授くる者、四書五經を除くの外、必ず古文眞寶・唐詩選を讀ましむ、余も亦暗誦

長頗覺有益、今則師弟皆束高閣、或辯唐詩非李于鱗選、且如古文稱爲鹵莽、習尙之移、可慨嘆乎。

唐有租庸調食邑食實封之制、玆爲幼學擧之、演繁露、唐制取民者爲租庸調三色、其曰庸者、一歲而用人力止於二十日、役不及二十日、則輸絹三尺、是名爲庸、若有事而加役二十五日者、免其調、調謂輸絹銀之屬也、左暄三餘偶筆、唐代諸臣封邑、其見于碑刻、有云食邑者、有云食實封者、大抵食邑者多、而食實封者少、又有食邑而兼食實封者、既云食邑、而又云食實封何也、按唐書百官志、凡戶三丁以上爲率、歲租三之一入于朝廷、食實封者、得眞戶分食諸州、實封之不同于食

す、長ずるに及びて、頗る益有るを覺ゆ、今は則ち師弟皆高閣に束ね、或は唐詩の李于鱗の選に非ざるを辯ず、且つ古文の如きは、稱して鹵莽と爲す、習尙の移る、慨歎すべきかな。

唐に租庸調・食邑・食實封の制あり、玆に初學の爲に之れを擧ぐ、演繁露に、唐の制、民に取る者、租庸調三色と爲す、其の、庸と曰ふは、一歲にして而して人力を用ふること二十日に止る、役すること、二十日に及ばざれば、則ち絹三尺を輸す、是れを名つけて庸と爲す、若し事有つて而して役を加ふること二十五日なれば、其の調を免す、調とは、絹銀の屬を輸するを謂ふなり、左暄の三餘偶筆に唐代諸臣の封邑、其の碑刻に見ゆるものに、食邑と云ふ者あり、食實封と云ふ者あり、大抵、食邑は多く、而して食實封は少し、又、食邑にして、食實封を兼ねたる者あり、既に食邑と云ひ、而して又食實封と云ふは何ぞや、按ずるに、唐書の百官志に、凡そ戶三丁以上を率と爲す、歲ごとに、租三の一を、朝廷に入る、食實封は、眞戶を得、諸州に分食す、實封の食邑に同じからざる、其の區別此くの如し(唐書食貨志に、租庸調の法、人丁を以て本と爲す、人ごとに、田十畝を授く、歲に粟二斛を輸す、之れを租丁と謂ふ。)

邑、其區別如レ此。唐書食貨志、租庸調之法、以二人丁一爲レ本、人授二田十畝一、歲輸二粟二斛一、謂二之租丁一。

隨園隨筆、漢予告賜告有レ別、予告者、許レ歸レ家、三公予告令也、賜告者、不レ得レ歸レ家、病滿二三月一、賜告恩也、大抵賜告如二病假之類一、又有二令勅格式之分一、禁二於未然一之謂レ令、施二於已然一之謂レ勅、設二於此一而使二彼至一レ之之謂レ格、設二於此一而使二彼效一レ之之謂レ式。

五代康澄上疏曰、爲二國家一者、有下不レ足レ懼者五、深可レ畏者六上、三辰失レ行不レ足レ懼、天象變見不レ足レ懼、小人訛言不レ足レ懼、山崩川竭不レ足レ懼、水旱蟲蝗不レ足レ懼也、賢士藏匿深可レ畏、四民遷レ業深可レ畏、上下相狥深可レ畏、廉恥道消深可レ畏、毀譽亂レ眞深可レ畏、直言不レ聞深可レ畏也、按

隨園隨筆に、漢の予告賜告は別あり、予告とは、家に歸ることを許す、三公は予告令なり、賜告とは、家に歸ることを得ず、病、三月に滿ちて、賜告するは恩なり、大抵賜告は、病假の類の如し、又、令勅・格式の分あり、未然に禁ずるを之れ令と謂ふ、已然に施すを之れ勅と謂ふ、此に設けて、而して彼をして之れに至らしむるを之れ格と謂ふ、此に設けて、而して彼をして之れに效はしむるを之れ式と謂ふ。

五代の康澄の上疏に曰く、國家を爲むる者は、懼るゝに足らざる者五、深く畏るべき者六あり、三辰行を失す、懼るゝに足らず、天象變見る、懼るゝに足らず、小人の訛言、懼るゝに足らず、山崩れ川竭く、懼るゝに足らず、水旱蟲蝗、懼るゝに足らざるなり、賢士藏匿す、深く畏るべし、四民業を還す、深く畏るべし、上下相狥ふ、深く畏るべし、廉恥の道消す、深く畏るべし、毀譽眞を亂る、深く畏るべし、直言聞えず、深く畏るべきなり、按ずるに、三辰行を失し、天象變見れ、小人訛言し、山崩れ川竭く、水旱蟲蝗、是れ皆

三辰失行、天象變見、小人訛言、山崩川竭、水旱蟲蝗、是皆人主所可懼者、而其謂不足懼、則歸重下文深可畏者之上、欲令人主竦聽也、王安石曰、天變不足畏、祖宗不足法、人言不足恤、此祖澄語、以逞一己執拗耳。

劉更生上書曰、昔孔子與顏淵子貢、更相稱擧、不爲朋黨、禹稷與皐陶、傳相汲引、不爲比周、何則忠於爲國無邪心也、歐陽公朋黨論、反用此意、

王質觀棋柯爛、或作聽琴、一人二事、要之皆出假託、水經注、晉中朝時、有民王質、伐木至石室中、見童子四人彈琴而歌、質倚柯聽之、童子以一物如棗核與質、質含之不饑、俄頃童子曰其歸、承聲而去、斧柯漼然爛盡、既歸、

人主の懼るべき所の者にして、而して其の懼るに足らずと謂ふは、即ち重きを下文の深く畏るべき者の上に歸し、人主をして、竦聽せしめんと欲するなり、王安石曰く、天變は畏るゝに足らず、法宗、祖とるに足らず、人言恤ふるに足らずと、此れ澄の語を祖とし、以て一己の執拗を逞するのみ。

劉更生の上書に曰く、昔、孔子、顏淵・子貢と、更に相ひ稱擧するも、朋黨と爲さず、禹稷、皐陶と傳へて相ひ汲引するも、比周と爲さず、何んとなれば、則ち國を爲むるに忠にして、邪心無ければなりと、歐陽公の朋黨論は、此の意を反用す。

王質、棋を觀て柯爛る、或は琴を聽くに作る、一人二事、之れを要するに、皆假託に出づ、水經注に、晉の中朝の時、民の王質といふものあり、木を伐り石室中に至る、童子四人琴を彈じて而して歌ふを見る、質、柯に倚りて之れを聽く、童子、一物の棗核の如きものを以て質に與ふ、質之れを含みて饑えず、俄頃にして、童子曰く、其れ歸れと、聲を承けて去る、斧柯漼然として爛れ盡く、旣に歸る、質、家

質去家已數十年、親情凋落、無復向時比矣、周處斬蛟、又有鄧遐、同書云、沔水中常苦蛟害、襄陽太守鄧遐、負其氣果、拔劍入水、蛟繞其足、遐揮劍斬蛟、流血丹水、自後患除、無復蛟難矣、

今世士人、或愧厥祖之所出草莽寒微、世系附會某源某平、所謂遙遙華胄、眞可咲之甚也、按氏族博攷云、狄青爲樞密使、有狄梁公之後、持梁公畫像及告身十餘通、詣青獻之、以謂青之遠祖、青謝之曰、一時遭際、安敢自附梁公、厚贈而還之、比之郭崇韜哭子儀之墓、所得多矣、五代史郭崇韜傳、豆盧革等以其姓郭、因爲子儀之後、崇韜遂以爲然、其伐蜀也、過子儀墓、下馬號慟而去、聞者頗以爲

を去ること已に數十年、親情凋落し、復た向時の比無しと、周處蛟を斬る、又、鄧遐あり、同書に云ふ、沔水中、常に蛟の害に苦む、襄陽の太守鄧遐、其の氣果を負み、劍を拔き水に入る、蛟、其の足に繞ふ、遐、劍を揮ひ蛟を斬り、流血水を丹にす、自後、患除きて、復た蛟の難無し。

今世の士人、或は厥の祖の出づる所草莽寒微なるを愧ぢ、世系、某源、某平に附會す、謂はゆる遙々華胄なり、眞に咲ふべきの甚しきなり、按ずるに、氏族博攷に云ふ、狄青、樞密使と爲る、狄梁公の後あり、梁公の畫像及び告身十餘通を持して青に詣りて、之れを獻じて、以て青の遠祖と謂ふ、青之れに謝して曰く、一時遭際、安ぞ敢て自ら梁公に附せんと、厚く贈りて之れを還へす、之れを郭崇韜が子儀の墓に哭するに比すれば、得る所多し、五代史郭崇韜傳に、豆盧革等、其の姓郭なるを以て、因りて子儀の後と爲す、崇韜遂に以て然りと爲す、其の蜀を伐つや、子儀の墓を過ぎ、馬より下りて號慟して去る、聞く者頗る以て笑と爲せり。

矣。

謝莊五子驪朏顥從淪、世謂、莊名子以風月景山水、此亦一好事也。

江戸中野瓢哉、嘗送河崎良佐南歸、遂與偕來從吾社遊、性嗜古書畫、善鑒定、能識諸名家姓字鄉貫及沒日葬地、叩之響答、又有墓癖、終日尋碑剔蘚、偶得一逸事如獲至寶、將編緝成書以垂後世、蓋謂、名公巨匠之顯然乎世、則何必待我、其一生盡心思、而名或湮沒者、是宜昭揭以傳之、瓢哉今在江戸、數寄書諸友、其中有云、近來都下古碑、香火絕者、石工乞僧求之、磨礱再用、可爲慨歎、隋秦王俊卒、僚佐請立碑、文帝曰、欲求名、一卷史書足矣、何用碑爲、若子孫不能保家、徒與人作

謝莊の五子、驪・朏・顥・從・淪、世に謂ふ、莊、子に名づくるに、風月景山水を以てすと、此れ亦一好事なり。

江戸の中野瓢哉、嘗て河崎良佐の南に歸るを送り、遂に與に偕に來りて吾が社に從ひて遊ぶ、性、古書畫を嗜み、鑒定を善くす、能く諸名家の姓字鄉貫、及び沒日葬地を識る、之れを叩けば、響答す、又墓癖あり、終日碑を尋ね蘚を剔ぎ、偶一逸事を得れば、至寶を獲るが如し、將に編緝して書を成し、以て後世に垂れんとす、蓋し謂ふ、名公巨匠の世に顯然たるは、則ち何ぞ必ずしも我に待たん、其の一生、心思を盡して、名或は湮沒する者は、是れ宜しく昭揭して以て之れを傳ふべし、瓢哉、今、江戸に在り、數書を諸友に寄す、其の中に云ふあり、近來、都下の古碑、香火絕ゆる者は、石工、僧に乞ひ之を求め、磨礱して再用すと、慨歎を爲すべし、隋の秦王俊卒す、僚佐碑を立てんと請ふ、文帝曰く、名を求めんと欲せば、一卷の史書足れり、何ぞ碑を用ふるを爲さん、若し子孫にして家を保つこと能はざれば、徒に人に與へて鎭石と作さんのみと、眞に千古の格言なり、張籍の詩に「千金碑を立つ高さ百尺、終に他

鎭石耳、眞千古格言也、張籍詩、千金立碑高百尺、終作他人柱下石、亦祖此語。

五代史呂琦傳、琦言、方今之勢、不如與契丹通和如漢故事、歳給金帛、妻之以女、便彊藩大鎭、顧外無所援引、可弭其亂心、廢帝以琦語問樞密直學士薛文遇、文遇大以爲非、因誦戎昱社稷依明主、安危託婦人之詩、以誚琦等、廢帝大怒、其議遂寢、按昱咏史云、漢家靑史上、計拙是和親、社稷依明主、安危託婦人、豈能將玉貌、便擬靜胡塵、地下千年骨、誰爲輔佐臣、雲溪友議云、唐憲宗朝、以北狄頻侵邊境、大臣奏議、古者和親有五利而無千金之費、帝曰、朕記詠史一篇、此人若在與朗州刺史、其詩漢家云云、帝咲曰、魏絳之功何

人柱下の石と作る」と、亦此の語を祖とす。

五代史呂琦傳に、琦言ふ、方今の勢、契丹と和を通ずること、漢の故事の如くし、歳に金帛を給し、之れに妻はすに女を以てするに如かず、便ち彊藩大鎭顧るに、外、援引する所無ければ、其の亂心を弭む可し、廢帝琦の語を以て樞密直學士薛文遇に問ふ、文遇大に以て非と爲し、因りて戎昱の「社稷明主に依り、安危婦人に託す」の詩を誦し、以て琦等を誚る、廢帝大に怒り、其の議遂に寢む、按ずるに、昱、史を咏じて云ふ、「漢家靑史の上、計の拙は是れ和親社稷明主に依り、安危婦人に託す、豈に能く玉貌を將て、便ち胡塵を靜めんと擬す、地下千年の骨、誰か輔佐の臣と爲らん、」雲溪友議に云ふ、唐の憲宗の朝、北狄頻に邊境を侵すを以て、大臣奏議す、古者、和親に五利有り、而して千金の費無し、帝曰く、朕、詠史一篇を記す、此の人若し在らば、朗州刺史を與へん、其の詩に、漢家云々、帝咲ひて曰く、魏絳の功、何ぞ其れ懦なるやと、大臣公卿、遂に和戎の論を息む、余謂ふ、和親固より鄙むべし、而して亦全く廢すべからざるなり、戎昱の此の詩、君は以て臣を壓し、臣

其儒也、大臣公卿遂息和戎之論、余謂、和親固可鄙、而亦不可全廢也、戎昱此詩、君以歷臣、臣以激君、二事出一轍、然晉招契丹之禍、由此啓之、可謂一言亡國矣。

余病間講唐詩、不惟逐句分斷、人物地理職官之類、博證諸書、反覆說之、秖令聽者神倦厭吾喋喋、於是余說一篇大意而已、餘竢疑問、聽者便之、昔樊文深每解書、多引漢魏以來諸家義而說之、故後生聽其言者、不能曉悟、皆背而議之曰、樊生讀書、多門戶、不可解、古人亦有是弊、講書之法可深思矣。

韓翁自號迂齋、一曰迂叟、蓋取司馬公獨樂園記、然白香山詩、初時被目爲迂叟、近日蒙呼作隱人、又云、自哂此迂叟、小迂老更迂、則

は以て君を激す、二事一轍に出づ、然れども、晉の契丹の禍を招くは、此れに由りて之れを啓く、一言國を亡すと謂ふべし。

余病間、唐詩を講ず、惟だ句を逐ひて分斷するのみならず、人物地理職官の類、博く諸書に證し、反覆之れを說く、秖に聽く者をして、神倦みて、吾が喋々を厭はしむ、是に於て、余、一篇の大意を說くのみ、餘は疑問を竢つ、聽く者之れを便とす、昔、樊文深、書を解する毎に、多く漢魏以來の諸家の義を引きて之れを說く、故に後生其の言を聽く者、曉悟する能はず、皆背にして之れを議して曰く、樊生書を讀むに、門戶多く、解すべからずと、古人も亦是の弊あり、講書の法、深く思ふべし。

韓翁自ら迂齋と號す、一に迂叟と曰ふ、蓋、司馬公の獨樂園の記に取れり、然れども、白香山の詩に「初時目して迂叟と爲さる、近日呼んで隱人と作さる」、又云ふ「自ら哂ふ此の迂叟、小迂老ひて更に迂なり」と、則ち迂叟の號、獨り

汪叟之號不獨溫公也。

東坡詩、只遣三千履、來遊十二峯、史記、春申君客三千人、其上客皆躡珠履、按三千人當言六千履、猶田村謠云一發千矢、蓋千手觀世音、一發五百矢也。

王荊公遊襃禪山記、襃禪山亦謂之華山、唐浮圖慧襃始舍於其址、而卒葬之、以故其後名之曰襃禪、今所謂慧空禪院者、襃之廬冢也、距其院東五里、所謂華山洞者、以其乃華山之陽名之也、其乃二字、直指上文襃禪山亦謂之華山、以釋其非太華山也、邦人文章決不能用此等助字、在彼土則常套。

祠前有神門、俗云鳥居、祠人借用華表、華表圖出三才圖會、其製甚異、何平叔景福殿賦、

溫公のみならざるなり。

東坡の詩に「只だ三千履を遣し、來り遊ぶ十二峯」と、史記に、春申君の客三千人、其の上客皆珠履を躡む、按ずるに、三千人は當に六千履と言ふべし、猶ほ田村謠に、一發千矢と云ふがごとし、蓋し千手觀音、一發は五百矢なり。

王荊公、襃禪山に遊ぶ記に、襃禪山も亦之れを華山と謂ふ、唐の浮圖慧襃、始めて其の址に舍し、而して卒して之れを葬る、故を以て、其の後、之れを名づけて襃禪と曰ふ、今謂ふ所の慧空禪院は、襃の廬冢なり、其の院を距る東五里、謂はゆる華山洞は、其の乃ち華山の陽なるを以て之れを名づくるなり、其乃の二字、直に上文の襃禪山亦之れを華山と謂ふを指し、以て其の太華山に非ざることを釋す、邦人の文章、決して此等の助字を用ふること能はず、彼の土に在りては、則ち常套なり。

祠前に神門あり、俗に鳥居と云ふ、祠人、華表を借用す、華表の圖、三才圖會に出つ、其の製甚だ異なり、何平叔の景福殿の賦に「故に其の華表は則ち鎬々鑠々、赫奕章灼、日

故其華表則鎬鎬鑠鑠、赫奕章灼、若日月之麗天也、李善注、華表、謂華飾屋外之表也、此是別義。

賴山陽詩、遠帆如坐近帆行、余謂坐字不穩、析用行住二字、改住爲可、或引杜詩春水舟如天上坐爲證、是坐字屬人不屬舟、老年花作霧中看、看亦屬人、讀詩不精、成此附會、可笑。

醫學要則、雁來瘋、此症緣脾經有濕、肺感風邪、風濕搏結而成、然肺主皮毛、脾主四肢、故每至八月秋風蕭索之時、則手足乾燥、乖癩痲痒、形似蝕癬、或頑厚如牛領之皮、痲痺不仁、破則血水頻流、時常疼痛、久則遊溢周身、潰爛而莫能救矣、邦俗所謂雁瘡、輕重雖異

月の天に麗るが若し、李善の注に、華表は、屋外の表を華飾するを謂ふなりと、此れは是れ別義。

賴山陽の詩に、「遠帆は坐するが如く近帆は行く」、余謂へらく、坐の字、穩ならず、行住の二字を析用し、住に改むを可と爲す、或は杜詩の「春水の舟天上に坐するが如し」を引きて、證と爲す、是の坐の字は人に屬し、舟に屬せず、「老年の花は霧中の看を作す」の看も亦た人に屬す、詩を讀みて精ならずして、此の附會を成す、笑ふべし。

醫學要則に、雁來瘋、此の症は、脾經に濕有るに緣る、肺、風邪に感じ、風濕搏結して而して成る、然れども、肺は皮毛を主り、脾は四肢を主る、故に八月秋風蕭索の時に至る毎に、則ち手足乾燥、乖癩痲痒、形、蝕癬に似たり、或は頑厚牛領の皮の如く、痲痺不仁、破れば則ち血水頻に流る、時常に疼痛す、久しければ、則ち周身に遊溢し、潰爛して而して能く救ふこと莫し、邦俗の謂はゆる雁瘡、輕重異なりと雖ども、其の症頗る同じ（牛山翁、此の症を治するに

其症頗同、（牛山翁治此症、用雁來紅、余亦試之、頗有功。）

少年輕俊之徒、風流自喜、忘吾本分、專心詩章、以要虛譽、四書五經舍而不講、衆人稱曰才子、彼亦以才自任、年及四五十、區區碌碌、學無所成、蒼顏白首、奔走衣食之間、觀其所爲、不過播間祭者也、噫。

細紙條塗胡粉、長尺餘、每條略其中央、半紅半白、或用金銀箔、凡贈遺物用此縛結、俗稱水引、按索麵一名水引、蓋以其狀肖故名。

辛卯夏秋之際、三十日餘無雨、夕燒如火、初更漸減、東南海氣蒼茫、月色隱如碧銅、劉禹錫詩、孤輪徐轉光不定、游氣濛濛隔寒鏡、寫得巧妙、中元後一日記。

十五夜稱月半夜、劉孝綽有月半夜泊鵲尾

羅來紅を用ふ、余も亦之れを試む、頗る功あり。）

少年輕俊の徒、風流自ら喜び、吾が本分を忘れ、心を詩章に專にし、以て虛譽を要む、四書五經舍きて講ぜず、衆人稱して才子と曰ふ、彼も亦才を以て自ら任ず、年、四五十に及び、區々々、學碌成る所無く、蒼顏白首、衣食の間に奔走す、其の爲す所を觀るに、播間の祭者に過ぎざるなり、噫。

細絲條に胡粉を塗り、長さ尺餘、每條、其の中央を略し、半紅半白、或は金銀箔を用ふ、凡そ物を贈遺するに、此れを用ひて縛結す、俗に水引と稱す、按ずるに、索麵一に水引と名づく、蓋、其の狀の肖たるを以て故に名づく。

辛卯夏秋の際、三十日餘雨無し、夕燒火の如く、初更漸く減ず、東南海氣蒼茫、月色隱として碧銅の如し、劉禹錫の詩に「孤輪徐に轉して光定らず、游氣濛々として寒鏡を隔つ」と、寫し得て巧妙、中元後一日記す。

十五夜を月半夜と稱す、劉孝綽に、月半夜、鵲尾に泊する

詩云、客行三五行、息棹隱中洲、月光隨浪動、山影逐波流。

楊敬仲曰、仕宦以孤寒爲安身、讀書以饑餓爲進退、居家以無事爲平安、朋友以相見疎爲久要、余味此言、稍入蔗境、褚遂良曰、朋友深交者易怨、父子濡愛者多愆、今世士人最有是弊。

近時句讀師、學問淺薄、不過都都平丈我、而自公然不愧、以師自任、弟子亦仰爲一先生、鄙諺所謂一盲引衆盲者、委巷叢談云、曹元寵題村學圖云、此老方捫虱、衆雛爭附火、想當訓誨間、都都平丈我、語雖調笑、而曲盡社師之狀、杭諺云、社師談論語、郁郁乎文哉、訛爲都都平丈我、委巷之童習而不悟、一日宿

詩あり云ふ「客は行く三五の夜、棹を息めて中洲に隱る、月光浪に隨ひて動き、山影波を逐ふて流る。」

楊敬仲曰く、仕宦は孤寒を以て安身と爲し、讀書は饑餓を以て進退を爲し、居家は無事を以て平安と爲し、朋友は相見るの疎なるを以て久要と爲すと、余、此の言を味ふに、稍く蔗境に入る、褚遂良曰く、朋友深交の者は怨み易く、父子濡愛の者は愆り多しと、今世士人最も是の弊あり。

近時句讀の師、學問淺薄、都々平丈我に過ぎず、而して自ら公然として愧ぢず、師を以て自ら任ず、弟子も亦仰ぎて一先生と爲す、鄙諺に謂はゆる、一盲、衆盲を引く者、委巷叢談に云ふ、曹元寵、村學圖に題して云ふ「此老方に虱を捫す、衆雛爭ふて火に附く、想ふ訓誨の間に當つて、都々平丈我」と、語、調笑と雖ども、而かも曲に社師の狀を盡す、杭諺に云ふ、社師、論語を談ず、郁々乎として文なる哉を、訛りて、都々平丈我と爲す、委巷の童、習ひて悟らず、一日、宿儒社中に到り、爲に其の訛を正す、學童皆駭散す、時

儒到社中、爲正其訛、學童皆駭散、時人爲之語云、都都平丈我、學生滿堂坐、郁郁乎文哉、學生都不來、曹詩本此、按宋書、王彧子絢、六歲讀論語郁郁乎文哉、外祖何尚之戲曰、可改耶耶乎文哉、以郁乃其父嫌名也、其訛聖言、無識之至、如改聖經、何非禮之甚也、方巨山詩、村夫子挾兎園冊、敎得黃鸝解讀書、能記蒙求中一句、百般嬌姹可憐渠、注、蓋俗以其聲爲呂望非熊、隨園詩話、或戲村學究云、漆黑茅柴屋半間、猪窩牛圈浴鍋連、牧童八九縱橫坐、天地玄黃喊一年、二詩能極其趣。崔瑗善章草、王隱謂之草賢、此在草聖之前、書聖二字見梁書王志傳、宛委餘編、沛國劉顯偏精班漢、時人目之爲漢聖、杜預研精左

人之れが語を爲して云ふ、都々平丈我、學生滿堂に坐す、郁々乎として文なる哉、學生都て來らずと、曹の詩此に本づく、按ずるに、宋書に、王彧の子絢、六歲、論語の郁々乎として文なる哉を讀む、外祖、何尚之、戲れて曰く、耶々乎として文なる哉に改むべしと、郁は乃ち其父の嫌名なるを以てなり、其の聖言を訛るは、無識の至り、聖經を改むるが如きは、何ぞ非禮の甚しきや、方巨山の詩に「村夫子兎園冊を挾む、黃鸝を敎へ得て讀書を解す、能く蒙求中の一句を記す、百般の嬌姹渠を憐む可し」注に蓋、俗に其の聲を以て、呂望非熊と爲すと、隨園詩話に、或ひと村學究に戲れて云ふ「漆黑茅柴屋半間、猪窩牛圈浴鍋連る、牧童八九縱橫に坐す、天地玄黃喊すること一年」と、二詩能く其の趣を極む。

崔瑗、章草を善くす、王隱之れを草賢と謂ふ、此れ草聖の前に在り、書聖二字は、梁書王志の傳に見ゆ、宛委餘編に沛國の劉顯偏に班漢に精し、時人之れを目して漢聖と爲す、杜預、左傳を研精す、時人之れを目して左氏癖と爲

傳、時人目之爲左氏癖、同一癖也、一以稱聖、一以稱癖。

高廷禮曰、登慈恩塔詩、杜甫云、高標跨蒼穹、烈風無時休、俯視但一氣、焉能辨皇州、高適云、秋風昨夜至、秦塞多清曠、千里何蒼蒼、五陵鬱相望、岑參云、秋色從西來、蒼然滿關中、五陵北原上、萬古青濛濛、是皆雄渾悲壯、足以凌跨百代、按陶淵明詩、濛濛百尺樓、分明望四荒、山河滿目中、平原獨茫茫、自余觀諸公詩、不出其範圍中、但氣力過之耳、謝玄暉詩、寒城一以眺、平楚正蒼蒼、不甚讓陶。

王荊公圍棋詩云、莫將戲事擾眞情、且可隨緣道我贏、戰罷兩奩收黑白、一枰何處有虧成、僅僅二十八字、與韋曜博奕論、足以警世

ず、同じく一癖なり、一は以て聖と稱し、一は以て癖と稱す。

高廷禮曰く、慈恩塔に登る詩、杜甫云ふ「高標蒼穹に跨り、烈風時に休むこと無し、俯して視る但だ一氣、焉ぞ能く皇州を辨ぜむ」、高適云ふ「秋風昨夜至り、秦塞淸曠多し、千里何ぞ蒼々、五陵鬱として相望む」、岑參云ふ「秋色西より來り、蒼然として關中に滿つ、五陵北原の上、萬古靑濛々」と、是れ皆雄渾悲壯、以て百代に凌跨するに足れりと、按ずるに陶淵明の詩に「迢々たり百尺樓、分明に四荒を望む、山河目中に滿つ、平原獨茫々」、余より諸公の詩を觀るに、其の範圍の中に出でず、但だ氣力之れに過ぐるのみ、謝玄暉の詩に「寒城一以て眺む、平楚正に蒼々」、甚だ陶に讓らず。

王荊公の棋を圍む詩に云ふ「戲事を將て眞情を擾ること莫れ、且つ緣に隨ふて我が贏を道ふ可し、戰罷んで兩奩黑白を收む、一枰何れの處にか虧成有らん」、僅々二十八字、韋曜の博奕論と、以て世の木野狐に惑ふ者を警るに

之惑木野狐著矣。

劉後村詩云、馬上功名成畫餅、林間身世似持碁、碁經、無勝敗曰持、人唯知持不知芾、芾亦持之謂也、通玄集圍碁、兩無勝敗曰芾、說文相當也、緜兔二音、（按左傳、鄭子羽謂子皮曰、子與子家持之、杜注、持之言無所取與、此碁經所本。）

余病來善忘、因製小牌、黃漆塗之、名曰記事牌、常置几案間、逐條輙書、事畢復拭、每日如此、蓋水牌之類也。

宋儒以詩爲閑言語、閑言語三字、唐人既用之、張祜讀老莊詩云、等閑緝綴閑言語、誇向時人喚作詩、昨日偶拈莊老讀、萬尋山上一毫釐。

余同學之徒、少年輕俊、或誤陷野狐窟、多喪

足れり。

劉後村の詩に云ふ「馬上の功名畫餅を成し、林間の身世持碁に似たり」、碁經に、勝敗無きを持と曰ふ、人唯だ持を知りて、芾を知らず、芾も亦た持の謂ひなり、通玄集に、圍碁、兩ながら勝敗無きを芾と曰ふ、說文に相當るなり、緜兔の二音（按ずるに、左傳に、鄭の子羽、子皮に謂ひて曰く、子、子家と之れを持す、杜注に、持の言たる、取與する所無しと、此れ碁經の本づく所）

余病來善く忘る、因りて小牌を製し、黃漆もて之れを塗る、名づけて記事牌と曰ふ、常に几案の間に置き、條を逐ひて輙ち書す、事畢りて復た拭ふ、每日此くの如くす、蓋、水牌の類なり。

宋儒、詩を以て閑言語と爲す、閑言語の三字、唐人既に之れを用ふ、張祜の老莊を讀む詩に云ふ「等閑に緝綴す閑言語、誇つて時人に向つて詩を作ると喚ぶ、昨日偶莊老を拈して讀む、萬尋山上の一毫釐。」

余、同學の徒、少年輕俊、或は誤りて野狐窟に陷り、多く宿

宿志、交際狎褻、一日呼某曰牛糞、某亦甘受之、陶穀清異錄、陳喬張佖之子、秋晩竝游玄武湖、群鷗游汎、佖子曰、一輪活水瀟湘浦、喬子俄顧吏卒曰、此白色水禽可作脯否、人謂佖子半蓋鳳毛、喬男一堆牛糞、鄙語亦有典故、可咲、姓有牛糞氏、出紫芝園漫筆、遼皇族西郡王名驢糞、金宣宗時、濮王傅名猪糞、二事極奇、又有猪王驢王、出宋書。

王伯厚曰、杜詩、初月出不高、衆星尙爭光、謂肅宗初立盜賊未息也、按曹子建贈徐幹詩、圓景光未滿、衆星粲以繁、張銑注、圓景月也、喩道不明也、衆星喩群小邪人也、杜句祖此、尙字著眼。

隋文帝江南之役、命大作戰艦、船人請密之、

志を長ひ、交際狎褻す、一日、某を呼びて牛糞と曰ふ、某も亦甘んじて之れを受く、陶穀の清異錄に、陳喬・張佖の子、秋晩、竝に玄武湖に游ぶ、群鷗游汎す、泌の子曰く、「一輪の活水瀟湘の浦」、喬の子、俄に吏卒を顧みて曰く、此の白色の水禽、脯と作すべきや否やと、人謂ふ、佖の子は半蓋の鳳毛、喬の男は一堆の牛糞と、鄙語も亦典故あり、咲ふべし、姓に牛糞氏あり、紫芝園漫筆に出づ、遼の皇族、西郡王名は驢糞、金の宣宗の時、濮王の傅、名は猪糞、二事極めて奇なり、又、猪王・驢王あり、宋書に出づ。

王伯厚曰く、杜詩に「初月出でゝ高からず、衆星尙光を爭ふ」は、肅宗初めて立ち、盜賊未だ息まざるを謂ふなり、按ずるに、曹子建の徐幹に贈る詩に「圓景光未だ滿たず、衆星粲として以て繁し」、張銑の注に、圓景は月なり、道の明かならざるに喩ふるなり、衆星は、群小邪人に喩ふるなり、杜句は此れを祖とす、尙の字著眼。

隋の文帝、江南の役に、命じて大に戰艦を作らしむ、船人之れを密にせんことを請ふ、帝曰く、吾將に顯に天誅を

帝曰、吾將顯行天誅、何密之有、使投柹於江、若彼能改、吾又何求、按王濬令何攀造舟艦器仗、時作船、木柹蔽江而下、吳建平太守吾彥、取流柹以白吳主曰、晉必有攻吳之計、宜增建平兵、以塞其衝要、故船人畏如吾彥者復取流柹、以諫陳主、爲之計、請密之也、文帝此語似眞王者、而固知彼無能爲發之耳。

梁鍠詠木老人詩云、刻木牽絲作老翁、鷄皮鶴髮與眞同、須臾弄罷寂無事、還似人間一夢中、詞盡而意不窮、勢利赫赫者多是不能讀、讀亦不能解、苟讀而解之、感其何如、全唐詩題、作傀儡吟、一作磊子人、引明皇雜錄云、李輔國矯制遷明皇西宮、戚戚不樂、日一蔬食、嘗詠此詩、或云、明皇所作、開天五十年富

行はんとす、何の密にすることか之れ有らん、柹を江に投ぜしめよ、若し彼能く改めば、吾又何をか求めんと、按ずるに、王濬、何攀をして、舟艦器仗を造らしむ、時に船を作りし木柹江を蔽ひて下る、吳の建平の太守、吾彥、流柹を取り、以て吳主に白して曰く、晉必ず吳を攻むるの計有らん、宜しく建平の兵を增し、以て其の衝要を塞ぐべしと、故に船人、吾彥の如き者、復流柹を取りて以て陳主を諫め、之の計を爲さむことを畏れ、之を密にせんことを請ひしなり、文帝此語、眞の王者に似たり、而して固より彼が能く爲すこと無きを知りて、之を發するのみ。

梁鍠、木老人を詠ずる詩に云ふ「木を刻し絲を牽きて老翁と作す、鷄皮鶴髮眞と同じ、須臾に弄し罷んで寂として事無し、還た人間一夢の中に似たり」と、詞盡き而して意窮らず、勢利赫々の者、多くは是れ讀むこと能はず、讀むも亦解すること能はず、苟も讀みて而して之れを解せば、感其れ何如ん、全唐詩題に、傀々吟に作る、一に磊子人の引に作る、明皇雜錄に云ふ、李輔國、制を矯めて、明皇を西宮に遷す、戚々として樂まず、日に一蔬食のみ、嘗て此の詩を詠ず、或は云ふ、明皇の作る所と、開天五十年の富貴、一旦變遷、猶傀儡戲弄し、寂然として觀止むがごとし

貴、一旦變遷、猶傀儡戲弄、寂然觀止、謂爲明皇之作、亦似不虛、洪容齋曰、士之處世視富貴利祿、當如優伶之爲參軍、方其据几正坐嚱嗚訶箠、群優拱而聽命、戲罷則亦已矣。

俗稱善熟人情世態、渾然無圭角者、曰通人、少年才子欽之、與世浮沉、士氣不振、多爲蘇摸稜之徒、夫士以有忠慨之志爲要、或臨事感激、不能無圭角、所謂通人者非吾所好也。

唐員半千本名餘慶、師學士王義方、義方嘉重之、嘗語之曰、五百年一賢者生、足下當之矣、因改名半千、金史雷淵傳、淵彈劾不避貴戚、出巡郡邑、所至有威聲、奸豪不法者立箠殺之、至蔡州杖殺五百人、時號曰雷半千、蓋其命名同、而其爲人天壤不啻、又明有龔賢

謂ひて明皇の作と爲すも、亦虛ならざるに似たり、洪容齋曰く、士の世に處する、富貴利祿を視る、當に優伶の參軍と爲るが如くなるべし、其の几に据りて正坐し、嚱嗚訶箠するに方りては、群優拱して命を聽く、戲罷めば則ち亦已めり。

俗に善く人情世態に熟し、渾然として圭角無き者を稱して、通人と曰ふ、少年才子、之れを欽し、世と浮沈す、士氣振はず、多く蘇摸稜の徒と爲る、夫れ士、忠慨の志有るを以て要と爲す、或は事に臨みて、感激す、圭角無き能はず、謂はゆる通人なる者、吾が好む所に非ざるなり。

唐員半千、本餘慶と名づく、學士王義方を師とす、義方之れを嘉重す、嘗て之れに語りて曰く、五百年には、一賢者生ず、足下之れに當らん、因りて名を半千と改む、金史雷淵傳に、淵、彈劾して貴戚を避けず、出でゝ郡邑を巡る、至る所威響あり、奸豪不法の者、立どころに之れを箠殺す、蔡州に至り、五百人を杖殺す、時に號して雷半千と曰ふ、蓋、其の名を命ずる同じくして、而して其の人と爲りは、天壤も啻ならず、又、明に、龔賢字は半千あり、上元の人

字半千、上元人。

折臂三公、人皆所知、又有折臂太守、梁書、劉之遴字思貞、初在荊府、嘗寄居南郡廨、忽夢、前太守袁彖謂曰、卿後當爲折臂太守、卽居此中、之遴後果損臂、遂臨此郡。

宋書天竺迦毗黎國傳、沙門惠琳、嘗著均善論、其詞曰、有白學先生、以爲中國聖人、經綸百世、其德弘矣、有黑學先生陋之、按白謂儒、黑謂佛。

陳勝曰、王侯將相寧有種乎、豪放不羈、東坡曰、江山風月本無常主、閑者便是主人、逍遙自適。

詩有一氣呵成、又有年鍛月錬、然不以遲速爲之妍媸、但思澁而難得、當借他物助之、神

なり。

折臂三公、人皆知る所、又、折臂太守あり、梁書に、劉之遴、字は思貞、初め荊府に在り、嘗て南郡廨に寄居す、忽ち夢む、前の太守袁彖謂ひて曰く、卿後に、當に折臂太守と爲り、卽ち此の中に居るべしと、之遴、後果して臂を損し、遂に此の郡に臨む。

宋書天竺迦毘黎國傳に、沙門惠琳、嘗て均善論を著す、其の詞に曰く、白學先生有り、以爲へらく、中國聖人、百世を經綸す、其の德弘し、黑學先生有り、之れを陋とすと、按ずるに、白は儒を謂ひ、黑は佛を謂ふ。

陳勝曰く、王侯相將、寧ぞ種有らんやと、豪放不羈、東坡曰く、江山風月、本と常主無し、閑者便ち是れ主人と、逍遙自適。

詩には、一氣呵成有り、又、年鍛月錬有り、然れども、遲速を以て之が妍媸を爲さず、但だ思ひ澁りて得難きときは當に他物を借りて之を助くべし、神氣一旺、斐然として章

氣一旺、斐然成章、桓玄作詩、或時思不來、輙作鼓吹、既而思得云、鳴鵠響長阜、歎曰、鼓吹固自來人思、李翰文雖宏暢、而思甚苦澁、晩居陽翟、常從邑令皇甫曾求音樂、思涸則奏樂、神逸則綴文、不唯詩文爲然、書畫亦有之、張旭自言、始見公主擔夫爭道、又聞鼓吹而得筆法、觀倡公孫舞劍器、得其神、裴旻嘗請吳道玄、畫天宮寺壁、道玄曰、聞將軍善劍舞、願作氣以助揮毫、旻欣然爲舞一曲、道玄看畢、奮筆立成、若有神助、（西京雜記、枚皐文章捷疾、長卿製作淹遲、皆一時之譽、長卿首尾溫麗、枚皐時有累句、故知、疾行無善迹矣。）徐幼文詩、柳短短春江滿、蘭渚雪融香、東風釀春暖、山長水更遙、浩蕩木蘭橈、蘭橈向何處、送君南昌去、離愁落日烟中樹、結用七言

を成す、桓玄、詩を作る、或る時に思來らず、輙ち鼓吹を作す、既にして思得て云ふ「鳴鵠長阜に響く」と、歎じて曰く、鼓吹固より自ら人思を來すと、李翰、文、宏暢と雖ども、而して思ひ甚だ苦澁、晩に陽翟に居る、常に邑令皇甫曾に從ひて音樂を求む、思ひ涸るれば、則ち樂を奏す、神逸すれば則ち文を綴ると、唯詩文のみ然りと爲さず、書畫も亦之れ有り、張旭自ら言ふ、始公主の擔夫、道を爭ふを見る、又鼓吹を聞きて筆法を得たり、倡公が、劍器を舞はすを觀て、其神を得たりと、裴旻嘗て吳道玄に請ひ、天宮寺の壁に畫かしむ、道玄曰く、將軍劍舞を善くすと聞く、願くは氣を作して以て揮毫を助けよと、旻、欣然として舞を爲すこと一曲、道玄看畢りて、筆を奮ひて立どころに成る、神助あるが若し。（西京雜記に、枚皐は、文章捷疾、長卿は、製作淹遲、皆一時の譽、長卿は、首尾溫麗、枚皐は、時に累句あり、故に知る、疾行には善迹無きを。）

徐幼文の詩、「柳短々春江滿つ、蘭渚雪融して香し、東風春暖を釀す、山長く水更に遙かなり、浩蕩す木蘭の橈、蘭橈何れの處にか向ふ、君が南昌に去るを送る、離愁落日烟中の樹」と、結に七言單句を用ふ、餘情限り無し、余之に擬

單句、餘情無限、余欲擬之、遂不能也、又送張景則歸天台詩、浙江東去有名山、路遠天台鴈宕間、我未得遊空悵望、是君鄉里喜君還、句句自在、如聽情話。

孫蕢發忠州詩、搖船夜半發忠州、灘深浪緊船欲立、余嘗到志州南島、海上東風暴起、舟首仰乘逆浪、殆有欲立之勢、古人造語務去腐套、讀者非歷實境、則不能知其妙也。

古今閨秀、有文才者往往失節、末路浮沉不如無學之女、翁志琦答女口號云、左家嬌女稟夙慧、把卷問耶欲學吟、耶竊正緣苦吟誤、爾何學吟費苦心、不聞郝鍾禮法重大義、婦德何嘗在識字。

陌頭盲女無愁恨、猶抱琵琶說趙家、（此南宋人詩、失二

せんと欲し、遂に能はざるなり、又、張景則が天臺に歸るを送る詩に「浙江東に去つて名山有り、路は遠し天台鴈宕の間、我未だ遊ぶを得ず空しく悵望す、是れ君が鄉里に君が還るを喜ぶ」、句々自在、情話を聽くが如し。

孫蕢、忠州を發する詩に「船を搖して夜半忠州を發す、灘深く浪緊くして船立たんと欲す」、余嘗て志州の南島に到る、海上東風暴に起り、舟首仰ぎて逆浪に乘ず、殆んど立たんと欲するの勢有り、古人造語、務めて腐套を去る、讀む者實境を歷るに非れば、則ち其の妙を知ること能はざるなり。

古今閨秀にして文才ある者、往々節を失し、末路浮沉す、無學の女に如かず、翁志琦、女に答ふる口號に云ふ「左家の嬌女夙慧を稟け、卷を把り耶に問ひ吟を學ばんと欲す、耶が竊は正に苦吟に緣て誤らる、爾何ぞ吟を學んで苦心を費さん、聞かずや郝鍾禮法大義を重んず、婦德何ぞ嘗て字を識るに在らん」と。

「陌頭の盲女愁恨無し、猶琵琶を抱いて趙家を說く。」（此れ

其姓名。

徂徠先生推服李于鱗、唱復古學、海內文章爲之一變、其爲人亦相類、錢謙益曰、于鱗擧進士、候選里居、發憤讀書、刺深鉤摘、務取人所置不解、撫拾以爲資、而其矯悍勁鷙之材、足以濟之、高自誇許、詩自天寶以下、文自西京以下、誓不汚吾毫素也、矯悍勁鷙四字、亦可以稱先生也。

徂徠集有孔子贊云、日本夷人物茂卿、或譏其不得國體、按紂有億兆夷人、夷人猶平人、也、書孔傳、平人凡人也、此翁虛喝駭人耳目、可以見其一斑也。

助語於文關係極大、虛字亦不可忽、孟子曰、牛羊茁壯長而已矣、古文蒼勁韓文公曰、牛羊遂

南宋人の詩、其の姓名を失へり。)

徂徠先生、李于鱗に推服し、復古學を唱ふ、海內の文章之れが爲に一變す、其の人と爲りも亦相類す、錢謙益曰く、于鱗、進士に擧げられ、選を候ち里居し、憤を發し書を讀み、刺深鉤摘、務めて人の置きて解せざる所を取り、撫拾して以て資と爲す、而して其の矯悍勁鷙の材、以て之れを濟すに足り、高く自ら誇許す、詩は天寶より以下、文は西京より以下、誓ひて吾が毫素を汚さずと、矯悍勁鷙の四字、亦以て先生を稱すべきなり。

徂徠集に、孔子の賛あり、云ふ、日本の夷人、物茂卿と、或は其國體を得ざるを譏る、按ずるに、紂に億兆の夷人あり、夷人は猶平人のごときなり、書の孔傳に、平人は凡人なり、此の翁虛喝、人の耳目を駭かす、以て其の一斑を見るべきなり。

助語の文に於ける、關係極めて大なり、虛字も亦忽にすべからず、孟子曰く、牛羊茁として壯長する而已矣(古文蒼勁)韓文公曰く、牛羊遂ぐる而已矣(簡にして而して能

而已矣、簡而能古王臨川曰、牛羊蕃而已矣、已離古色史記留侯世家、穀城山下之黃石、卽我矣、漢書作已、列仙全傳作也、子長最妙、孟堅次之、然亦奇也、如列仙全傳、則不襲舊套耳、洪文科、語竊今古、論圯上老人事、其說確實、益覺矣字之妙、其文云、圯上老人、古今異人也、世云、黃石是其後身、誤矣、當時命子房、取履橋下、已知孺子可敎、但惜其悻悻一擊客氣未消、故抑授書而爲王者師焉、曰十三年見黃石、卽我乃仙去、託言豈眞也耶、獨知十三年後從高祖、過穀城山下、爲奇耳、子房取黃石而葆祠、是無忘本師之誼、亦豈以黃石爲眞老人也。

費袞梁溪漫志、韓退之祭十二郞文一篇、大

く古)王臨川曰く、牛羊蕃する而已矣(已に古色を離る)史記留侯世家に、穀城山下の黃石は卽ち我なり矣、漢書に已に作る、列仙全傳に也に作る、子長最も妙、孟堅之れに次ぐ、然れども、亦奇なり、列仙全傳の如きは、卽ち舊套を襲はざるのみ、洪文科の語竊今古に、圯上老人の事を論ず、其の說確實、益矣の字の妙を覺ゆ、其の文に云ふ、圯上老人は、古今の異人なり、世に云ふ、黃石は是れ其の後身と、誤れり、當時、子房に命じて、履を橋下に取らしめ、已に孺子の敎ふべきを知る、但だ其の悻々一擊、客氣未だ消せざるを惜む、故に抑へて書を授け、而して王者の師と爲す、曰く、十三年にして黃石を見ば、卽ち我乃ち仙し去るなり、託言豈に眞ならんや、獨り十三年の後、高祖に從ひて、穀城山下を過ぐるを知るを、奇と爲すのみ、子房黃石を取りて葆祠す、是れ本師を忘るゝことと無きの誼、亦豈に黃石を以て眞の老人と爲さんや。

費袞の梁溪漫志に、韓退之の十二郞を祭る文一篇、大率

率皆用助語、其最妙處、自其信然邪以下、至幾何不從汝而死也一段、僅三十句、凡句尾連用邪字者三、連用乎字者三、連用也字者七、幾於句句用助辭矣、而反覆出沒、如怒濤驚湍、變化不測、非妙於文章者、安能及此、後歐陽公作醉翁亭記、繼之、又特盡紆餘不迫之態、余謂醉翁亭記、自首至尾、多用也字、此體蓋出於周易雜卦一篇。

蘇威嘗言於隋主曰、臣先人每戒臣云、唯讀孝經一卷、足以立身治國、何用多爲、趙普再相、人言、普山東人、所讀者止論語、太宗嘗問普、普對曰、臣平生所知誠不出此、昔以其半輔太祖、今欲以其半輔陛下致太平、是皆萬世不易之言也、然不徧讀天下書、亦不能通、

皆助語を用ふ、其の最妙の處は、其れ信に然る邪より以下、幾何か汝に從ひて而して死せざらんやの一段に至る、僅に三十句、凡そ句尾に邪の字を連用する者三つ、乎の字を連用する者三つ、也の字を連用する者七つ、幾んど句々に於て助辭を用ふ、而して反覆出沒して、怒濤驚湍、變化測られざるが如し、文章に妙なる者に非ざれば、安んぞ能く此に及ばん、後、歐陽公、醉翁亭の記を作りて、之に繼ぐ、又特に紆餘不迫の態を盡すと、余謂ふ、醉翁亭の記は、首より尾に至るまで、多く也の字を用ふ、此の體は、蓋、周易雜卦の一篇より出づ。

蘇威嘗て隋主に言ひて曰く、臣の先人每に臣を戒めて云ふ、唯だ孝經一卷を讀めば、以て身を立て國を治むるに足れり、何ぞ多きを用ふるを爲さんと、趙普再び相たり、人言ふ、普は山東の人、讀む所は論語に止る、太宗嘗て普に問ふ、普對へて曰く、臣平生知る所は、誠に此に出です、昔、其半を以て太祖を輔く、今其の半を以て陛下を輔け、太平を致さんと欲す、是れ皆萬世不易の言なり、然れども、徧く天下の書を讀まざれば、亦天下の事に通ずること能はず、孔子曰く、博く學びて而して之れを約に之を

天下事、孔子曰博學而約取之、讀書之法以此爲最、唐伯虎詩、宋朝受命政維新、魏國稱爲社稷臣、空使終年讀論語、如何不做託孤人、千古公論、晉有慙色、

隋煬帝勞楊素曰、古人有言曰、疾風知勁草、世亂有誠臣、公得之矣、唐太宗賜蕭瑀詩曰、疾風知勁草、版蕩識誠臣、此改世亂有三字耳、然其君臣美惡相去邈如霄壤、藝林伐山云、疾風知勁草、嚴霜識貞木、晉顧凱之詩也。

王仲宣登樓賦、古今詩中用之不少、或謂登閣亦可、魏書李騫曾爲釋情賦曰、含毫有思、斐然成賦、猶潘生之秋興、王子之登閣。

溫飛卿以蒼耳子對白頭翁、並是藥名、清許彬取作一聯云、道上鉤衣蒼耳子、風前貼耳白頭翁、烏有白頭翁、此奪胎法、世說補、曾有

取ると、讀書の法、此れを以て最と爲す。(唐伯虎の詩に、宋朝命を受けて政維れ新なり、魏國稱して社稷の臣と爲す、空しく終年をして論語を讀ましむ、如何んぞ孤を託するの人と做らざらんと、千古の公論、晉、慙色有らん。)

隋の煬帝、楊素を勞して曰く、古人言へるあり、曰く「疾風勁草を知り、世亂れて誠臣有り」と、公之れを得たり、唐の太宗、蕭瑀に賜ふ詩に曰く、「疾風勁草を知り、版蕩誠臣を識る」と、此れ世亂有の三字を改むるのみ、然れども、其の君臣の美惡、相去ること邈として霄壤の如し、藝林伐山に云ふ「疾風勁草を知り、嚴霜貞木を識る」とは、晉の顧凱之の詩なり。

王仲宣の登樓賦、古今詩中、之を用ふること少からず、或は登閣と謂ふも、亦可なり、魏書に、李騫曾、釋情賦を爲る、曰く、「毫を含んで思ふこと有り、斐然として賦を成す、猶ほ潘生の秋興、王子の登閣のごとしと。

溫飛卿、蒼耳子を以て白頭翁に對す、並に是れ藥名、清の許彬取りて一聯を作りて云ふ「道上衣を鉤す蒼耳子、風前耳に貼す白頭翁」、烏に白頭翁あり、此れ奪胎法なり、世說補に、曾て白頭烏有り、吳の殿前に集る、孫權、群臣に問ふ

白頭烏、集呉殿前、孫權問群臣、此何鳥也、諸葛元遜對云、此名白頭翁、張輔呉自以坐中最老、疑元遜戲之、因曰、恪欺陛下、未嘗聞鳥名白頭翁者、試使恪復求白頭母、元遜曰、鳥名鸚母、未必有對、試使輔呉復求鸚父、張不能答、姜寶節白頭翁鳥詩云、霜鬢逢春可自由、老人端的爲多愁、不知小鳥緣何事、也向花前白了頭、往歲海舶貢白頭翁、適來京師、梅莊源先生、有聞名倘怕白頭翁之句、不及姜詩遠甚。

謝在杭五雜爼云、人有頭斷而不死者、神識未散耳、非關勇也、傳記所載若花敬定、喪元之後猶下馬盥手、歸浣紗女無頭之言乃仆、賈雍至營問將佐、有頭佳乎無頭佳乎、咸泣

此何の鳥ぞや、諸葛元遜對へて云く、此を白頭翁と名づくと、張輔呉、自ら坐中にて最も老ひたるを以て、元遜の之れに戲るかと疑ひ、因りて曰く、恪、陛下を欺けり、未だ嘗て鳥に白頭翁と名づく者を聞かず、試に恪をして、復た白頭母を求めしめよ、元遜曰く、鳥、鸚母と名づくるも、未だ必ずしも對有らず、試に輔呉をして、復た鸚父を求めしめよと、張答ふる能はず、姜寶節の白頭翁鳥の詩に云ふ「霜鬢春に逢ふ自由なる可し、老人端的多愁の爲なり、知らず小鳥何事にか緣る、也た花前に向つて頭を白了す」往歲、海舶、白頭翁を貢す、適に京師に來る、梅莊源先生「名を聞いて倘怕る白頭翁」の句あり、姜の詩に及ばざる遠きこと甚し。

謝在杭の五雜爼に云ふ、人、頭斷ちて而して死せざる者あり、神識未だ散ぜざるのみ、勇に關するに非ざるなり、傳記の載する所、花敬定の若き、元を喪ふの後、猶馬より下り、手を盥ひ、浣紗女の頭無しとの言を聞て乃ち仆ると、賈雍、營に至り、將佐に問ふ、頭有る佳なりや、頭無き佳なりやと、咸泣きて言ふ、頭有る佳なりと、答へて曰く、頭

言有頭佳、答曰、無頭亦佳、乃死、蓋其英氣不亂爾、余謂、頭斷而不即死者、理或有之、聞聲發言、絶無之事、在杭嘗曰、言固有習聞而不覺其害於理者、可爲一笑、在杭此語、操戈自戕也。

余五六年前讀一書、有鷓鴣瘴字、謂黃茆青草之類耳、後閱北戸錄、廣之南新勤春十州、呼爲南道、多鷓鴣、凡養之俗忌以手頻觸其背、犯者即多病顫而卒、土人謂爲鷓鴣瘴、桂海虞衡志、南人養鷓鴣者云、此物出炎方、稍北、中冷則發瘴噤戰、如人患寒熱、以柑子飼之則愈、不然必死、據此則、鷓鴣亦發瘴、不止人也。

近時作家率好宋詩、而高李所選唐詩諸本、

無きも亦佳なりと、乃ち死す、蓋、其の英氣亂れざるのみと、余謂へらく、頭斷ちて而して即ち死せざる者、理或はこれ有らん、聲を聞き言を發す、絶えて之の事無し、在杭嘗て曰く、言固より習聞して而して其の理に害あるを覺えざる者あり、一笑を爲すべしと、在杭此の語、戈を操りて自ら戕するものなり。

余五六年前に一書を讀む、鷓鴣瘴の字あり、謂へらく、黃茆青草の類のみと、後に北戸錄を閲するに、廣の南、新勤春の十州、呼びて南道と爲す、鷓鴣多し、凡そ之れを養ふ、俗、手を以て頻に其の背に觸るゝことを忌む、犯す者は、即ち多く顫を病みて卒す、土人謂ひて鷓鴣瘴と爲す、桂海虞衡志に、南人、鷓鴣を養ふ者云ふ、此の物、炎方より出づ、稍ゝ北し、冷に中れば、則ち瘴を發し噤戰す、人の寒熱を患ふるが如し、柑子を以てこれを飼へば則ち愈ゆ、然らざれば、必ず死すと、此れに據れば、則ち鷓鴣も亦瘴を發す、止に人のみならざるなり。

近時の作家、率ね宋詩を好む、而して高李の選する所の

至以覆醬瓿、余謂、物極而變、二三十年後必有興起者、竊撰唐詩正聲箋注、以俟來者、古人云、文章固關氣運、亦係習尙、非人力所能挽回、余於詩亦云、周南峯云、閑閱風騷萬卷詩、拈花摘葉尙新奇、莫嫌句裡無唐律、唐句吟成不入時、和漢今古同一感慨。

宋犖漫堂說詩云、詩者性情之所發、三百篇離騷尙已、漢魏高古不可驟學、元嘉永明以後、綺麗是尙、大雅寖衰、獨唐人諸體咸備、鏗鏘軒昂、爲風雅極致、顧篇什浩繁、別裁不易、高廷禮品彙、庶幾大觀、廷禮又拔其尤者、爲正聲一編、近代庶常館課、與文章正宗、並誦習之、蓋詩家之正軌也、學者從此入門、趣向已定、更恭覽品彙之全編、考證三唐之正變、

唐詩諸本、以て醬瓿を覆ふに至る、余謂ふ、物極りて而して變ず、二三十年の後、必ず興起する者有らんと、竊に唐詩正聲箋注を撰し、以て來者を俟つ、古人云ふ、文章固より氣運に關す、亦習尙に係る、人力の能く挽回する所に非ず、余詩に於ても亦云ふ、周南峯云ふ「閑に風騷萬卷の詩を閱す、花を拈し葉を摘んで新奇を尙ぶ、嫌ふこと莫れ句裏に唐律無きを、唐句吟成つて時に入らず」、和漢今古同一感慨。

宋犖の漫堂說詩に云ふ、詩は性情の發する所、三百篇・離騷は尙し、漢魏は高古、驟に學ぶべからず、元嘉・永明以後は、綺麗是れ尙ぶ、大雅寖く衰ふ、獨り唐人の諸體咸備り、鏗鏘軒昂、風雅の極致たり、顧に、篇什浩繁、別裁易からず、高廷禮の品彙、大觀に庶幾し、廷禮又其の尤なる者を拔き、正聲一編を爲る、近代庶常館課、文章正宗と、並に之れを誦習す、蓋、詩家の正軌なり、學者此れより門に入り、趣向已に定らば、更に恭く品彙の全編を覽、三唐の正變を考證し、然る後に、上は則ち曹・陸・陶・謝・阮・鮑の六七名家に溯源し、又、李杜大家を探索し、以て其の根柢を植し、下

然後、上則溯源於曹陸陶謝阮鮑六七名家、又探索於李杜大家、以植其根柢、下則汎濫於宋元明諸家、所謂取材富、而用意新者、不妨瀏覽以廣其波瀾、發其才氣、久之、源流洞然、自有得於性之所近、不必撫唐、不必撫古、亦不必撫宋元明、而吾之眞詩觸境流出、釋氏所謂信手拈來、莊子所謂螻蟻稊稗瓦甓無所不在、此之謂悟入境、悟則隨吾興會取之、漢魏亦可、唐亦可、宋亦可、不漢魏、不唐、不宋、亦可、無暇摸古人、並無暇避古人、而詩候熟矣、不則胸無定見、隨波而靡、譬一盲導之於前、群盲隨之於後、曰左、曰右、莫敢自必、嗚乎可哀也已、余欲載此文于唐詩箋注卷端、以爲初學指南、姑記於此。

は則ち宋元明諸家に汎濫す、謂はゆる材を取ること富み而して意を用ふること新なる者、瀏覽以て其の波瀾を、廣め、其の才氣を發するに妨げず、之れを久しくして、源流洞然、自ら性の近き所を得ることあり、必ずしも唐を撫せず、必ずしも古を撫せず、亦必ずしも宋元明を撫せず、而して吾の眞詩、境に觸れて流出す、釋氏の謂はゆる手に信せて拈し來る、莊子の謂はゆる螻蟻稊稗瓦甓も、在らざる所無し、此れを之れ悟入境と謂ふ、悟れば則ち吾が興會に隨ひて之れを取る、漢魏も亦可、唐も亦可、宋も亦可、漢魏ならず、唐ならず、宋ならざるも亦可、古人を摸するに暇無し、並に古人を避くるに暇無し、而して詩候熟す、不らざれば、則ち胸に定見無く、波に隨ひて而して靡く、譬へば、一盲之れを前に導き、群盲之れに後に隨ふ、曰く左、曰く右、敢て自ら必すること莫し、嗚呼、哀しむべきのみ、余、此の文を唐詩箋注の卷端に載せ、以て初學の指南と爲さんと欲す、姑く此に記す。

李西涯岳陽樓詩云、吳楚乾坤天下句、江湖廊廟古人心、上句用杜詩吳楚東南坼、乾坤日夜浮、下句用范仲淹岳陽樓記中語、一聯渾成、如出自然、對仗精確、氣象雄壯。

本草、菊一名傅延年、朱仲新詩云、三逕誰從陶靖節、重陽惟有傅延年、可謂佳對矣、余亦作九日詩云、掃徑未招延壽客、看山將訪辟邪翁、道書、茱萸爲辟邪翁、菊花爲延壽客、故假此二物、以消陽九之厄。

水經注、水中有物、如三四歲小兒、鱗甲如鯪鯉、射之不可入、七八月中好在磧中、自曝膝頭、似虎掌爪、常沒水中、出膝頭、小兒不知、欲取弄戲、便殺人、或曰、人有生得者、摘其皐厭、可以小使、名爲水虎者也、後漢郡國志注、引

李西涯の岳陽樓の詩に云ふ「吳楚乾坤天下の句、江湖廊廟古人の心」上句は、杜詩の「吳楚東南に坼け乾坤日夜に浮ぶ」を用ひ、下句は、范仲淹の岳陽樓の記中の語を用ふ、一聯渾成、自然に出づるが如し、對仗精確、氣象雄壯。

本草に、菊一名は傅延年、朱仲新の詩に云ふ「三逕誰か從ふ陶靖節、重陽惟だ傅延年有り」、佳對と謂ふべし、余も亦九日の詩を作りて云ふ「徑を掃ふて未だ招かず延壽客、山を看て將に訪はんとす」辟邪翁、道書に、茱萸を辟邪翁と爲し、菊花を延壽客と爲す、故に此の二物を假りて、以て陽九の厄を消す。

水經注に、水中に物有り、三四歲の小兒の如く、鱗甲は鯪鯉の如し、之れを射るも入る可からず、七八月中、好みて磧中に在り、自ら膝頭を曝す、虎掌爪に似たり、常に水中に沒し、膝頭を出だす、小兒知らずして、取りて弄戲せんと欲せば、便ち人を殺す、或は曰く、人、生きながら得る者有り、其の皐厭を摘む、以て小使すべし、名づけて水虎と爲す者なりと、後漢郡國志の注に、荆州記を引きて云ふ、

鼻字與鼻字、使字與便字、混用、今姑從原本

5

荆州記云、生得者摘其鼻厭、可小小便、名爲水虎、十道志、引襄沔記云、或有生得者、摘其鼻、可小小使之、名曰水虎、或云、皐厭者、水虎之勢也、可爲媚藥、善使內（也）、按是邦俗所稱河太郎之類。

宋之問浣紗篇云、鳥驚入松蘿、魚畏沉荷花、始余讀之、不知其佳、莊子曰、毛嬙麗姬、人之所美也、魚見之深入、鳥見之高飛、乃知宋詩有所祖焉。

猗覺寮雜記、相形家以人形如物形者佳、如班超虎頸燕頷、何尙之眞猿之類是也、余嘗聞之、豐臣太閤面如獼猴、其起匹夫、位極人臣、宜哉。

升庵外集世言、輿地圖始於漢光武披輿地

生きながら得る者、其の鼻厭を摘む、小々便す可し、名づけて水虎と爲す、十道志に、襄沔記を引きて云ふ、或は生きながら得る者あり、其の鼻を摘む、小々之を使ふべし、名づけて水虎と曰ふ、或は云ふ、皐厭とは、水虎の勢なり、媚藥と爲すべし、善く內を使ふなりと、按ずるに、是れ邦俗稱する所の河太郎の類なり。

宋之問の浣紗篇に云ふ「鳥驚いて松蘿に入り、魚畏れて荷花に沉む」始め余之れを讀みて、其の佳たるを知らず、莊子に曰く、毛嬙、麗姬は、人の美とする所なり、魚之れを見て深く入り、鳥之れを見て高く飛ぶ、乃ち知る宋の詩、祖とする所あるを。

猗覺寮雜記に、相形家、人形の物形の如き者を以て佳とす、班超の虎頸燕頷、何尙之の眞猿の類の如き、是れなり、余嘗て之れを聞く、豐臣太閤、面、獼猴の如し、其の匹夫より起りて、位、人臣を極む、宜なる哉。

升庵外集に、世に言ふ、輿地圖は、漢の光武が輿地圖を披

圖、而不知前漢淮南王傳、已有按輿地圖之語、按史記刺客傳、荊軻曰、誠得樊將軍首與燕督亢之地圖、奉獻秦王、是卽輿地圖之始。

落日謂之西日、又謂西夕、魏書彭城王勰傳、王果曰、願瞻西夕、餘光幾何、又謂山日爲山光、孟浩然詩、山光忽西落、池月漸東生。

朱子詩云、川原紅綠一時新、暮雨朝晴尤可人、書册埋頭何日了、不如抛卻覓殘春、此在朱子可也、他人則否、淸丁珠詩云、香焚寶鴨客吟哦、萬軸牙籤手自磨、此事未知何日了、著書翻恨古人多、二首轉句同用何日了三字、命意清新、不相踏襲、蓋非著書者、不解此句實際精妙也、堅瓠集、有人譏讀書者曰、春天豈是讀書天、夏日炎炎正好眠、夏去秋來

くに始る、而して前漢の淮南王傳に、已に輿地圖を按ずるの語あることを知らず、按ずるに、史記の刺客傳に、荊軻曰く、誠に樊將軍の首と、燕の督亢の地圖とを得て、秦王に奉獻せんと、是れ則ち輿地圖の始なり。

落日之れを西日と謂ふ、又、西夕と謂ふ、魏書彭城王勰傳に、王果曰く、西夕を願瞻す、餘光幾何ぞ、又、山日を謂ひて山光と爲す、孟浩然の詩に、「山光忽ち西に落つ、池月漸く東に生ず。」

朱子の詩に云ふ、「川原紅綠一時に新なり、暮雨朝に晴れて尤も人に可なり、書册頭を埋めて何の日か了せん、如かず抛卻して殘春を覓めんには」此れ朱子に在りては可なり、他人は則ち否なり、淸の丁珠の詩に云ふ「香は寶鴨を焚き客吟哦す、萬軸牙籤手自ら磨す、此の事未だ知らず何の日か了せん、書を著して翻って恨む古人の多きを」二首、轉句に、同じく何日了の三字を用ひ、命意清新、相ひ踏襲せず、蓋、書を著す者に非ざれば、此の句の實際精妙なるを解せざるなり、堅瓠集に、人の讀書を譏る者あり、曰く「春天豈に是れ讀書の天ならん、夏日炎々正に眠るに好し、夏去り秋來つて冬又到る、且つ將に收拾して殘

冬又到、月將收拾過殘年、余謂、如是消磨歲月、終是一癡漢耳、韓退之詩、時秋積雨霽、新涼入郊墟、燈火稍可親、簡編可卷舒、實讀書好時節、人間至樂不過之。

凡欲著書者、先顧吾才力、而後起草矣、不然、所謂志大而才疎、一生辛苦竟無所成、趙甌北詩、少時學語苦難圓、只道工夫半未全、到老始知非力取、三分人事七分天。

余讀朱子勸學文、因謂、學者不可須臾棄日、棄日猶棄吾身、身名美惡在學一字、而其爲志、要不切迫、如夫嘔血瀕死、皆切迫故也。

蕉葉柿葉桐葉皆能受墨、古今題者多、齊書、徐伯珍少孤貧、書竹葉及地學字、則竹葉亦可書也。

年を過さんとす」、余謂ふ、是如くの歲月を消磨す、終に是れ一癡漢のみ、韓退之の詩に「時秋にして積雨霽れ、新涼郊墟に入る、燈火稍親む可く、簡編卷舒す可し」と實に讀書の好時節、人間の至樂之れに過ぎず。

凡そ書を著さんと欲する者は、先づ吾が才力を顧みて、而して後に草を起す、然らざれば、謂はゆる志大にして而して才疎なり、一生の辛苦竟に成る所無し、趙甌北の詩に「少時語を學んで圓なり難きに苦む、只だ道ふ工夫半は未だ全からずと、老に到つて始めて知る力取に非ざるを、三分は人事七分は天。」

余、朱子の勸學の文を讀み、因りて謂へらく、學者須臾も日を棄つ可からず、日を棄つるは、猶、吾身を棄つるがごとし、身名の美惡は、學の一字に在り、而かも其の志たる切迫ならざるを要す、如し夫れ嘔血して死に瀕するは皆切迫の故なり。

蕉葉・柿葉・桐葉は、皆能く墨を受く、古今題する者多し、齊書に、徐伯珍少くして孤貧なり、竹葉及び地に書し、字を學ぶ、則ち竹葉も亦書す可きなり。

司馬公詩話、寇萊公貶雷州司戶參軍、及境、吏以圖獻、閱之首載、郡東南抵海岸凡十里、公恍然悟曰、吾少時有詩、到海只十里、過山應萬重、人生得喪豈偶然耶、古人所謂詩讖者也、萊公詩才融遠、年十九、進士及第、初知巴東縣、有詩云、野水無人渡、孤舟盡日橫、按此演韋蘇州野渡無人舟自橫句、一聯便好。

商山之外別有四皓、徐伯珍家甚貧窶、兄弟四人、皆白首相對、時人呼爲四皓。

友人某宿一青樓、適有浪花瞽者菊川氏、近時三絃名手、平明度殘月曲數十遍、某隔壁聽之、怪叩其故、答曰、每朝如此、然後授人、不然爲衆楚人所咻、其勤於技令人驚動、隋文帝曰、多彈曲者、如人多讀書、讀書多則能撰

司馬公の詩話に寇萊公雷州司戶參軍に貶せらる、境に及ぶ、吏圖を以て獻ず、之を閱するに、首に載す、東南海岸に抵ること凡そ十里と、公恍然として悟りて曰く、吾少時詩有り、「海に到ること只だ十里、山を過ぐ應に萬重なるべし」と、人生の得喪、豈に偶然ならんや、古人の謂はゆる詩讖なる者なり、萊公詩才融遠、年十九、進士及第、初めて巴東縣に知たり、詩あり云ふ「野水人の渡る無し、孤舟盡日橫ふ」と、按するに、此れ韋蘇州の「野渡人無く舟自ら橫ふ」の句を演す、一聯便ち好し。

商山の外、別に四皓あり、徐伯珍、家甚だ貧窶、兄弟四人、皆白首相對す、時人呼びて四皓と爲す。

友人某、一青樓に宿す、適ゝ浪花の瞽者菊川氏あり、近時三絃の名手なり、平明に殘月の曲を度す數十遍、某、壁を隔てゝ之れを聽き、怪みて其の故を叩く、答へて曰く、每朝此くの如くし、然る後に人に授く、然らざれば、衆楚人の咻する所と爲ると、其の技に勤むること、人をして驚動せしむ、隋文帝曰く、多く曲を彈ずる者は、人の多く書を讀むが如し、書を讀むこと多ければ、則ち能く書を撰す、曲を彈ずること多ければ、卽ち能く曲を造ると、是に於

書、彈曲多卽能造、出於是乎余益憤勵。東方虬嘗云、百年後可與西門豹對、鄭少師於里第、植小松七本、號七松處士、嘗曰、異代可對五柳先生、二子名號謂與古人對、其自任亦大矣、但未聞後世有虬對豹七松配五柳之語、蓋其爲人邈然不可等之故乎、近讀國朝詩別裁、倪瑞璿詩云、人生重賢豪、不在名字美、難以易相方、赤將白自比、豈遂足追配、效顰空復爾、自注、唐進士黃居難爲詩、慕白樂天、故名居難、字樂地、李赤自比李白、詩人玉屑、東坡云、余嘗舟次姑熟堂下、讀姑熟十詠、怪其語淺近不類李白、王平甫云、此李赤詩也、赤見柳子厚集、自比李白、故名赤、其後爲廁鬼所惑、以死、今觀其詩、止此、而以太

てか、余益憤勵せり。

東方虬嘗て云ふ、百年の後、西門豹と對す可しと、鄭少師、里第に於て、小松七本を植ゑ、七松處士と號す、嘗て曰く、異代、五柳先生に對す可しと、二子の名號、古人と對すと謂ふ、其の自ら任ずる亦大なり、但だ未だ後世、虬の豹に對し、七松の五柳に配するの語有るを聞かず、蓋其の人と爲り、邈然として等すべからざるの故か、近國朝詩別裁を讀に、倪瑞璿の詩に云ふ「人生、賢豪を重んず、名字の美に在らず、難は易を以て相方し、赤は白と自ら比す、豈に遂に追配するに足らんや、顰に效ふ空しく復た爾り」自注に、唐の進士、黃居難、詩を爲り、白樂天を慕ふ、故に居難と名づけ、樂地と字す、李赤、自ら李白に比す、詩人玉屑に、東坡云ふ、余嘗て舟、姑熟堂下に次す、姑熟十詠を讀む、其の語淺近にして李白に類せざるを怪む、王平甫云ふ、此れ李赤の詩なり、赤は、柳子厚集に見ゆ、自ら李白に比す、故に赤と名づく、其の後、廁鬼に惑はされて以て死す、其の詩を觀るに、止だ此れのみ、而して太白を以て自ら比す則ち其の人、心疾久し、豈に廁鬼の罪ならむや、弇州巵言に、柳子厚、李赤が廁鬼に死する事を記す、以爲へらく、其の人、李白を慕ふ、故に赤と名づくるのみ、咲ふべし

白自比、則其人心疾久矣、豈廁鬼之罪也、弇州巵言、柳子厚記李赤死廁鬼事、以爲其人慕李白、故名赤、已可咲矣、霏雪錄所載、慕太白者、張碧字太碧、慕樂天者、黃居難字樂地、又富家子杜四郞自號荀鶴、以比杜荀鶴者、尤可咲也、（唐才子傳、張碧字太碧、貞元間擧進士不第、初慕李翰林之高蹈、故其名字皆亦逼似、如司馬長卿希藺相如爲人也、天才卓絕、氣韻不凡、委興山水、投閑吟酌、言多野意、俱狀難摹之景、然則碧非赤之比也。）

李白有題隨州紫陽先生壁詩、朱子亦稱紫陽、又有寄參寥子詩、宋亦有參寥、蓋取莊子之說以爲號也、唐二人姓氏不詳、疑是道士之徒、涪翁出後漢逸民傳、山谷謫涪州別駕、因號涪翁、先是陸龜蒙亦有此稱。

陸放翁詩、烹野八珍邀父老、燒鷄四和伴兒

と、霏雪錄に載する所、太白を慕ふ者張碧、字は太碧、樂天を慕ふ者黃居難、字は樂地、又、富家の子、杜四郞、自ら荀鶴と號し、以て杜荀鶴に比する者、尤も咲ふ可きなり。（唐才子傳に、張碧字は太碧、貞元間、進士に擧げられて、第せず、初め李翰林の高蹈を慕ふ、故に其の名字、皆亦逼似す、司馬長卿の藺相如の人と爲りを希ふが如きなり、天才卓絕、氣韻凡ならず、興を山水に委し、閑に投じて吟酌す、言、野意多し、俱に摹し難きの景を狀す、然らば、則ち碧は赤の比に非ざるなり。）

李白、隨州の紫陽先生の壁に題する詩あり、朱子も亦た紫陽と稱す、又、參寥子に寄する詩あり、宋にも亦た參寥あり、蓋、莊子の說を取りて以て號と爲すなり、唐の二人姓氏詳ならず、疑ふらくは、是れ道士の徒ならん、涪翁は後漢逸民傳に出づ、山谷、涪州の別駕に謫せらる、因りて涪翁と號す、是れより先き、陸龜蒙も亦此の稱あり。

陸放翁の詩に「野八珍を烹て父老を邀へ、鷄四和を燒い

童、（一作魏野）壺中贅錄、山林窮和香、以荔枝殼甘蔗滓乾柏葉黄連和焚、又加松毬棗核梨核、皆妙。

某甲出一句以求對云、初看神馬藻、乙云、未識佛牛花、滿座嗟賞問其形狀、曰我未識也、一時滑稽、固無此花、按佛桑花與神馬藻自然確對。

坦齋通編云、詩人好改易地名以就句法、如大孤山旁有女兒港、小孤山對岸有澎浪磯、韓子蒼詩、小姑已嫁彭郎去、大姑常隨女兒住、四者之中所不改者女兒港耳、蜀大散關有喜歡浦、東坡入蜀詩、人遇喜歡來遠夢、地名皇恐泣孤臣、自下而上第一灘、在萬安縣前、名黄名灘、坡乃更爲皇恐以對喜歡、按東

て兒童を伴ふ」（一に魏野に作る）壺中贅錄に、山林窮和香、荔枝殼・甘蔗滓・乾柏葉・黄連を以て和焚す、又、松毬・棗核・梨核を加ふ、皆妙なり。

某甲、一句を出し、以て對を求む、云く「初て神馬藻を看る」、乙云く「未だ識らず佛牛花」と、滿座嗟賞し、其の形狀を問ふ、曰く、我未だ識らざるなり、一時の滑稽、固より此の花無し、按ずるに、佛桑花と神馬藻と、自然の確對。

坦齋通編に云ふ、詩人好みて地名を改易し、以て句法を就す、大孤山の旁に女兒港あり、小孤山の對岸に澎浪磯あり、韓子蒼の詩に「小姑は已に彭郎に嫁し去り、大姑は常に女兒に隨つて住す」の如き、四者の中、改めざる所の者は女兒港のみ、蜀の大散關に喜歡浦あり、東坡の蜀に入る詩に「人は喜歡に遇ふて遠夢を來し、地は皇恐と名づけ孤臣を泣かしむ」、下よりして上れば、第一灘は、萬安縣の前に　り、黄名灘と名づく、坡乃ち更めて皇恐と爲し、以て喜歡に對す、按ずるに、東坡集に云ふ、予初め嶺南に

坡集云、予初謫嶺南、過田氏水閣、東南一峯豐下銳上、俚人謂鷄籠山、予更名獨秀峯、今復過之、戲留一絕、倚天巉絕玉浮屠、肯與彭郞作小姑、此猶李靑蓮改九子山爲九華山、歐陽公歸田錄、世俗傳訛、惟祠廟之名尤甚、江南有大小孤山、而世俗轉孤爲姑、江側有一石磯、謂之澎浪磯、轉爲彭郞云、彭郞小姑婿也、據此則子蒼直用世俗所稱之名耳、坡公亦旣取以爲句、雲林遺事、元鎭有雅宜山竹枝詞二首、舊名娜如山、蓋虞道園所名、然未若娜如之近古也、楊誠齋詩云、里名只道新名好、不道新名誤後人、二句最妙、吾邦先儒私改地名、多用漢士字面、雅則雅矣、但恐其地後世難辨、況有陵谷之變乎、語曰、旣往

謫せられ、田氏の水閣を過ぐ、東南の一峯、豐下鋭上、俚人鷄籠山と謂ふ、予更に獨秀峯と名づく、今復之を過ぐ、戲に一絕を留む、「天に倚る巉絕玉浮屠、嘗て彭郞と小姑と作る」、此れ猶、李靑蓮の九子山を改めて、九華山と爲すがごとし、歐陽公の歸田錄に、世俗訛を傳ふ、惟だ祠廟の名尤も甚し、江南に大小孤山あり、而して世俗、孤を轉じて姑と爲す、江側に一石磯あり、之れを澎浪磯と謂ふ、轉じて彭郞と爲す、云ふ、彭郞は小姑の婿なりと、此れに據れば、則ち子蒼直に世俗の稱する所の名を用ふるのみ、坡公も亦旣に取りて以て句を爲す、雲林遺事に、元鎭に、雅宜山竹枝詞二首あり、舊名は娜如山、蓋、虞道園の名づく所、然れども、未だ娜如の古に近きに若かざるなり、楊誠齋の詩に云ふ「里名只だ道ふ新名好しと、道はず新名後人を誤ると」二句最も妙なり、吾が邦の先儒、私に地名を改めて、多く漢土の字面を用ふ、雅は則ち雅なり、但だ恐くは其の地、後世辨じ難し、況んや陵谷の變あるをや、語に曰く、旣往は咎めず、來者は追ふ可しと、操觚の士、愼み

不咎、來者可追、操觚之士、愼勿效顰。

吾勢大湊、人家一千戶、商船渡東洋者、多泊于此、以待風便、余嘗欲作竹枝詞、或病其名不雅、按通雅云、大湊爲四方所輻湊也、然則大湊之名不失當矣、始余意以爲俗、反是余之不免陋見耳。

皇市菘飲論云、醉花宜晝、（襲其光也）醉雪宜夜、（樂其靜也）醉得意宜䜩唱、（宣其和也）醉將離宜擊鉢、（壯其神也）醉文人宜謹節奏愼章程、（畏其侮也）醉俊人宜益觥盂加旗幟、（助其烈也）醉竹宜暑、（資其清也）醉水宜秋、（泛其爽也）余謂、此文眞得酒中趣矣、韓文公詩云、長安衆富兒、盤饌羅羶葷、不解文字飲、惟能醉紅裙、文公嘗嘆之、今時解文字飲者、宜其不易得也。

て顰に效ふこと勿れ。

吾が勢の大湊は、人家一千戶、商舶の東洋を渡る者は、多く此に泊し、以て風の便を待つ、余嘗て竹枝詞を作らんと欲し、或は其の名の雅ならざるを病ふ、按ずるに、通雅に云ふ、大湊は、四方の輻湊する所たりと、然らば則ち大湊の名は當を失せざるなり、始め余の意に以て俗と爲す、反つて是れ余の陋見を免れざりしのみ。

皇甫崧の飲論に云ふ、花に醉ふは晝に宜し、（其の光を襲ふなり）雪に醉ふは夜に宜し、（其の靜を樂むなり）得意に醉ふは䜩唱に宜し、（其の和を宣ぶるなり）將に離れんとするに醉ふは、擊鉢に宜し、（其の神を壯にするなり）文人に醉ふは、宜しく節奏を謹み、章程を愼むべし、（其の侮を畏るゝなり）俊人に醉ふは、宜しく觥盂を益し、旗幟を加ふべし、（其の烈を助くるなり）竹に醉ふは暑に宜し（其の清を資するなり）水に醉ふは秋に宜し、（其の爽に泛ぶなり）余謂ふ、此の文、眞に酒中の趣を得たり、韓文公の詩に云ふ、「長安の衆富兒、盤饌羶葷を羅ぬ、文字の飲を解せず、惟だ能く紅裙に醉ふ」、文公嘗て之れを嘆ぜり、今時、文字の飲を解する者、宜べなり其の得易すからざること。

蜀都雜抄、嘉定州有鳥、一名山和尙、一名雨道士、堪作對偶、按楊升庵鷓鴣天云、秋水澄淸勝酒醅、野烟籠樹似樓臺、彈聲林鳥山和尙、寫字寒蟲水秀才、乘興去興闌回、夕陽影裡記徘徊、正思修禊明年約、無奈鳴騶得得催、水秀才比雨道士、音韻整而屬對佳、古人所謂、可以衡秤言輕重不偏也、山和尙卽山鵲也、水秀才、狀似蚊而大、游泳水面、池中多有之。

吾鄕後輩讀書不多、而其於詩、險覓是務、自謂不如此做、則無一警策、句句常套、或其寫實境、不知取舍、至有蛙翻蛚死之弊、遂令讀者不可解其爲何等語也、震澤長語云、世謂詩有別材、是固然矣、然亦須博學、亦須精思、

蜀都雜抄に、嘉定州に鳥あり、一は山和尙と名づけ、一は雨道士と名づく、對偶を作すに堪へたり、按ずるに、楊升庵の鷓鴣天に云ふ「秋水澄淸酒醅に勝り、野烟樹を籠めて樓臺に似たり、聲を彈ずる林鳥山和尙、字を寫す寒蟲水秀才、興に乘じて去り興闌にして回る、夕陽影裡に徘徊を記す、正に思ふ修禊明年の約、奈んともする無し鳴騶得々催す」水秀才を雨道士に比すれば、音韻整ひて而して屬對佳なり、古人の謂はゆる衡秤を以て、輕重を言ふに偏ならずといふものなるべし、山和尙は、卽ち山鵲なり、水秀才の狀、蚊に似て大、水面に游泳す、池中に多く之れ有り。

吾が鄕の後輩、讀書多からず、而して其の詩に於て、險覓是れ務む、自ら謂ふ、此くの如く做さざれば、則ち一警策無く、句々常套と、或は其の實境を寫す、取舍を知らず、蛙翻蛚死の弊あるに至らん、遂に讀者をして、其の何等の語たるを解すべからざらしむ、震澤長語に云ふ、世に謂ふ、詩に別材有りと、是れ固より然り、然れども、亦須らく博學すべく、亦須らく精思すべし、唐人、一生の心を五字

唐人用一生心於五字、故能巧奪天工、今人學力未至、舉筆便欲題詩、如何得到古人佳處、眞是至當之論也、賈長江詩云、吟安五字句、以費一生心、長語用此。

全唐詩話云、權龔褒好賦詩、而不知聲律、常作秋日詠懷詩曰、簷前飛七百、雪白後園僵、飽食房裡側、家糞集野蜋、參軍問之、權曰、鶺子簷前飛直七百、（七修類稿、鶺子者鶺、乃擊鳥飛不太高、擬今紙鳶之不起者、）洗衫掛後園白如雪、飽食房中側臥家裡、便轉集得野澤蜣蜋、聞者笑之、拊掌錄云、宋哲宗朝、宗室子有好爲詩而鄙俚可笑者、嘗作卽事詩云、日暖看三織、風高鬬兩廂、蛙翻白出潤、蚓死紫之長、撥聽琶梧鳳、饅拋接建章、歸來屋裡坐、打殺又何妨、或問詩意、答曰、始

に用ふ、故に能巧、天工を奪ふ、今人、學力未だ至らず、筆を擧げて、便ち詩を題せんと欲す、如何んぞ古人の佳處に到ることを得んと、眞に是れ至當の論なり、賈長江の詩に云ふ「吟、五字の句を安じ、以て一生の心を費す」と、長語は此れを用ふ。

全唐詩話に云ふ、權龔褒好みて詩を賦す、而かも聲律を知らず、常て秋日詠懷の詩を作りて曰く「簷前七百飛び、雪白後園に僵る、房裡に飽食し側す、家糞野蜋を集む」、參軍之れを問ふ、權曰く、鶺子簷前に飛ぶ、直ひ七百、（七修類稿に、鶺子は鶺、乃ち鳥を擊ち、飛ぶことと太だ高からず、今紙鳶の起らざる者に擬す）衫を洗ひて後園に拆く白く、して雪の如し、房中に飽食し、家裡に側臥す、便轉して野澤の蜣蜋を集め得たりと、聞く者之れを笑ふ、拊掌錄に云ふ、宋の哲宗の朝、宗室の子、好みて詩を爲り、而して鄙俚笑ふべき者あり、嘗て卽事の詩を作りて云ふ「日暖にして三織を看る、風高くして風廂に鬬ふ、蛙翻て白出潤く、蚓死して紫之長し、撥して聽く琶梧の鳳饅拋つて建章に接す歸來屋裡に坐す、打殺す又何ぞ妨げん或人詩の意を問ふ、答へて曰く、始め三蜘蛛の網を簷間に織るを見る、

見蜘蛛織網于簷間、又見雀鬪于兩廂、有死蛙、翻腹似出字、死蚓如之字、方喫飯、聞鄰家琵琶作鳳棲梧、食饅頭未畢、閽人報建安章秀才上謁、迎客既歸、見內門上畫鍾馗擊小鬼、故云、打殺亦何妨、哲宗嘗灼艾、諸內侍欲娛上、或舉其詩、上咲不已、竟不灼艾、而罷、友人某性麤拙、嘗與諸老先生夜集、置酒論志、老輩責某不學、責厲切至、時爐中煨芋、某即席賦詩、有芋魁鞭策之句、滿座爲之絕倒、後遂爲吾社故事、見詩之有鹵莽者、輒謂爲芋魁鞭策、與夫二詩、其愚相類、比李華芋魁遭遇之語、不啻天淵。

龍堂詩話、鷄聲茅店月、人跡板橋霜、人但知其能道羇愁野況於言意之表、不知二句中

又雀の兩廂に鬪ふを見る、死蛙ありて腹を翻す、出の字に似たり、死蚓は之の字の如し、方に飯を喫して、鄰家の琵琶、鳳栖梧を作すを聞く、饅頭を食ひて未だ畢らざるに、閽人、建安の章秀才上謁すと報す、客を迎へて既に歸る、內門上に、鍾馗の小鬼を擊つを畫くを見る、故に云く、打殺も亦何ぞ妨げんと、哲宗嘗て艾を灼す、諸內侍、上を娛ましめんと欲し、或は其の詩を擧ぐ、上咲ひて已まず、竟に灼艾せずして罷む、友人某、性麤拙、嘗て諸老先生と、夜集して「酒を置き志を論ず、老輩、某の不學を責む、責厲切至、時に爐中に芋を煨す、某即席詩を賦す、芋魁鞭策の句有り、滿座之れが爲に絕倒す、後遂に吾が社の故事と爲る、詩の鹵莽ある者を見れば、輒ち謂ひて芋魁鞭策と爲す、夫の二詩と、其の愚相類す、李華が芋魁遭遇の語に比すれば、啻に天淵のみならず。

龍堂詩話に「鷄聲茅店の月、人跡板橋の霜」、人但だ其の能く羇愁野況を言意の表に道ふを知りて、二句中に一二の閑字をも用ひざるを知らず、止だ緊關物色の字樣を提掇

不用一二閑字、止提掇出緊關物色字様、而音韻鏗鏗、意象具足、始爲難得、若强排硬語、不論其字面之淸濁音韻之諧舛、而云我能寫景用事、豈可哉。

能取古人詩句、如自其肺腑中出者、是亦竊狐白裘之手、陳沂震試院卽事云、晝戟森嚴晝漏遲、凝香燕寢日斜時、（韋蘇州詩、兵衞森晝戟、燕寢凝淸香。）柝聲繞院人聲寂、滿箔春蠶正吐絲、（歐陽公試院詩、無譁戰士銜枚勇、下筆春蠶食葉聲。）

吾友山子亭云、往年菩提山萱堂有一老僧、晨起禮佛、偶見一佛臥其龕前、狀如涅槃、謂是眞佛、念誦懇至、俄而佛起翛然凌空、立於瀑布巖上、容色端嚴、五雲團繞、久之而滅、時僧精神恍惚、法侶知其爲狐所魅、修符除之、

し出す、而して音韻鏗々、意象具足す、始より得難しと爲す、若し强ひて硬語を排し、其の字面の淸濁、音韻の諧舛を論ぜず、而して云ふ、我能く景を寫し事を用ふと、豈に可ならんや。

能く古人の詩句を取り、其肺腑中より出だすが如き者、是れも亦狐白裘を竊むの手なり、陳沂震の試院卽事に云ふ「晝戟森嚴晝漏遲し、香を凝らす燕寢日の斜なる時、（韋蘇州の詩に兵衞晝戟森たり、燕寢淸香を凝らす）柝聲院を繞りて人聲寂たり、滿箔の春蠶正に絲を吐く」（歐陽公の試院の詩に、譁無く戰士枚を銜んで勇み、筆を下して春蠶葉を食ふ聲）

吾が友、山子亭の云ふ、往年、菩提山の萱堂に、一老僧あり晨に起きて佛に禮す、偶一佛の其の龕前に臥するを見る、狀、涅槃の如し、謂ふ是れ眞佛と、念誦懇至す、俄にして佛起ち、翛然と空を凌ぎ、瀑布の巖上に立つ、容色端嚴、五雲團繞す、之れを久しくして滅す、時に僧、精神恍惚たり、法侶、其の狐に魅せらるゝを知り、符を修し之れを除く、竟に他異無しと、余始め之れを聞きて、以て虛誕と爲す、

5

竟無他異、余始聞之以爲虛誕、然世所傳奇譎之事、率出於惑、佞佛之與淫色、大惑易生焉、狐之惑人、多乘是而逞其魅、亦不足爲怪也。

佛氏有四大、空風火水是也、道家亦有四大、名同而實異、淮南子道應訓、老子曰、天大地大、道大王亦大、域中有四大、而王處其一焉、以言其能包裹之也。

星河謂之秋河、謝玄暉詩、秋河曙耿耿、注、天漢也、又其向曉、謂曙河或殘河、陳後主詩、耿耿曙河天、韋應物詩、殘河欲曙遲、又有單用漢字者、陳後主詩、烏啼漢沒天應曙。

全唐詩、陳黯自詠豆花詩云、玳瑁應難比、斑犀定不加、天嫌未端正、滿面與妝花、此似詠

然れども、世の傳ふる所の奇譎の事は、率ね惑より出づ、佞佛と淫色と、大惑生じ易し、狐の人を惑はす多くは是れに乘じて而して其の魅を逞くす亦怪むを爲すに足らざるなり。

佛氏に四大有り、空・風・火・水、是れなり、道家にも亦四大有り、名は同じくして而して實は異なり、淮南子道應訓に、老子曰く、天大、地大、道大、王も亦大、域中に四大有り、而して王其の一に處ると、以て其の能く之れを包裹するを言ふなり。

星河之れを秋河と謂ふ、謝玄暉の詩に「秋河曙耿々」注に、天漢なり、又、其の曉に向ふを、曙河或は殘河と謂ふ、陳の後主の詩に「耿々曙河の天」韋應物の詩に「殘河曙んと欲して遲し」又、漢の字を單用する者あり、陳の後主の詩に「烏啼き漢沒して天應さに曙くべし。」

全唐詩に、陳黯自ら豆花を詠ずる詩に云ふ「玳瑁も應に比し難かるべし、斑犀定めて加へず、天未だ端正ならざるを嫌ひ、滿面與へて花を妝ふ」と此れ豆痕を詠ずる者

豆痕者、自咏二字可觀、豆花亦奇、豁字希濡泉州人、會昌迄咸通、累舉不第、集五卷今存一卷。

東坡慈湖峽詩云、此生歸路覺茫然、無數青山水拍天、猶有小舟來賣餅、喜聞墟落在山前、瀲河舟中光景與此相似、沈德潛西湖詩云、湖光宜雨最宜晴、好景偏憐夜色清、十里畫船歌舞歇、月明靜聽按箏聲、浪華橋下、遊船納涼、夜深人散、頗有此趣。

無釋道人訪余草堂、話間謂余曰、皇朝自古稱某天皇御宇、御宇二字創于漢土何代乎、余茫然失對、適鷹羽世誼在坐、質之不記、道人咲曰、白居易長恨歌、御宇多年求不得、公等何疎漏也、余輩愧伏、後閲文心雕龍詔策

に似たり、自詠の二字觀るべし、豆花も亦奇なり、豁字は希濡、泉州の人、會昌より咸通に迄るまで、累擧せらるれども第せず、集五卷、今、一卷を存す。

東坡の慈湖峽の詩に云ふ「此生歸路茫然を覺ゆ、無數の青山、水、天を拍つ、猶小舟の來つて餅を賣るあり、喜んで聞く墟落の山前に在るを」と、瀲河舟中の光景、此れと相似たり、沈德潛の西湖の詩に云ふ「湖光雨に宜しく最も晴に宜し、好景偏に憐む夜色の淸きを、十里の畫船歌舞歇み、月明にして靜に聽く箏を按ずる聲」と、浪華橋下、遊船納涼、夜深く人散じ、頗る此の趣有り。

無釋道人、余が草堂を訪はる、話間余に謂ひて曰く、皇朝古より某天皇の御宇と稱す、御宇の二字、漢土の何れの代に創まるか、余茫然として對を失す、適鷹羽世誼坐に在り、之れを質すに、記せず、道人笑ひて曰く、白居易の長恨歌に「御宇多年求むれども得ず」と、公等何ぞ疎漏なるやと、余輩愧伏す、後に、文心雕龍の詔策篇を閲するに、皇帝御宇の語あり、又、陳書宣帝紀に、大陳御宇と、蓋、六朝よ

篇、有皇帝御宇之語、又陳書宣帝紀、大陳御宇、蓋自六朝用之。

唐太子賓客薛謙光、以武后鼎銘云、上天降鑒方建隆基、爲上受命之符、獻之、隆基卽玄宗諱、王陽明擒宸濠勒石廬山、有嘉靖我邦國五字、亡何世宗卽位、年號嘉靖、平安方廣寺鐘銘有國家安康四字、神祖遂保天下、此等之事、豈偶然哉。

南部彝技養錄、吾周長俗、兒初生、槩服欵冬根汁、呼曰土五香、不知何據、愚按邦俗欵冬用蕗字、而蕗本爲甘草一名、古者初生兒多用甘草一品、蓋此其初、俗醫見方書有用蕗、以爲蕗卽欵冬、此物宜兒、遂用之、民俗無知、遞誤至于此也、余嘗客浪華、時患脚氣、或有

り之れを用ふ。

唐の太子賓客薛謙光、武后の鼎の銘に「上天鑒を降し、方に隆基を建つ」と云ふを以て、上の受命の符と爲し、之れを獻す、隆基は卽ち玄宗の諱なり、王陽明、宸濠を擒にし石を廬山に勒す「我が邦國を嘉靖す」の五字あり、何くも亡くして、世宗位に卽き、年を嘉靖と號す、平安の方廣寺の銘に「國家安康」の四字あり、神祖遂に天下を保つ、此等の事、豈に偶然ならんや。

南部彝の技養錄に、吾が周長の俗、兒初めて生る、槩ね欵冬根汁を服し、呼びて土五香と曰ふ、何の據あるを知らず、愚按ずるに、邦俗、欵冬に蕗の字を用ふ、而して蕗は、本と甘草の一名たり、古へ、初生の兒、多く甘草一品を用ふ、蓋、此れ其の初は、俗醫、方書に蕗を用ふることあるを見て、以爲へらく、蕗は卽ち欵冬なり、此の物兒に宜しと、遂に之れを用ふ、民俗無知、遞に誤りて此に至るなり、余嘗て浪華に客たる時、脚氣を患ふ、或ひと鱧の頭商陸の煮汁を勸むる者あり、是れ亦俗醫が方書に鱧魚一頭と有

勸鯉頭商陸煮汁者、是亦俗醫見方書有鯉魚一頭以爲鯉頭、蓋不學之弊一也。

自如自若、意義少異、然如若二字又相通用、任彥升齊竟陵文宣王行狀、食邑如干戶、注、如干猶若干也、演繁露、若干者、設數之言也、干猶箇也、若箇猶言幾何枚也、又說、干者、十幹自甲至癸也、亦以數言也。

漢有趙飛燕、以其善歌舞名之、後漢褚飛燕、輕勇趫捷、軍中號曰飛燕、又馬有飛燕、亦取其輕捷之意、通鑑齊紀、豫章王自東府乘飛燕東迎太子、是也。

始余寓迂叟別莊、從遊者八九人、同執薪水之役、三徑塵積、門無雜賓、時時竹外聞唔咿聲、余謂人生百年間、是樂不易得矣、橋本吉

るを見て、以て鯉の頭と爲す、蓋不學の弊は一なり。

自如・自若は、意義少しく異なり、然れども、如若の二字、又相ひ通用す、任彥升の齊の竟陵文宣王行狀に、食邑如干戶、注に、如は猶ほ若干のごときなりと、演繁露に、若干とは、數を設くるの言なり、干は猶ほ箇のごときなり、若個は猶ほ幾何枚と言ふがごときなりと、又、說く、干とは、十幹にして、甲より癸に至るなり、亦數を以て言ふなり。

漢に趙飛燕あり、其の歌舞を善くするを以て之れを名づく、後漢の褚飛燕、輕勇趫捷、軍中號して飛燕と曰ふ、又、馬に飛燕あり、亦其の輕捷の意に取る、通鑑の齊紀に、豫章王、東府より飛燕に乘り、東、太子を迎ふと、是れなり。

始め余、迂叟の別莊に寓す、從遊の者八九人、同じく薪水の役を執る、三徑塵積みて、門に雜賓無し、時々竹外に唔咿の聲を聞く、余謂へらく、人生百年の間、是の樂得易すからずと、橋本吉甫・長井不遠、最も余を推して知己と爲

甫、長井不遠、最推余爲知己、吉甫既逝、追念不已、不遠與余交誼益親、其爲人好讀書、然以多病不能勉強、余亦爲之不加一鞭。

宋順帝下詔禪位于齊、當臨軒不肯出、逃于佛蓋之下、王敬則引令升車、帝收涙謂敬則曰、欲見殺乎、敬則曰、出居別宮耳、官先取司馬家亦如此、帝泣而彈指曰、願後身世世勿復生天王家、又王世充遣梁百年酖皇泰主、皇泰主乃布席焚香禮佛、願自今已往、不復生帝王家、飲藥不能絶、以帛縊殺之、余謂二主雖曰閏位之餘、各稱尊號、主于南北、運移祚短、姦臣乘之、徒吐悲酸之語、不能以死社稷、可慨嘆哉。

す、吉甫既に逝き、追念已まず、不遠と余と、交誼益親し、其人と爲り、讀書を好む、然れども、多病を以て勉强すること能はず、余も亦之れが爲に、一鞭を加へず。

宋の順帝、詔を下し、位を齊に禪る、軒に臨むに當りて、肯て出でず、佛蓋の下に逃る、王敬則引きて車に升らしむ、帝涙を收め、敬則に謂ひて曰く、殺されむと欲するか、敬則曰く、出でゝ別宮に居るのみ、官の先が、司馬家を取るも、亦此くの如しと、帝泣きて彈指して曰く、願くば、後身世々、復た天王の家に生るゝこと勿からんと、又、王世充、梁百年を遣し、皇泰主を酖せしむ、皇泰主乃席を布き香を焚き佛に禮し、願くば今より已往、復た帝王の家に生れざらんと、藥を飲んで、絶する能はず、帛を以て之れを縊殺す、余謂ふ、二主は、閏位の餘と曰ふと雖ども、各尊號を稱し、南北に主たり、運移り祚短く、姦臣之れに乘ず、徒に悲酸の語を吐き、以て社稷に死すること能はす、慨歎すべきかな。

鉏雨亭隨筆卷上 終

門人 中村長養 奥百千之 同按

鉏雨亭隨筆卷中

伊勢東聚伯頎著

一箇忍字、於修身上所關係絶切、不惟忍之于色于貨、至於喜怒哀樂悲恐驚、亦然、君陳曰、必有忍、其乃有濟、或以苛殺少恩、爲忍之一端、此則殘忍不情之徒、固不足道耳、譬如利字、易所謂、利者蓋言事之宜也、然至後世、私利之貪、故夫子罕言利、孟子云、何必曰利、太史公謂利爲亂之始、是皆指私利斥之、猶吾不取殘忍之類也、通鑑唐紀、張公藝九世同居、高宗幸其宅、問所以能共居之故、公藝書忍字百餘以進、余謂張氏九世之間、或有

一箇の忍の字、修身上に於て關係する所絶だ切なり、惟だ之れを色に貨に忍ぶのみならず、喜怒哀樂悲恐驚に至りても亦然り、君陳曰く、必ず忍ぶことありて、其れ乃ち濟ることありと、或は苛殺少恩を以て、忍の一端と爲す、此れは則ち殘忍不情の徒にして、固より道ふに足らざるのみ、譬へば、利の字の如し、謂ゆる利は、蓋、事の宜しきを言ふなり、然れども、後世に至りては、私利之れ貪る、故に夫子罕に利を言ふ、孟子云ふ、何ぞ必ずしも利を曰はんと太史公、利を謂ひて亂の始めと爲す、是皆私利を指して之れを斥す、猶吾が殘忍を取らざるがごときの類なり通鑑唐紀に、張公藝、九世同居す、高宗其の宅に幸し、能く共に居る所以の故を問ふ、公藝、忍の字百餘を書して以て進む、余謂ふ、張氏九世の間、或は其の意に可ならざる者あらん、然れども、能く同居是くの如く其れ久しきは、

不可其意者、然能同居如是、其久一家工夫自忍字出、凡欲有爲者、可能致意于忍、原於兵家觀之、晉書朱伺曰、兩敵共對、惟當忍之、彼不能忍、我能忍、是以勝耳、東坡論子房、潁濱論劉項、專說一忍字、唐伯虎百忍歌多擧故事、善述其所以忍者。

瑯邪代醉編云、月中仙名結鄰、硯亦名結隣、唐李衛公收硯至多、其尤妙者名結隣、言與相結爲隣也、按香祖筆記、引七聖記云、鬱華奔日之仙、結璘奔月之仙、然則璘隣通用、前說附會可疑、但余乏之書、不能考證、嘗寓佐藤子文不除軒、其友在京師者、寄書並硯圖曰、都下某近獲華硯一枚、好事傳賞、謂爲希世之珍、余就主人觀之、狀圓而不厚、闊可五六

一家の工夫忍の字より出づればなり、凡そ爲すことあらんと欲する者は、能く意を忍に致すべし、最も兵家に於て之れを觀る、晉書に、朱伺曰く、兩敵共に對するときは、惟だ當に之れを忍ぶべし、彼れ忍ぶ能はずして我れ能く忍ぶ、是を以て勝つのみと、東坡の、子房を論じ、潁濱の、劉項を論ずる、專ら一の忍の字を說く、唐伯虎の百忍の歌、多く故事を擧げて、善く其の忍ぶ所以を述べたり。

瑯邪代醉編に云ふ、月中の仙を結隣と名づく、硯も亦た結隣と名づく、唐の李衛公硯を收むること至りて多し、其尤も妙なる者を結隣と名づく、與に相結びて隣を爲すを言ふなりと、按ずるに、香祖筆記に、七聖記を引きて云ふ、鬱華は日に奔るの仙、結璘は月に奔るの仙と、然ば則ち璘と隣と通用す、前說附會、疑ふべし、但だ余、書に乏しく、考證すること能はず、嘗て佐藤子文の不除軒に寓す、其友京師に在る者、書並に硯圖を寄せて曰く、都下某近華硯一枚を獲たり、好事傳賞、謂ひて希世の珍と爲すと、余主人に就きて之れを觀るに、狀圓にして而して厚からず、闊五六寸ばかり、面上に結璘の二字あり、蓋し衛公遺

寸、圖上有結璘二字、蓋衞公遺愛之物云、欲引此爲一證、恨今不記字傍从阜从玉也。

徐氏筆精云、古詞、長檣鐵鹿子、鐵鹿以鐵爲轆轤、而拘帆者、故下句云、布帆阿那起、阿那二字又狀布帆因轆轤而動之意、古樂府、豎泊千渚磯、歡不下艇板、艇板卽今上岸透板也、刻本誤作廷板非。

宋太宗在澶淵南城、高瓊請幸河北曰、陛下不幸、北城百姓如喪考妣、馮極在旁呵之曰、高瓊何得無禮、瓊怒曰、君以文章爲大臣、今虜騎充斥如此、猶責瓊無禮、君何不賦一詩詠退虜騎耶、此朱伺所謂諸人以舌擊賊、伺惟以力耳之意。

唐庚曰、樂府解題、熟讀大有詩材、余詩云、時

愛の物と云ふ、此を引て一證と爲さんと欲するも、恨むらくは今、字傍、阜に从ふか玉に从ふかを記せざるなり。

徐氏筆精に云ふ、古詞に「長檣鐵鹿子」と、鐵鹿は、鐵を以て轆轤と爲し、而して帆を拘する者なり、故に下句に云ふ「布帆阿那として起つ、」と、阿那の二字、又布帆の轆轤に因りて動くの意を狀す、古樂府に「豎く千渚磯に泊す、歡、艇板を下さず」と、艇板とは、卽今の岸に上る透板なり、刻本誤りて廷板に作るは、非なり。

宋の太宗、澶淵の南城に在り、高瓊、河北に幸せんことを請ひて曰く、陛下幸せざれば、北城の百姓は、考妣を喪するが如しと、馮極、旁に在り、之れを呵して曰く、高瓊何ぞ無禮を得ん、瓊怒りて曰く、君、文章を以て大臣と爲る今、虜騎充斥、此くの如し、猶ほ瓊の無禮を責む、君何ぞ一詩を賦し、詠じて虜騎を退けざるやと、此れ朱伺の謂はゆる、諸人は舌を以て賊を擊つ、伺は惟だ力を以てするのみの意。

唐庚曰く、樂府解題、熟讀すれば、大に詩材ありと、余の詩に云ふ「時難んで將に酒を進めんとす、家遠くして樓に

難將進酒、家遠莫登樓、用古樂府名作對也。

某生自稱六六山人後、然山人不娶妻、終身閑居、梅澗詩話云、泉南林洪字龍發、號可山、肆業杭泮、粗有詩名、理宗朝上書自稱和靖七世孫、刊中興以來諸公詩、號大雅復古集、亦以己作附於後、時有無名子、作詩嘲之曰、和靖當年不娶妻、只留一鶴一童兒、可山認作孤山種、正是瓜皮搭李皮、蓋俗云以強認親族者、爲瓜皮搭李樹云、某生亦此類耳。

王維詩、隔牖風驚竹、開門雪滿山、僧無可詩、聽雨寒更盡、開門落葉多、落第二義。

通鑑綱目元紀云、至正二十五年夏五月、大都雨氂、長尺許、或曰龍鬚也、命拾而祀之、發明雨氂之事、初未嘗見於綱目、今特書之者、

登ること莫れ」と古樂府の名を用ひて對を作すなり。

某生自ら六々山人の後と稱す、然れども、山人、妻を娶らず、終身閑居す、「梅澗詩話に云ふ、泉南の林洪は、字は龍發、可山と號す、業を杭泮に肆ふ、粗詩名あり、理宗の朝に、上書して自ら和靖七世の孫と稱し、中興以來諸公の詩を刊し、大雅復古集と號す、亦己の作を以て後に附す、時に無名子あり、詩を作りて之れを嘲りて曰く、「和靖當年妻を娶らず、只だ一鶴一童兒を留む、可山は認めて孤山の種と作す、正に是れ瓜皮の李皮を搭す」と、蓋俗に云ふ、強ひて親族を認むる者を以て、瓜皮の李樹に搭すと爲すと云ふ、某生も亦此の類のみ。

王維の詩に「牖を隔てゝ風、竹に驚き、門を開けば雪、山に滿つ」、僧無可の詩に「雨を聽いて寒更盡き、門を開けば落葉多し」と、第二義に落つ。

通鑑綱目の元紀に云ふ、至正二十五年夏五月、大都、氂を雨らす、長さ尺許、或ひと曰く、龍鬚なりと、命じて拾ひて之れを祀る、發明に、氂を雨らすの事、初め未だ嘗て綱目に見えず、今特に之れを書するは、大異を記するなり、按

記大異也、按前漢五行志、天漢三年八月天雨白氂、又王莽傳注、師古曰、毛之强曲者曰氂、

淮南子、古未有天地之時、有二神、混生經天營地、本朝開國之始、與此相似、日本紀天地未剖云云、亦祖淮南子。

人以放生爲佛家事、不知既出列子、列子元日邯鄲之民、獻鳩於簡子、簡子厚賞之而放。其鳩、客問其故、曰、正旦放生、示有恩也、柳子厚放鷓鴣詞云、齊王不忍觳觫牛、簡子亦放邯鄲鳩。

易、潤之以風雨、風可乾而不可潤也、淮南子、雷電之聲、可以鐘鼓寫也、電是陽光、非有聲者、杜詩、塞上風雲接地陰、風本無形、陰字不

するに、前漢の五行志に、天漢三年八月、天、白氂を雨らす、又、王莽傳の注に、師古曰く、毛の强曲なる者を氂と曰ふ。

淮南子に、古未だ天地有らざるの時、二神あり、混生して天を經し地を營す、本朝開國の始、此れと相似たり、日本紀に、天地未だ剖せず云々も、亦淮南子を祖とす。

人、放生を以て佛家の事と爲す、既に列子に出づるを知らず、列子に、元日、邯鄲の民、鳩を簡子に獻ず、簡子厚く之れを賞し、而して其の鳩を放つ、客其の故を問ふ、曰く、正旦に生を放つは、恩有るを示すなり、柳子厚の放鷓鴣の詞に云ふ「齊王、觳觫の牛に忍びず、簡子も亦邯鄲の鳩を放つ。」

易に、之れを潤すに風雨を以てすと、風は乾かすべく、而して潤すべからざるなり、淮南子に、雷電の聲は、鐘鼓を以て寫すべきなりと、電は是れ陽光、聲有る者に非ず、杜詩に「塞上の風雲地に接して陰る」と、風本と形無し、陰の

接、然皆熟語連用、不相妨也。

畫法有落茄點、後素者流不知其義、按爾雅、釋草荷芙蕖其莖茄、說文、茄芙蕖莖、从艸加聲、荷芙蕖葉、从艸何聲、落茄之落、猶落木之落、蓋言遠枝無枝、似芙蕖枯莖直立之狀也。

孟浩然李氏園臥疾詩、伏枕嗟公幹、歸田羨子平、劉公幹詩、余嬰沉痼疾、竄身淸漳濱、張平子有歸田賦、子平倒錯、恐是涪翁巴西之類、（陳簡齋詩、賣藥韓康伯、談經管幼安、後漢韓康字伯休、常采藥名山、賣於長安市、此云韓康伯、乃合姓名字而用之、亦不免誤也。）

世人多愛櫻・萩・卯花、然此三種挿瓶中、則風趣索然、不入淸賞、或病櫻萩無漢名、余謂直用櫻萩字可也、卯花卽楊櫨花、不如卯花之雅、萩出徐葆光中山傳信錄、一日河崎生、携

字接せず、然れども、皆熟語連用、相妨げざるなり。

畫法に、落茄點あり、後素者流、其の義を知らず、按ずるに、爾雅の釋草に、荷、芙蕖、其の莖は茄と、說文に、茄は芙蕖の莖、艸に从ひ、加の聲、荷は芙蕖の葉、艸に从ひ、何の聲、落茄の落は、猶ほ落木の落とごとし、蓋し言ふ、遠樹枝無く、芙蕖枯莖の直立するの狀に似たるなり。

孟浩然の李氏園に疾に臥する詩に、「枕に伏して公幹を嗟き、田に歸つて子平を羨む」、劉公幹の詩、「余、沈痼の疾に嬰り、身を竄す淸漳の濱」、張平子に歸田賦あり、子平倒錯恐くは是れ涪翁巴西の類ならん（陳簡齋の詩に「藥を賣る韓康伯、經を談ず管幼安」と、後漢の韓康字は伯林、常に藥を名山に采りて、長安の市に賣る、此に韓康伯と云ふ、乃ち姓名字を合して之を用ふ、亦誤を免れざるなり。）

世人、多く櫻・萩・卯の花を愛す、然かれども、此の三種、瓶中に挿めば則ち風趣索然、淸賞に入らず、或は櫻・萩に漢名無きを病む、余謂ふ、直に櫻萩の字を用ひて可なり、卯の花は卽ち楊櫨花なり、卯の花の雅なるに如かず、萩は、徐葆光の中山傳信錄に出づ、一日、河崎生、西巷先生の隨

四巻先生詠隨軍茶詩、令余次韻、邦俗以隨軍茶・天竺花・胡枝子花之類、稱萩不當、余詩云、花稱天竺或胡枝、未有佳名副艷姿、珍重中山傳信錄、艸頭秋色令人知、艸頭秋卽萩字也。

竹山翁著草茆危言一書、以議時政得失、其命名取李覯袁州州學記、草茆危言者折首而不悔之語、李亦有所本、漢書梅福傳、廟堂之議、非草茆所當言也、危言出論語。

岑嘉州詩、前年見君時、見君正泥蟠、去年見君處、見君已風摶、此似誤作摶扶遙解。

達磨腹中有許多佛書、然後面壁九年、不立文字之說興焉、今行脚僧不知其意所在、一向坐禪以爲可造三昧、嗚呼惑亦甚矣、我觀

軍茶を詠ずる詩を構へて、余をして次韻せしむ、邦俗、隨軍茶・天竺花・胡枝子花の類を以て萩を稱す、當らず、余の詩に云ふ「花は天竺と稱し或は胡枝、未だ佳名の艷姿に副ふ有らず、珍重す中山傳信錄、艸頭の秋色人をして知らしむ」と艸頭秋は卽ち萩の字なり。

竹山翁、草茆危言一書を著し、以て時政の得失を議す、其の名を命ずるは、李覯の袁州州學記の、草茆危言の者、首を折きて而も悔いずの語に取る、李も亦本づく所あり、漢書の梅福傳に、廟堂の議、草茆の當に言ふべき所に非ざるなりと、危言は論語に出づ。

岑嘉州の詩に「前年君を見る時、君を見る正に泥蟠、去年君を見る處、君を見る已に風摶」此れ誤りて、扶搖を摶すと作して解するに似たり。

達磨腹中、許多の佛書あり、然る後に面壁九年にして、不立文字の說興れり、今の行脚僧、其の意の在る所を知らず、一向に坐禪して以て三昧に造る可しと爲す、嗚呼、惑ひも亦甚し、我、近時の書生を觀るに、率ね陸王の學問文

近時書生、率無陸王學問文章、遽唱虛心良知之說、恰與行脚僧識見一般。

魯道原重九詩、白鴈南飛天欲霜、蕭々風雨又重陽、已知建德非吾土、（孟浩然詩、建德非吾土、維揚憶舊遊）還憶幷州是故鄉、（賈島詩、卻望幷州是故鄉）蓬鬢轉添今日白、菊花猶似去年黃、登高莫上龍山路、極目中原草木荒、湊合成語、以成佳對、楊升庵塞垣鷓鴣詞、秦時明月玉弓懸、漢塞黃河錦帶連、都護羽書飛瀚海、單于獵火照甘泉、（高適詩、校尉羽書飛瀚海、單于獵火照狼山）鷲閭燕閣年三五、馬邑龍堆路八千、誰起東山謝安石、爲君談笑靖烽烟、（李白詩、若用東山謝安石、爲君談笑靜胡沙）此是生呑活剝。

今人學書、好欲超乘先輩、字字多客氣、詩亦逞才、句句眩惑人目、俱乏溫柔之氣。

章無くして、遽に虛心良知の說を唱ふ、恰も行脚僧の識見と一般。

魯道原の重九の詩に、「白雁南に飛んで天霜ならんと欲す、蕭々たる風雨又た重陽、已に知る建德は吾が土に非ず、（孟浩然の詩に建德は吾が土に非ず、維揚に舊遊を憶ふ）還た憶ふ幷州は是れ故鄉（賈島の詩に、卻つて幷州を望めば是れ故鄉）蓬鬢轉た添ふ今日の白、菊花猶似たり去年の黃、高きに登るとも龍山の路に上ること莫れ、極目中原草木荒る」と、湊合して語を成し、以て佳對を成す、楊升庵の塞垣鷓鴣の詞に「秦時の明月玉弓懸る、漢塞の黃河錦帶連る、都護の羽書瀚海に飛ぶ、單于の獵火甘泉を照す、（高適の詩に、校尉の羽書瀚海に飛び、單于の獵火狼山を照す）鷲閭燕閣年三五、馬邑龍堆路八千、誰か東山の謝安石を起して、君の爲に談笑して烽烟を靖ぜん」（李白の詩に、若し東山の謝安石を用ひば、君の爲に談笑して胡沙を靜めむ）此は是れ生呑活剝。

今人書を學ぶ、好みて先輩に超乘せんと欲す、字に客氣多し、詩も亦才を逞しくし、句々人目を眩惑す、俱に溫柔の氣に乏し。

唐書牛李傳贊云、夫口道先王語、行如市人、其名曰盜儒、張履祥曰、從德性上做工夫、讀書方有益、若讀書不歸之德性、非徒無益、甚者藉寇兵、資盜糧而已。

金剛寺尼惡音善製茶焙、用蘢道法、氣味甘美、不減喜撰、年年餉余以驅睡魔、寺即甘露寺舊址、因名茶曰甘露、不必本蕭尚故事也。

余常多夢、或謂余有妄想、然如黃帝高宗孔子莊子、夢華胥、夢良弼、夢周公、夢胡蝶、果有妄想歟、古人所謂、至人無夢亦誣。

陳繹曾詩譜、晉傅咸作七經詩、其毛詩一篇略曰、聿修厥德、令終有淑、勉爾遁思、我言維服、盜言孔甘、其何能淑、讒人罔極、有靦面目、

唐書牛李傳の贊に云ふ、夫れ口、先王の語を道ひ、行、市人の如き、其の名を盜儒と曰ふと、張履祥曰く、德性上より工夫を做せば、讀書方に益有り、若し讀書之れを德性に歸せざれば、徒に益無きのみに非ず、甚しきは、寇に兵を藉し、盜に糧を資するのみ。

金剛寺の尼惡音、善く茶焙を製す、蘢道の法を用ふ、氣味甘美、喜撰に減ぜず、年々余に餉り、以て睡魔を驅らしむ寺は、卽ち甘露寺の舊址、因りて茶を名づけて甘露と曰ふ、必ずしも蕭尚の故事に本づかざるなり。

余、常に夢多し、或は謂ふ、妄想ありと、然れども、黃帝・高宗・孔子莊子の如き、華胥を夢み、良弼を夢み、周公を夢み、胡蝶を夢む、果して夢想あるか、古人の謂はゆる至人夢無しとは亦た誣なり。

陳繹曾の詩譜に、晉の傅咸、七經の詩を作る、其の毛詩一篇、畧に曰く、「厥の德を聿修す、終に淑有らしむ、爾の遁思を勉め、我が言維れ服し、盜言孔だ甘し、其れ何ぞ能く淑からむ、讒人極り罔し、靦たる面目あり」と、此れ乃ち集句

此乃集句之始、或謂集句起於王安石、非也。

李翺來南錄、蓋爲紀行權輿、歐陽公于役志次之、叙事簡潔、可以爲法。

王摩詰詩、輕陰閣小雨、深院晝慵開、坐看蒼苔色、欲上人衣來、蘇子由所謂不帶聲色者、王安石詩、山中十日雨、雨晴門始開、坐看蒼苔紋、欲上人衣來、（欲、一作英）紋字刻畫頗費工夫、唐宋之域判然分矣。

初學以古人心讀今人詩、不至輕視以覆醤甄也、以今人心讀今人詩、沉鬱如杜、飄逸如李、淡泊如陶韋、匆匆看過、不知其妙矣。

吾邦詩有二弊、去之難矣、有才者笨、無才者板。

杜詩、一片花飛減却春、風翻萬點正愁人、十

の始なり、或は謂ふ、集句は王安石に起ると、非なり。

李翺の來南錄は、蓋し紀行の權輿と爲す、歐陽公の于役志、之れに次ぐ、叙事簡潔、以て法と爲すべし。

王摩詰の詩に「輕陰閣小雨、深院晝開くに慵ふし、坐に看る蒼苔の色、人衣に上り來らんと欲す」と、蘇子由の謂はゆる聲色を帶びざる者なり、王安石の詩に「山中十日の雨、雨晴れて門始めて開く、坐に看る蒼苔の紋、人衣に上り來らむと欲す（欲一に　に作る）」紋の字、刻畫頗る工夫を費す、唐宋の域、判然として分る。

初學、古人の心を以て今人の詩を讀まば、輕視して以て醤甄を覆ふに至らざるなり、今人の心を以て今人の詩を讀まば、沈鬱杜の如き、飄逸李の如き、淡泊陶韋の如き、匆々看過して、其の妙を知らず。

吾が邦の詩、二弊あり、之れを去ること難し、才ある者は笨、才無き者は板。

杜詩の「一片花飛んで春を減卻す、風は萬點を翻して正

四字中含許多情、白香山雨中憶元九詩云、天陰一日便堪愁、何況連宵雨不休、事異而意同、善得脱化之妙。

古人借禪喩詩、以要妙悟、又有以禪敎讀書之法者、葉秉敬書肆說鈴、弟子問讀書之法、予曰、讀書不可不學禪、衆問其故、予曰、讀書養靜不萌妄念、這便是禪心、讀書出家不理塵務、這便是禪行、讀書作文意在筆先、神游象外、這便是禪機、余謂此語讀書正法眼藏第一義也。

陶弘景讀書萬卷、一事不知、深以爲恥、此是記誦之學、不可以爲君子儒也。

東坡少年時、嘗過一村院、見壁上有詩云、夜涼疑有雨、院靜似無人、不知何人詩也、宿黃

に人を愁へしむ」の十四字の中、許多の情を含む、白香山の雨中、元九を憶ふ詩に云ふ「天陰一日便ち愁ふるに堪へたり、何ぞ況んや連宵雨休まず」と、事異にして而して意同じ、善く脱化の妙を得たり。

古人禪を借りて詩に喩へて以て妙悟を要す、又、禪を以て讀書の法を敎ふる者あり、葉秉敬の書肆說鈴に、弟子、書を讀むの法を問ふ、予曰く、書を讀む、禪を學ばざるべからず、衆其の故を問ふ、予曰く、讀書靜を養ひて、妄念を萌さず、這れ便ち是れ禪心、讀書出家、塵務を理めず、這れ便ち是れ禪行、讀書、文を作る、意、筆先に在り、神、象外に游ぶ、這れ便ち是れ禪機、余謂ふ此の語は、讀書の正法眼藏の第一義なり。

陶弘景、書を讀むこと萬卷、一事知らざるを、深く以て恥と爲す、此は是れ記誦の學、以て君子儒と爲すべからざるなり。

東坡、少年の時、嘗て一村院に過る、壁上に詩あるを見る、云く「夜涼しくして雨有るかと疑ひ、院靜にして人無きに似たり」、何人の詩なるを知らざるなり、黃州の禪智寺

州禪智寺、寺僧皆不在、夜半雨作、偶記此詩、故作一絕、佛燈漸暗饑鼠出、山雨忽來脩竹鳴、知是何人舊詩句、已應知我此時情、按老學庵筆記夜涼云云、此潘逍遙句也、近人對其後句、以門開如有客、可謂鎔金成鐵。

漢人稱物動過其實、故讀書者不可不察、晉書馬隆傳、依八陣圖、奇謀間發、或夾道累磁石、賊負鐵鎧、行不得前、隆卒悉被犀甲、無所留礙、賊咸以爲神、所謂奇謀者不免兒戲也、水經注、磁石門在阿房前、悉以磁石爲之、令四夷朝貢者、有隱甲懷刄入門而脅之、以示神、故亦曰卻胡門、此亦過稱耳、琥珀之吸芥、磁石之引鐵、雖曰造化自然不足深怪、如此二書所載、恐是迂而誕矣。

に宿す、寺僧皆在らず、夜半雨作る、偶此の詩を記す、故に一絕を作る「佛燈漸く暗ゝして饑鼠出で、山雨忽ち來つて脩竹鳴る、知る是れ何人の舊詩句ぞ、已に應に我が此の時の情を知るなるべし」、按ずるに、老學庵筆記に、夜涼云々、此れ潘逍遙の句なり、近人其の後句に對するに、「門開いて客有るが如し」を以てす、金を鎔して鐵と成すと謂ふ可し。

漢人の物を稱する、動もすれば其の實に過ぐ、故に書を讀む者は、察せざるべからず、晉書馬隆傳に、八陣の圖に依りて、奇謀間發す、或は道を夾みて磁石を累す、賊、鐵鎧を負ふ、行きて前むことを得ず、隆の卒は悉く犀甲を被る、留礙する所無し、賊咸以て神と爲すと、謂はゆる奇謀といふ者は、兒戲を免れざるなり、水經の注に、磁石門は阿房の前に在り、悉く磁石を以て之れを爲る、四夷朝貢の者をして、甲を隱し刄を懷にして門に入る有らば、之れを脅さしめ、以て神を示す、故に亦た卻胡門と曰ふと、此れ亦過稱のみ、琥珀の芥を吸ひ、磁石の鐵を引く、造化の自然、深く怪むに足らずと曰ふと雖ども、此の二書の載する所の如きは、恐くは是れ迂にして誕ならん。

通鑑梁紀、治河、役夫多溺死、劉貴曰、一錢漢隨之死、吾俗罵不能辨事者、謂不當一文錢、蓋一錢漢、亦此義也。

張士信聞倪元鎭善畫、使人持絹侑以重幣、欲求其筆、元鎭怒曰、倪元鎭不能爲王門畫師、卽裂去其絹、此與戴安道破琴、氣象極類。

語林、齊澣善知今事、高仲舒善知古事、姚崇每諮此兩人、嘗曰、欲知古事問仲舒、欲知今事問齊澣、一作今事問崔琳、近峯聞略、周益公云、蘇子容聞人語古事、必令人檢出處、司馬溫公聞新事、卽便抄錄、且記所言之人、故當時諺曰、古事莫語子容、今事勿告君實、此一轉語俱見其美。

俗云鴉報親戚之喪、聞者惡之、然鴉非能殺

通鑑梁紀に、河を治する役夫多く溺死す、劉貴曰く、一錢漢之れに隨ひて死すと、吾が俗、事を辨ずることと能はざる者を罵りて、一文錢に當らずと謂ふ、蓋、一錢漢も亦た此の義なり。

張士信、倪元鎭の畫を善くすと聞きて、人をして絹を持し、侑するに重幣を以てせしめ、其の筆を求めんと欲す、元鎭怒りて曰く、倪元鎭は王門の畫師たる能はずと、卽ち其の絹を裂去すと、此れ戴安道の琴を破ると、氣象極めて類せり。

語林に、齊澣、善く今事を知る、高仲舒、善く古事を知る、姚崇每に此の兩人に諮ふ、嘗て曰く、古事を知らんと欲せば、仲舒に問へ、今事を知らんと欲せば、齊澣に問へと、一に今事は崔琳に問へに作る、近峯聞略に、周益公云ふ、蘇子容、人の古事を語るを聞けば、必ず人をして出處を檢せしむ、司馬溫公、新事を聞けば、卽便ち抄錄し、且つ言ふ所の人を記す、故に當時の諺に曰く、古事は子容に語ぐること莫れ、今事は君實に告ぐること勿れと、此の一轉語、俱に其の美を見る。

俗に云ふ、鴉は親戚の喪を報ずと、聞く者之れを惡む、然

人也、人死而後報之耳、世之惡鴉豈不冤乎、朱子詩云、鵲噪未爲吉、鴉鳴豈是凶、吉凶人自召、不在鳥聲中、程俱詩云、烏啼未必惡、鵲去恨不早、鵲噪兩耳聾、主人亦言好、安知一喙鳴、喜戚自顚倒、朝來群鵲噪不已、童稚無知助吾喜、群鵲自與烏爭巢、愼勿喜歡眞誤爾、按古樂苑淸商曲、七曲有烏夜啼、唐書樂志、宋臨川王義慶所作也、元嘉十七年徙彭城王義康於豫章、義慶時爲江州、至鎭相見而哭、文帝聞而怪之、徵還、義慶大懼、伎妾聞烏夜啼、扣齋閣云、明日應有赦、其年爲南兗州刺史、因此作歌、李勉琴說、何晏之女所作、初晏繫獄、有二烏止於舍上、女曰、烏有喜聲、父必免、遂撰此操、與前義同而事異、據此則

れども、鴉は能く人を殺すに非ざるなり、人死して而して後之れを報ずるのみ、世の鴉を惡む、豈に寃ならずや、朱子の詩に云ふ、鵲噪未だ吉と爲さず、鴉鳴豈に是れ凶ならんや、吉凶人自ら召く、鳥聲の中に在らず、程俱の詩に云ふ、烏啼て未だ必ずしも惡ならず、鵲去して早からざるを恨む、鵲噪して兩耳聾す、主人亦好しと言ふ、安ぞ知らん一喙鳴、喜戚自ら顚倒す、朝來群鵲噪ぎて已まず、童稚吾が喜びを助くるを知る無し、群鵲自ら烏と巢を爭ふ、愼んで喜歡すること勿れ眞に誤るのみ、按ずるに、古樂苑淸商の曲、七曲に、烏夜啼あり、唐書樂志に、宋の臨川王義慶の作る所なり、元嘉十七年、彭城王義康を豫章に徙す、義慶時に江州を爲む、鎭に至りて相見て而して哭す、文帝聞きて之れを怪み、徵し還す、義慶大に懼る、伎妾、烏夜啼くを聞き、齋閣を扣きて云ふ、明日應に赦あるべしと、其の年、南兗州の刺史と爲る、此れに因りて歌を作る、李勉の琴の說、何晏の女の作る所、初め晏、獄に繫がる、二烏あり舍上に止る、女曰く、烏に喜聲あり、父必ず免されんと、遂に此の操を撰す、前義と同じくして而して事異なり、此れに據れば、則ち彼の土の人は、皆忌まざるに似たり、容齋隨筆に云ふ、北人は、烏聲を以て喜と爲し、

彼土人以不皆忌也、容齋隨筆云、北人以烏聲為喜、鵲聲為非、南人聞鵲噪則喜、聞烏聲則唾而逐之、至於弦弩挾彈擊使遠去。

辛未之歳、余在志州迫湖、作秋興八首、寄大冡不籌、不籌和之、句句清新、所謂以蚓投魚者、恨失其稿、不復記得、不籌為人慷慨有古人風、受業于凹巷先生、與余友善、不籌既沒、三年碑尚未建、每一念及此、不覺涙下、因擧其遺篇四首、中秋威勝寺高閣望月云、西川日落濟斜陽、回看東山月出光、玉鏡飛騰懸遠樹、彫雲點綴散高岡、諸天有影交杉竹、世界無聲下露霜、冷彩透衣寒病骨、悽然一嘯向風長、中秋東伯頎來訪、即去、悵然有作云、寂寥書室鎖初更、月上窻前樹影横、人自有

鵲聲を非と爲す、南人は、鵲噪を聞けば、則ち喜び、烏聲を聞けば、則ち唾して而して之れを逐ふ、弩を弦し、彈を挾み、擊ちて遠く去らしむに至る。

辛未の歳、余、志州の迫湖に在り、秋興八首を作りて、大冡不籌に寄す、不籌之れに和す、句々清新、謂はゆる蚓を以て魚に投ずる者、恨らくは其の稿を失し、復た記得せす、不籌人と爲り慷慨、古人の風あり、業を凹巷先生に受く、余と友とし善し、不籌既に沒して三年、碑尚未だ建たす、一念此に及ぶ毎に、覺えず涙下る、因りて其の遺篇四首を擧ぐ、中秋、威勝寺の高閣に月を望むに云ふ「西川日落ちて斜陽濟たり、回看すれば東山月出づるの光、玉鏡飛び騰つて遠樹に懸り、彫雲點綴して高岡に散す、諸天影有り杉竹を交へ、世界聲無く露霜下る、冷彩衣に透つて病骨寒し、悽然一嘯風に向つて長し」、中秋、東伯頎來り訪はる、即ち去る、悵然として作有り、云ふ「寂寥たる書室初更に鎖ざす、月上つて窓前樹影横ふ、人自ら心有り遠訪

心煩遠訪、我猶如夢喜相迎、頻年多病違良會、今夜中秋値好晴、何處水亭重引興、無由留爾到平明、既望伯顔再訪、得淸字、沉淪不復逐浮名、且卜閑居且養生、疾在膏肓知學苦、心期泉石覺身輕、故人江上厭新識、秋月池頭訪舊盟、過我重吟昨宵句、翛然風露入懷淸、廣臺寺歸途作云、黃雲十里亘平田、處處農歌收穫天、煙淡風凄秋野外、人歸雁起夕陽邊、山含黛色連峰暗、林帶霜華遠葉鮮、村徑蕭條迷客跡、墻頭殘柳月如弦、不騫嘗從先生遊信越二州、作新瀉鷺湖竹枝各十首、先生北陸游稿中收之、不復贅。

一夕、余與不騫作燈說不成、古人以燈油喩性情、以油爲氣、而燈心爲質、燈焰乃精神也、

を煩はす、我猶夢の如く喜んで相迎ふ、頻年多病良會に違ひ、今夜中秋好晴に値ふ、何れの處の水亭か重ねて興を引かん、爾を留めて平明に到るに由無し」、既望、伯顔再び訪はる、淸の字を得たり、「沈倫復た浮名を逐はず、且つ閑居をトし且つ生を養ふ、疾、膏肓に在り、學の苦きを知り、心、泉石を期して身の輕きを覺ゆ、故人江上に新識を厭ひ、秋月池頭、舊盟を訪ふ、我に過り重ねて吟ず昨宵の句、翛然風露懐に入つて淸し」廣臺寺歸途の作に云ふ「黃雲十里平田に亘る、處々の農歌收穫の天、煙は淡く風は寒し秋野の外、人歸り雁起つ夕陽の邊、山は黛色を含んで連峰暗く、林は霜華を帶びて遠葉鮮なり、村徑蕭條客跡迷ふ、墻頭の殘柳、月、弦の如し」と、不騫、先生に從ひて信越二州に遊び、新瀉・鷺湖、竹枝各十首を作る、先生の北陸遊稿中に之れを收む、復た贅せず。

一夕、余、不騫と、燈の說を作る、成らず、古人燈油を以て性情に喩へ、油を以て氣と爲し、而して燈心を質と爲す、燈焰は乃ち精神なり、其の物を照すに及びては、則ち才能

及其照物則爲才能、其熱者性也、燈滅而燼落、魄降也、煙氣上騰、魂升也、油有清濁、燈心有肥細、乃資質之美惡耳、當時不嚢及余未見此文、說得分明、理盡于此、乃欲與不嚢談之、幽明一隔、把筆惘然。

己巳暮春、凹巷先生北遊信越、諸子餞之清渚、時余爲事所阻、不能執祖道之役、北陸游稿云、清渚席上一大盆、盛肴象山下成點景、宛然姨山月夜之狀、蓋信州之勝、以姨山賞月爲最、余平生夢想所涉、知友以此饗予、意亦至矣、余及讀之、恍如身往清渚、親陪盛宴、按紫桃軒雜錄云、唐有淨尼、出奇思、以盤飣簇成山水、每器占輞川圖中一景、人多愛玩、腐臭不忍食、蓋清渚所施設、與此爭巧、其寓

と爲す、其の熱は性なり、燈滅して燼落つ、魄の降るなり、煙氣上騰するは、魂の升るなり、油に清濁あり、燈心に肥細あるは、乃ち資質の美惡のみと、當時、不嚢と余と、未だ此の文を見ず、說き得て分明、理此に盡きたり、乃ち不嚢と之れを談ぜん欲すれども、幽明一隔、筆を把りて惘然たり。

已巳の暮春、凹巷先生、北、信越に遊ぶ、諸子之れを清渚に餞す、時に余、事に阻せられて、祖道の役を執ること能はず、北陸遊稿に云ふ、清渚席上の一大盆、肴を盛り山が象り、下、點景を成し、宛然姨山月夜の狀、蓋、信州の勝は、姨山に月を賞するを以て最と爲す、余、平生夢想の涉る所知友此れを以て予を饗す、意も亦至れりと、余之れを讀むに及びて、恍として身、清渚に往き、親しく盛宴に陪するが如し、按ずるに、紫桃軒雜錄に云ふ、唐に淨尼有り、奇思を出し、盤飣を以て山水を簇成す、器毎に、輞川圖中の一景を占む、人多く愛玩す、腐臭食ふに忍びずと、蓋し清渚の施設する所、此れと巧を爭ふ、其の寓情は則ち優れりと爲す。

情則爲優。

常建、戰餘落日黃、軍敗鼓聲死、孟東野、看取芙蓉花、今年爲誰死、高季廸、夜半殺氣來、劍寒燈欲死、三死字皆妙、唐書薛萬均傳、城中氣死、鼓不能聲、八字善叙破亡之兆。

維春向晚、紅謝綠歸、偶與友人遊櫻樹里、殘花二株、似留春色、醉客數輩婆娑其下、或有緣樹撼花以助歌舞者、余悵然而還、可謂殺風景矣、後讀黃涪翁詩云、春殘已是風和雨、更著遊人撼落花、反覺一段韻致。

經鋤堂雜志云、凡事寬作程、極有意味、且如讀書工夫、計工以兩日看者作五日看、則玩味有餘矣、出入登途計程、以十日行作半月行、則不至勞苦冒險矣、又曰、一歲栽培、花不

常建の「戰餘落日黃に、軍敗れて鼓聲死す」孟東野の「看取す芙蓉の花、今年誰が爲にか死す」高季迪の「夜半殺氣來る、劍寒くして燈死せんと欲す」、三の死の字皆妙なり、唐書薛萬均傳に、城中氣死す、鼓、聲する能はずと、八字善く破亡の兆を叙す。

維れ春、晩に向ひて、紅謝し綠歸る、偶友人と櫻樹里に遊ぶ、殘花二株、春色を留むるに似たり、醉客數輩、其の下に婆娑たり、或は樹に緣りて花を撼かし、以て歌舞を助くる者あり、余悵然として還る、殺風景と謂ふべし、後に、黃涪翁の詩を讀むに、云く「春殘して已に是れ風、雨に和す、更に遊人に著して落花を撼かす」と、反りて一段の韻致を覺ふ。

經鋤堂雜志に云ふ、凡そ事寬く程を作すと、極めて意味あり、且つ讀書の工夫の如き、工を計るに、兩日の看なる者を以て、五日の看と作さば、則ち玩味餘有り、出入登途、程を計り、十日の行を以て、半月の行と作さば、則ち勞苦して險を冒すに至らず、又曰く、一歲栽培して、花、十日に過ぎず、又、風雨摧折の變あり、之れを人生に譬ふるに、勞

過十日又有風雨摧折之變譬之人生勞苦一世其如得意則不過數年耳。

辛未春夏之際南島疫癘盛行父老云八九十年來未曾有之事日夕村民相聚擊鐘鼓驅疫鬼以紙糊船送之海上其所過路次戶戶皆閉人燒線香隨之頗有閭俗之風。

七修類稿云杜工部詩蜀主窺吳幸三峽崩年亦在永安宮翠華想像空山裡玉殿虛無野寺中溫公作通鑑不以正統與蜀唯此詩許之其曰幸曰崩曰翠華曰玉殿皆以天子與之也張注謂若春秋之筆信矣老杜豈直詩人而已哉然主窺二字尙有未滿蓋主者一家一國之稱窺者睥睨覬覦之意也天子有征無戰況窺竊云乎昭烈加兵于吳問斬

苦一世、其の得意の如きは、則ち數年に過ぎざるのみ。

辛未春夏の際、南島疫癘盛に行はる、父老云ふ、八九十年來、未だ曾て有らざるの事と、日夕、村民相聚りて、鐘鼓を擊ち疫鬼を驅り、紙糊船を以て、之れを海上に送る、其の過ぐる所の路次、戶々皆閉ざす、人線香を燒きて之れに隨ふ、頗る閭俗の風あり。

七修類稿に云ふ、杜工部の詩に「蜀主吳を窺ふて三峽に幸し、崩年も亦た永安宮に在り、翠華想像す空山の裡、玉殿虛無野寺の中、」と、溫公通鑑を作る、正統を以て蜀に與へず、唯だ此の詩之れを許す、其の幸と曰ひ崩と曰ひ、翠華と曰ひ玉殿と曰ふ、皆天子を以て之れに與ふるなり、張注に、春秋の筆の若しと謂ふ信なり、老杜豈に直だ詩人のみならむや、然れども、主窺の二字、尙未だ滿たざるあり、蓋し、主とは、一家一國の稱、窺とは、睥睨覬覦の意なり、天子には、征ありて戰無し、況んや窺竊と云はんや、昭烈、兵を吳に加ふ、壯繆を斬るの罪を問ふ、無名の師に非ざるなり、愚意、漢の字を以て蜀に易へ、帝を以て主に易

壯繆之罪、非無名之師也、愚意、欲以漢字易蜀、以帝易主、以征易窺、庶乎名正言順、而於聲律亦不乖也、余亦嘗以蜀主窺三字、爲白璧微瑕、然改漢帝征吳幸三峽、則語氣不健、此中消息、非知詩者不可俱語也。

漁洋詩話云、陳伯璣常語余曰、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船、妙矣、然亦詩與地肖故爾、若云南城門外報恩寺、豈不可笑耶、余曰固然、卽如滿天梅雨是蘇州、流將春夢過杭州、白日澹幽州、風聲壯岳州、黃昏鼓角見幷州、澹煙喬木隔綿州、皆詩地相肖、使云白日澹蘇州、流將春夢過幽州、不堪絕倒耶、按柳宗元登柳州峩山詩云、荒山秋日午、獨上意悠悠、如何望鄉處、西北是融州、王阮亭題

へ、征を以て窺に易へんと欲す、名正しく言順ふに庶し、而して聲律に於ても亦乖かざるなりと、余も亦嘗て蜀主窺の三字を以て、白璧の微瑕と爲す、然れども、「漢帝吳を征し三峽に幸す」と改めば、則ち語氣健ならず、此の中の消息、詩を知る者に非ざれば、倶に語るべからざるなり。

漁洋詩話に云ふ、陳伯璣、常て余に語りて曰く、「姑蘇城外の寒山寺、夜半の鐘聲客船に到る」は、妙なり、然れども、亦た詩と地と肖たるが故のみ、若し「南城門外の報恩寺」と云はゞ、豈に笑ふべからざらんや、余曰く、固に然り、卽ち「滿天の梅雨是れ蘇州」「春夢を流し將つて杭州を過ぐ」「白日幽州に澹たり」「風聲岳州に壯なり」「黃昏鼓角幷州を見る」「澹煙喬木綿州を隔つ」が如き、皆詩地相肖たり、「白日蘇州に澹たり」「春夢を流し將つて幽州を過ぐ」と云はしめば、絕倒に堪へざらんやと、按ずるに、柳宗元の柳州峩山に登る詩に云ふ「荒山秋日午なり、獨り上る意悠々、如何ぞ鄉を望む處、西北は是融州」、王阮亭、清流關に題する詩に云ふ「瀟々寒雨清流を渡る、苦竹雲陰特地に愁ふ、首を回せば南唐風景盡き、青山無數滁州を繞る」、又、辣

清流關詩云、瀟瀟寒雨渡清流、苦竹雲陰特地愁、回首南唐風景盡、青山無數繞滁州、又寄陳伯璣詩云、東風作意吹楊柳、綠到蕪菁第幾橋、此亦詩地相肖、于忠肅詩云、楊柳陰濃水鳥啼、豆花初發麥苗齊、相逢盡道今年好、四月平陽米價低、平陽字面極好、不可易也、吾邦稱曰大家、解此意者頗少。

詩書畫有三看之訣、簷曝雜記云、詩看用事、字看用筆、畫看用墨、眞僞工拙、一目可了。

梅花仙史曰、釋玄政讀袁中郎集凡二十遍、最後焚之、不復觀古人集、乃其做詩惟意所適、余嘗獲瓶花齋外集、中有草山瑞光蘭若及玄政之印、然則其謂付丙丁、亦不可信也、又余所藏季漢文三冊、皆有玄政及草山瑞

伯璣に寄する詩に云ふ「東風意を作して楊柳を吹く、綠は蕪菁第幾橋に到る」、此れも亦詩地相肖たり、于忠肅の詩に云ふ「楊柳陰濃にして水鳥啼く、豆花初めて發いて麥苗齊し、相逢ふて盡く道ふ今年の好きを、四月平陽米價低し」、平陽の字面極めて好し、易ふべからざるなり、吾が邦、稱して大家と曰ふ者、此の意を解する者頗る少し。

詩書畫に、三看の訣あり、簷曝雜記に云ふ、詩は事を用ふるを看、字は筆を用ふるを看、畫は墨を用ふるを看れば眞僞工拙、一目に了すべし。

梅花仙史曰く、釋玄政、袁中郎集を讀む、凡そ二十遍、最後に之れを焚きて、復た古人の集を觀ず、乃ち其の詩を做す、惟だ意の適する所と、余嘗て瓶花齋外集を獲たり、中に、草山瑞光蘭若及び玄政の印あり、然らば則ち其の丙丁に付すと謂ふも、亦信ずべからざるなり、又、余の藏する所の季漢文三冊、皆玄政及び草山瑞光蘭若の印あり草山瑞光蘭若の六字は、即ち楷書なり。

光顯若之印、草山瑞光蘭若六字、卽楷書也。

朱竹坨題顧秀才畫梅詩云、平生冷笑林君復、活剝江爲兩句詩、畫到影疎香暗處、始知一字可稱師、靜志居詩話云、竹影橫斜水淸淺、桂香浮動月黃昏、非江爲句乎、林君復易疎暗二字、竟成千古名句、所云一字之師、與生呑活剝者、有別也、按陳輔之謂、此一聯近野薔薇、亦得言外風神、如玉晉卿謂杏與桃李皆可用、實不知詩者之言也、南唐書、江爲其先宋州人、避亂建陽、遂爲建陽人。

王元之黃州竹樓記、文字瀟洒、善盡四時之勝、以竹作樓、唐時有之、李嘉祐寄王舍人竹樓詩云、傲吏身閑笑五侯、西江取竹起高樓、南風不用蒲葵扇、紗帽閑眠對水鷗、三四句

朱竹坨、顧秀才の畫梅に題する詩に云ふ「平生冷笑す林君復、江爲兩句の詩を活剝するを、畫いて影疎香暗の處に到り、始めて一字の師と稱す可きを知る」と、靜志居詩話に云ふ「竹影橫斜水淸淺、桂香浮動月黃昏」は、江爲の句に非ずや、林君復、疎暗の二字に易へ、竟に千古の名句を成す、云はゆる一字の師と、生呑活剝の者と、別有るなり、按ずるに、陳輔之謂ふ、此の一聯、野薔薇に近し、亦言外の風神を得たり、玉晉卿の杏と桃李と皆用ふべしと謂ふが如きは、實に詩を知らざる者の言なり、南唐書に、江爲、其先は宋州の人、亂を建陽に避け、遂に建陽の人となる。

王元之の黃州竹樓の記、文字瀟洒、善く四時の勝を盡す、竹を以て樓を作るは、唐の時之れ有り、李嘉祐が王舍人の竹樓に寄する詩に云ふ「傲吏身閑にして五侯を笑ふ、西江竹を取つて高樓を起す、南風用ひず蒲葵の扇、紗帽閑眠、水鷗に對す」と、三四句竹に及ばず、而して竹樓の風

不及竹、而竹樓風致溢于言外、可與王文衡行。

三餘贅筆云、吳人呼煖酒器爲急須、呼煖飲食具爲僕憎、急須者以其應急而用、吳人謂須爲蘇、故其音同、僕憎以銅爲之、言僕者不得竊食、故憎之也、按邦人呼茶瓶爲急須、誤矣。

盧同茶歌、蓋祖陳後主獨酌謠、云、獨酌謠、獨酌且獨謠、一酌豈陶暑、二酌斷風飈、三酌意不暢、四酌情無聊、五酌盂易覆、六酌歡欲調、七酌累心去、八酌高志超、九酌忘物我、十酌忽凌霄、凌霄生羽翼、任致得飄飄、寧與世人醉、揚波去我遙、爾非浮丘伯、安見王子喬、（原作四首、此其一也、）此體既肇于鮑明遠數詩、云、一身事

致、言外に溢る、王の文と衡行すべし。

三餘贅筆に云ふ、吳人、酒を煖むる器を呼びて急須と爲す、飲食を煖むる具を呼びて僕憎と爲す、急須は、其の急に應じて用ふるを以てす、吳人、須を謂ひて蘇と爲す、故に其の音同じ、僕憎は、銅を以て之れを爲る、言ふは、僕者は、竊み食することを得ず、故に之れを憎むなり、按ずるに、邦人、茶瓶を呼びて急須と爲すは誤れり。

盧仝の茶歌は、蓋し陳の後主の獨酌謠を祖とす、云ふ、獨酌謠「獨酌且つ獨謠、一酌豈に暑を陶せしんや、二酌風飈を斷つ、三酌意暢せず、四酌情聊する無し、五酌盂覆し易し、六酌歡調んと欲す、七酌累心去る、八酌高志超す、九酌物我を忘る、十酌忽ち霄を凌ぐ、霄を凌いで羽翼を生ず、任致飄々を得るとも、寧ぞ世人と醉はんや、波を揚げ我を去ること遙、爾く浮丘伯に非ず、安ぞ王子喬を見ん（原作四首、是れ其の一なり）此の體、既に鮑明遠の數詩に肇る、云ふ「一身關西を事とす、家族山東に滿つ、二十年車駕に從ひ、齋祭す甘泉宮、三朝國慶畢る、休沐舊都に還る、四壯長

關西、家族滿山東、二年從車駕齋祭甘泉宮、三朝國慶畢、休沐還舊都、四牡曜長路、輕蓋若飛鴻、五侯相餞送、高會集新豐、六樂陳廣坐、祖帳揚春風、七盤起長袖、庭下列歌鐘、八珍盈彫俎、綺肴紛錯重、九族共瞻遲、賓友仰徽容、十載學無就、善官一朝通。

庾子山賦絕似唐人歌行、春賦云、宜春苑中春已歸、披香殿裡作春衣、新年鳥聲千種囀、二月楊花滿路飛、河陽一縣併是花、金谷從來滿園樹、一叢香草足礙人、數尺游絲卽橫路、又云、百丈山頭日欲斜、三輔未醉莫還家、池中水影懸勝鏡、屋裡花香不如花、對燭賦云、龍沙雁塞甲應寒、天山月沒客衣單、燈前桁衣疑不亮、月下穿針覺最難、刺取燈花持

路を曜す、輕蓋飛鴻の若し、五侯相餞送す、高會新豐に集る、六樂廣坐に陳ね、祖帳春風に揚ぐ、七盤長袖を起し、庭下歌鐘を列す、八珍彫俎に盈つ、綺肴紛として錯重、九族共に瞻遲、賓友徽容を仰ぎ、十載學就る無し、善官一朝に通ず」と。

庾子山の賦は、絕だ唐人の歌行に似たり、春賦に云ふ「宜春苑中春已に歸る、披香殿裡春衣を作る、新年の鳥聲千種に囀す、二月楊花滿路に飛ぶ、河陽一縣併せて是れ花、金谷從來園樹に滿つ、一叢の香草人を礙ふるに足り、數尺の游絲卽ち路に橫はる」又云ふ「百丈山頭日斜ならんと欲す、三輔未だ醉はざれば家に還る莫れ、池中の水影勝鏡を縣け、屋裡の花香、花に如かず」對燭賦に云ふ「龍沙雁塞甲應に寒かるべし、天山月沒して客衣單なり、燈前衣を桁して亮ならざるかと疑ひ、月下針を穿ちて最も難きを覺ゆ、燈花を刺し取つて持つて燭を挂け、燈檠を還卻して燭盤を下す」蕩子賦に云ふ「蕩子辛苦征行を逐ふ、

挂燭、還御燈檠下燭盤、蕩子賦云、蕩子辛苦逐征行、直守長城千里城、隴水恆冰合、關山唯月明、況復空牀起、怨倡婦生離、又云、別後關情無復情、奩前明鏡不須明、合歡無信寄、迴文織未成、游塵滿牀不用拂、細草横階隨意生、前日漢使著章臺、聞道夫婿定應迴、手巾還欲燥、愁眉即剩開、逆想行人至、迎前含笑來、其他不可枚舉、春賦云、樹下流杯客、沙頭渡水人、亦似唐人五律。

袁子才曰、元白七言古詩、得力于初唐四子、而四子又得之庾子山及孔雀東南飛諸樂府者也、按長恨歌連昌宮詞等、專主流麗、蓋自徐陵江總雜曲中來。

六朝詩風一變、遂開唐人律詩之源、呂讓和

直だ守る長城千里の城、隴水恆に冰合し、關山唯だ月明、況んや復た空牀より起き、倡婦の生離を怨む」、又云ふ「別後關情復情無し、奩前の明鏡明を須ひず、合歡信の寄すること無し、迴文織未だ成らず、游塵牀に滿ちて拂ふことを用ひず、細草階に横つて隨意に生ず、前日漢使章臺に著し、聞道らく夫婿定めて應に迴るべし、手巾還た燥かんと欲す、愁眉即ち剩開す、逆め想ふ行人の至らば、前んで笑を含んで來るを迎へん」其の他、枚擧すべからず、春賦に云ふ「樹下杯を流す客、沙頭水を渡る人」、亦唐人の五律に似たり。

袁子才曰く、元白の七言古詩は、力を初唐の四字に得たり、而して四子は又之れを庾子山及び孔雀東南飛の諸樂府に得たる者なり、按ずるに、長恨歌・連昌宮詞等、專ら流麗を主とす、蓋し徐陵の江總雜曲中より來る。

六朝の詩風一變して、遂に唐人律詩の源を開く、呂讓、京

入京詩云、俘囚經萬里、憔悴度三春、髮改河陽鬢、衣餘京洛塵、鍾儀悲去楚、隨會泣留秦、既謝平吳利、終成失路人、明餘慶從軍行云、三邊烽亂驚、十萬且橫行、風卷常山陣、笳喧細柳營、劍花寒不落、弓月曉逾明、會取淮南地、持作朔方城、此等詩攙入唐人集中、不可復辨。

崔顥詩、春風吹淺草、獵騎何翩翩、不如鮑照、獸肥春草短、飛鞚越平陸之古。

月支、音肉支、本匈奴名、曹子建白馬篇、控弦破左的、右發摧月支、注、月支、射帖也、按稱射帖曰月支、蓋取射殺胡兵之義也、

掌上舞本爲趙飛燕事、又南史羊侃傳、有舞人張淨琬、腰圍一尺六寸、時人咸推能掌上

に入る詩を和して云ふ「俘囚、萬里を經、憔悴、三春を度る、髮は改む河陽の鬢、衣は餘す京洛の塵、鍾儀悲んで楚を去り、隨會泣いて秦に留る、既に吳を平ぐの利を謝す、終に路を失ふの人と成る」明餘慶の從軍行に云ふ「三邊烽亂驚す、十萬且つ橫行す、風は卷く常山の陣、笳は喧し細柳の營、劍花寒くして落ちず、弓月曉に逾明かなり、會淮南の地を取つて、持して朔方の城を作る」と、此れ等の詩、唐人の集中に攙入せんに、復辨すべからず。

崔顥の詩に「春風淺草を吹き、獵騎何ぞ翩々」は、鮑照の「獸は肥えて春草短く、飛鞚平陸を越ゆ」の古なるに如かず。

月支は、音肉支、本と匈奴の名なり「曹子建の白馬篇に「弦を控いて左的を破り、右發月支を摧く」と、注に、月支は射帖なり。（按ずるに、射帖を稱して月支と曰ふは、蓋、胡兵を射殺するの義に取るなり。）

掌上舞は、本と趙飛燕の事と爲す、又、南史羊侃傳に、舞人張淨琬といふものあり、腰圍一尺六寸、時人、咸な推して掌上舞を能くすといふ。

舞。

俗說云、鬻鰻鱺者必有奇禍、余謂妄言不足信也、然其所由來久矣、顏氏家訓、江陵劉氏以賣鱓羹為業、後生一兒、頭是鱓、自頸以下為人、是亦理之不可解者。

晉書、盛彥母既疾久、至于婢使數見捶撻、忿恨伺彥暫行、取蠐螬炙飴之、母食以為美、然疑是異物、密藏以示彥、彥見之抱母慟哭、絕而復蘇、母目豁然即開、從此遂愈、按本草、蠐螬治目中淫膚青翳白膜、其欲害者適治之耳、蓋孝感之所致。

宮川西岸有川端村、村中絕無蝮蛇、土民傳云、社神惡之故然、鄰村相距數十百步有蝮蛇、村農往往為其被害、余嘗療其人、聞之。

俗說に云ふ、鰻鱺を鬻ぐ者は、必ず奇禍ありと、余、妄言信ずるに足らずと謂ふ、然れども、其の由來する所久し、顏氏家訓に、江陵の劉氏、鱓羹を賣るを以て業と爲す、後、一兒を生む、頭は是れ鱓、頸より以下は人たりと、是れ亦理の解すべからざる者。

晉書に、盛彥の母既に疾むこと久し、婢使數捶撻せらるゝに至る、忿恨して彥の暫く行くを伺ひて、蠐螬を取りて炙りて之を飴(くら)はす、母食ひて以て美と爲す、然れども、是れ異物なるを疑ひ、密に藏して以て彥に示す、彥之れを見て、母を抱きて慟哭す、絕えて復た蘇す、母の目豁然として即ち開き、此れより遂に愈ゆと、按ずるに、本草に、蠐螬、目中の淫膚青翳白膜を治すと、其の害せんと欲せしは、適之れを治せしのみ、蓋、孝感の致す所なり。

宮川の西岸に、川端村あり、村中絕えて蝮蛇無しと云ふ、土民傳へて云ふ、社神之れを惡むの故に然かりと、鄰村相距ること數十百步、蝮蛇あり、村農往々其れに害せらる、余嘗て其の人を療し、之れを聞けり。

王維詩云、青草瘴時過夏口、白頭浪裡出湓城、余謂頭字爲鷗音訛、鮑照詩、翻浪揚白鷗、李善注、翻浪有似白鷗鳥也、錢起詩云、不知鳳沼霖初霽、但覺堯天日轉明、鳳沼一作傳說、余謂說當作野、書、說築于傅巖之野、青草對白鷗、傳野對堯天、尤妙、以今觀之、反覺牽强。

杜少陵石龕詩云、熊羆咆我東、虎豹號我西、我後鬼長嘯、我前狨又啼、余謂本魏武帝熊羆對我蹲、虎豹夾路啼、二句、偶閱楚詞、蟪蛄兮鳴東、蟊蠽兮號西、蛓緣兮我裳、蠋入兮我懷、蟲豸兮夾我、惆悵兮自悲、此眞少陵所祖。

劉長卿詩、欲掃柴門迎袁客、青苔黃葉滿貧家、妙矣、若改紅葉、則失貧家光景、王秋史詩、

王維の詩に云ふ「青草瘴時夏口を過ぎ、白頭浪裡湓城を出づ」と、余謂ふ、頭の字は、鷗の音と爲して訛ると、鮑照の詩に「翻浪白鷗を揚ぐ」と、李善の注に、翻浪、白鷗鳥に似たあるなりと、錢起の詩に云ふ「知らず鳳沼霖始めて霽れ、但だ覺ゆ堯天日轉た明なるを、」と、鳳沼、一に傳說に作る、余謂ふ、說は當に野に作るべし、書に、說、傅巖の野に築くと、青草、白鷗に對し、傳野、堯天に對す、尤も妙と、今を以て之れを觀れば、反りて牽强を覺ゆ。

杜少陵の石龕の詩に云ふ「熊羆我に咆て東し、虎豹我を號で西す、我が後には鬼長く嘯き、我が前には狨又啼く、」と余、魏の武帝の「熊羆我に對して蹲り、虎豹路を夾んで啼く」の二句に本づくと謂ふ、偶楚詞を閱するに、「蟪蛄東に鳴き、蟊蠽西に號ぶ、蛓我が裳に緣り、蠋我が懷に入る、蟲豸我を夾み、惆悵して自ら悲む」此れ眞に少陵の祖とする所なり。

劉長卿の詩に「柴門を掃ふて遠客を迎へんと欲す、青苔黃葉貧家に滿つ、」と、妙なり、若し紅葉に改むれば、則ち貧家の光景を失す、王秋史の詩に「亂泉聲裡才に履を通

亂泉聲裡才通屐、黃葉林間自著書、亦佳、近來茶山翁、名其集曰夕陽黃葉村舍詩、世人以爲新奇、不知夕陽黃葉村舍沈德潛所居之名、出唐詩別裁序。

李杜之詩、二王之書、後人學之、非不善也、然一句一字、必其面目、則優孟衣冠耳、歐陽公曰、學書當自成一家之體、其摸倣他人、謂之奴書、余亦謂摸擬之詩、爲奴詩、豈過論哉。

唐書溫造傳、大和二年內昭德寺火、延禁中野狐落、按、野狐落者、宮人所居也、唐朝文物一時盛矣、而宮中有此卑名、抑亦不典之極。

唐太子承乾、私引突厥與相狎比、于志寧上疏極言、太子大怒、遣張師政紇干承基往刺之、二人入其第、見志寧憔然在苦塊中、不忍

じ、黃葉林間自ら書を著す」と、亦佳なり、近來、茶山翁、其の集を名づけて、夕陽黃葉村舍詩と曰ふ、世人以て新奇と爲す、夕陽黃葉村舍は、沈德潛の居る所の名なるを知らず、唐詩別裁の序に出づ。

李杜の詩、二王の書、後人之れを學ぶ、善ならざるには非ざるなり、然れども、一句一字、其の面目を必すれば、則ち優孟の衣冠のみ、歐陽公曰く、書を學ぶには、當に自ら一家の體を成すべし、其の他人を摸倣するを、之れを奴書と謂ふと、余も亦摸擬の詩を謂ひて、奴詩と爲す、豈に過論ならんや。

唐書溫造傳に、大和二年內昭德寺火あり、禁中の野狐落に延すと、按ずるに、野狐落は、宮人の居る所なり、唐朝の文物、一時盛んなり、而して宮中に、此の卑名あるは、抑も亦不典の極なり。

唐の太子承乾、私に突厥を引きて、與に相ひ狎比す、于志寧、上疏して極言す、太子大に怒る、張師政紇干承基を遣し、往きて之れを刺さしむ、二人其の第に入り、志寧の憔然として苦塊中に在るを見て、殺すに忍びず、乃ち去る、

襲、乃去、蓋鉏麗之流也。

東國通鑑云、新羅武烈王妃、文明王后金氏、庾信之妹也、初其姊寶姬、夢登西兄山頂坐旋流徧國內、覺與文明言、明文戲曰、願買兄夢、因與錦裙為直、後武烈與庾信蹴鞠、庾信故蹴武烈衣紐落之、庾信曰、吾家幸近、請往綴之、因與俱往、置酒、從容喚寶姬來綴、寶姬辭曰、豈可以細事輕近貴公子乎、文明乃進綴紐、美而豔、武烈悅之、仍請婚、遂生男、是與源公夫人北條氏買夢相類。

隨園詩話、尹文端公論詩最細、有差半个字之說、如唐人、夜琴知欲雨、晚簟覺新秋、新秋二字現成語也、欲雨二字以欲字起雨字、非現成語也、差半个字矣、以此類推、名流多犯

蓋鉏麗の流なり。

東國通鑑に云ふ、新羅の武烈王の妃、文明王后金氏は、庾信の妹なり、初め其の姊、寶姬、西兄山頂に登り、坐して旋し、國內に流徧すと夢む、覺めて、文明と言ふ、文明戲れて曰く、願くは兄の夢を買はんと、因りて錦裙を與へて直と爲す、後、武烈、庾信と蹴鞠す、庾信故に武烈の衣紐を蹴みて之れを落す、庾信曰く、吾が家幸に近し、請ふ往きて之れを綴らんと、因りて與に俱に往く、置酒し、從容として寶姬を喚び來りて綴らしむ、寶姬辭して曰く、豈に細事を以て輕しく貴公子に近づくべけんやと、文明乃ち進みて紐を綴る、美にして豔なり、武烈之れを悅ぶ、仍りて婚を請ひ、遂に男を生めり、是れ源公の夫人北條氏が夢を買ふと相類せり。

隨園詩話に、尹文端公、詩を論ずること最も細なり、差半个字の說あり、唐人の「夜琴雨ならんと欲するを知り、晚簟新秋を覺ゆ」の如き、新秋の二字、現に成語なり、欲雨の二字、欲の字を以て雨の字を起す現成語に非ざるなり、半个字を差へり、此の類を以て推さば、名流も多く此の病を犯す、必ず「晚簟恰も秋に宜し」と云はゞ、宜の字、欲の

此病、必云晩簟恰宜秋、宜字對欲字、余謂、律詩嚴對偶、然亦不可太拘于法、此句活動、在覺新秋三字、如尹所改、不過求確對耳、元稹詩、雨冷新秋簟、星稀欲曙樓、亦同一法。

陸深豫章漫抄云、予往歲謫延平、北歸宿建陽公館、時薛宗鎧作令、與酌堂後軒、是歲閩中大雪、四山皓白、而芭蕉一株、横映粉牆、盛開紅花、名美人蕉、世稱王維雪蕉圖、爲奇格、而不知冒雪看花乃實境也、按夢溪筆談云、予家所藏摩詰畫、袁安臥雪圖、有雪中芭蕉、此乃得心應手、意到便成、故其理入神、迥得天意、據此則雪中芭蕉、其點景耳、美人蕉一名紅蕉、與芭蕉別種。

南燕主備德、宴群臣於延賢堂、酒酣、謂群臣

字に對す、余謂ふ、律詩は對偶を嚴にす、然れども、亦太だ法に拘るべからず、此の句の活動は、新秋を覺ゆの三字に在り、尹の改むる所の如きは、確對を求むるに過ぎざるのみ、元稹の詩に「雨は冷なり新秋の簟、星は稀にして曙けむと欲するの樓」も亦同一法。

陸深の豫章漫抄に云ふ、予、往歲延平に謫せらる、北に歸り建陽の公館に宿す、時に薛宗鎧、令と作る、與に堂の後軒に酌む、是の歲、閩中大に雪ふる、四山皓白、而して芭蕉一株、横に粉墻に映ず、盛に紅花を開く、美人蕉と名づく、世、王維の雪蕉の圖を稱して奇格と爲す、而して雪を冒して花を看るは乃ち實境なることを知らざるなり、按ずるに、夢溪筆談に云ふ、予が家に藏する所の摩詰の畫、袁安雪に臥するの圖に、雪中の芭蕉あり、此れ乃ち心に得て手に應じ、意到りて便ち成る、故に其の理神に入り、迥に天意を得、此れに據れば、則ち雪中の芭蕉は、其の景に點ずるのみ、美人蕉一名は紅蕉、芭蕉と別種なり。

南燕の主、備德、群臣を延賢堂に宴す、酒酣にして、群臣に

曰、朕可方自古何等主、靑州刺史鞠仲曰、陛下中興聖主、少康光武之儔、備德顧左右、賜仲帛千匹、仲以所賜多辭之、備德曰、卿知調朕、朕不知調卿邪、卿所對非實、故朕亦以虛言賞卿、韓範進曰、天子無戲言、今日之論、君臣俱失、柳宗元桐葉封弟辯祖此、李承嘉附武三思、詆尹思貞於朝、思貞曰、公附會姦臣、將圖不軌、先除忠臣邪、承嘉怒、劾奏思貞、出爲靑州刺史、或謂思貞曰、公平日訥於言、及廷折承嘉、何其敏邪、思貞曰、物不能鳴者、激之則鳴、韓退之送孟東野序祖此。

謂ひて曰く、朕は、古より何等の主に方ぶべき、靑州の刺史鞠仲曰く、陛下は中興の聖主、少康・光武の儔と、備德、左右を顧みて、仲に帛千匹を賜へといふ、仲賜ふ所の多きを以て之れを辭す、備德曰く、卿、朕を調することを知る、朕、卿を調することを知らざらんや、卿の對ふる所は實に非ず、故に朕も亦虛言を以て卿を賞すと、韓範進みて曰く、天子に戲言無し、今日の論、君臣俱に失すと、柳宗元の桐葉弟を封ずる辯は、此れを祖とす、李承嘉、武三思に附し、尹思貞を朝に詆る、思貞曰く、公、姦臣に附會す、將に不軌を圖らんとして、先づ忠臣を除くか、承嘉怒りて思貞を劾奏す、出して靑州の刺史と爲す、或ひと思貞に謂ひて曰く、公、平日、言に訥、廷に及びて承嘉を折く、何ぞ其れ敏なるや、思貞曰く、物、鳴ること能はざる者、之れを激すれば則ち鳴ると、韓退之の孟東野を送る序は此れを祖とす。

唐書、漢以來葬喪皆有瘞錢、後世里俗、稍以紙寓錢爲鬼事、吾邦葬喪亦有瘞錢、俗謂之六道錢、余謂、天下之廣、人物之夥、日日所費、

唐書に、漢以來、葬喪には、皆瘞錢あり、後世里俗、稍紙寓錢を以て鬼事を爲す、吾が邦の葬喪にも亦瘞錢あり、俗に之れを六道錢と謂ふ、余謂ふ、天下の廣き、人物の夥き、日々費す所は、勝げて數ふべからず、有用の物を以て、無益

不可勝數、以有用之物、爲無益之事、當如殊俗代用紙錢、鼠璞云、寓錢與塗車芻靈、何以異、俗謂果資於冥塗、則可咲、眞是格言。

禽字鳥獸通稱、禮記、猩猩能言、不離禽獸、後漢書華佗曰、吾有一術、名五禽之戲、一曰虎、二曰鹿、三曰熊、四曰猿、五曰鳥、又考工記、天下大獸五、脂者、膏者、羸者、羽者、鱗者、獸字亦似汎指鳥魚也、牝牡雌雄可以通稱禽獸、寄園寄所寄、引博物志云、周丞相與客閑步園中、玩群鷗、問曰、此牝鶴耶、牡鶴耶、客從旁曰、獸稱牝牡、禽爲雌雄、丞相曰、雄狐綏綏、狐非獸乎、牝鷄司晨、鷄非禽乎、客不能對、雖然牝牡二字從牛、雌雄二字從隹、乃禽獸之別也、自雄狐牝鷄之外、經史中亦不多見。

の事を爲す、當に殊俗の紙錢を代用するが如くすべし
鼠璞に云ふ、寓錢と、塗車・芻靈と、何を以て異ならむ、俗に
果して冥塗に資すと謂ふは、則ち咲ふべしと、眞に是れ
格言。

禽の字は、鳥獸通稱す、禮記に、猩猩能く言ふとも、禽獸を
離れずと、後漢書に、華佗曰く、吾に一術あり、五禽の戲と
名づく、一に曰く虎、二に曰く鹿、三に曰く熊、四に曰く猿、
五に曰く鳥と、又、考工記に、天下の大獸五、脂なる者、膏な
る者、羸なる者、羽なる者、鱗なる者と、獸の字も亦汎く鳥
魚を指すに似たり、牝牡雌雄、以て禽獸を通稱すべし、寄
園寄所寄に、博物志を引きて云ふ、周丞相、客と園中に閑
歩し、群鷗を玩ぶ、問ふて曰く、此れ牝鶴なるか、牡鶴なる
か、客旁よりして曰く、獸に牝牡と稱し、禽に雌雄と爲す
丞相曰く、雄狐綏々たりと、狐は獸に非ずや、牝雞晨を司
ると、雞は禽に非ずや、客對ふること能はず、然りと雖ども、
牝牡の二字、牛に從ひ、雌雄の二字、隹に從ふ、乃ち禽
獸の別なり、雄狐牝雞よりの外、經史中、亦多く見ず。

少陵從軍行云、驅馬天雨雪、軍行入高山、徑危抱寒石、指落層冰間、漢書匈奴傳、高帝自將兵往擊之、會天大寒雨雪、卒之墮指者、十二三、少陵取此、改墮爲落、蓋其用字縱横、不泥舊套然、亦確乎有據、魏書盧昶傳、諸軍遇大寒雪、軍人凍死、及手足落者三分而二、古人云、杜詩無一字無來處、信矣。

唐書柳公權傳、穆宗問公權用筆法、對曰、心正則筆正、筆正乃可法矣、時帝荒縱、故公權及之、帝改容、悟其以筆諫也、又有醫諫、柳公綽進大醫箴曰、氣行無間、隙不在大、憲宗曰、卿愛朕者深、蓋以醫諫也、金史、楊雲翼嘗患風痺、稍愈、哀宗親問愈之之方、對曰、但治心耳、心和則邪氣不干、治國亦然、人君先正其

少陵の從軍行に云ふ、馬を驅れば天雪ふる、軍行高山に入る、徑危して寒石を抱く、指は落つ層冰の間、漢書匈奴傳に、高帝自ら兵を將ゐて往きて之れを擊つ、天大に寒く雪ふるに會ふ、卒の指を墮す者、十に二三と、少陵此れを取りて、墮を改めて落と爲す、蓋、其の字を用ふる縱横、舊套に泥まざること然り、亦確乎として據有り、魏書盧昶傳に、諸軍大寒雪に遇ひ、軍人凍死し、及び手足落つる者、三分にして二、古人云ふ、杜詩は、一字の來處無きは無しと、信なり。

唐書柳公權傳に、穆宗、公權に筆を用ふるの法を問ふ、對へて曰く、心正しければ則ち筆正し、筆正しければ乃ち法とすべしと、時に帝、荒縱なり、故に公權之れに及ぶ、帝、容を改む、其の筆を以て諫むるを悟るなり、又、醫を以て諫むるあり、柳公綽、大醫箴を進めて曰く、氣、無間を行る、隙、大に在らず、憲宗曰く、卿、朕を愛すること深しと、蓋、醫を以て諫むるなり、金史に、楊雲翼、嘗て風痺を患ふ、稍愈ゆ、哀宗親しく之れを愈すの方を問ふ、對へて曰く、但だ心を治むるのみ、心和すれば、則ち邪氣干さず、國を治むるも亦然り、人君先づ其の心を正くすれば、則ち朝

心則朝廷百官莫不一於正矣、上瞿然知其爲醫諫也、元史、廉希憲傳、世祖詔楊州名醫王仲明視希憲疾、既至、希憲服其藥、能杖而起、帝喜曰、卿得良醫、疾向愈矣、對曰、醫持善藥以療臣疾、苟能戒愼、則誠如聖諭、設或肆惰、良醫何益、蓋以醫諷諫也、明史夏良勝傳、武宗南巡詔下、醫士徐鏊亦以其術諫、略云、喜無傷心、怒無傷肝、慾無傷腎、勞無傷脾、東坡蓋公堂記、引謝醫却藥、以諷王安石新法、議論卓絶、能中時弊、張文潛藥戒千餘言、蓋祖此文。

呉又可溫疫論二卷、蓋崇禎辛巳、疫氣蔓延數省、以傷寒法治之、多死、因推究而著此書、謂傷寒中風、脈絡因表入裡、溫疫之氣、自口

廷百官、正に一ならざる莫しと、上瞿然たり、其の醫諫たるを知るなり、元史廉希憲傳に、世祖、楊州の名醫王仲明に詔して、希憲の疾を視せしむ、既に至る、希憲其の藥を服す、能く杖つきて而して起つ、帝喜びて曰く、卿良醫を得たり、疾愈ゆるに向はん、對へて曰く、醫、善藥を持して以て臣の疾を療す、苟も能く戒愼せば、則ち誠に聖諭の如し、設し或は肆惰せば、良醫も何ぞ益あらんと、蓋、醫を以て諷諫するなり、明史夏良勝傳に、武宗南巡の詔下る、醫士徐鏊亦た其の術を以て諫む、略に云ふ、喜ぶも心を傷ること無く、怒るも肝を傷ること無く、慾も腎を傷ること無く、勞すれども脾を傷ること無しと、東坡の蓋公堂の記に、醫を謝し藥を卻くることを引きて、以て王安石の新法を諷す、議論卓絶、能く時弊に中る、張文潛の藥戒、千餘言、蓋、此の文を祖とす。

呉又可の溫疫論二卷、蓋、崇禎辛巳、疫氣數省に蔓延す、傷寒の法を以て之れを治す、多く死す、因りて推究して此の書を著す、謂ふ、傷寒中風脈絡、表に因りて裡に入る、溫疫の氣、口鼻よりして入り、膜原に伏す、不表不裡の間に

鼻而入、伏於膜原、在不表不裡之間、其說發前人所未發、然亦有據、周書異域傳、鄯善古樓蘭國也、去長安五千里、所治城方一里、地多沙鹵少水草、北卽白龍堆沙路、魏太武時、爲阻渠安國所攻、其王西奔且末、西北有流沙、數百里、夏日有熱風、爲行旅之患、風之欲至、惟老駝知之、卽鳴而聚立、埋其口鼻於沙中、人每以爲候、亦卽將氈擁蔽鼻口、其風迅駛、斯須過盡、若不防者、必至危斃、按多紀先生醫賸、擧醫書數種、證邪從口鼻入之言、可謂該博矣、然不引周書、故此表出。

溫疫論原病云、昔有三人、冒霧早行、空腹者死、飮酒者病、飽食者不病、按博物志、王恭張衡馬均昔冒重霧行、一人無恙、一人病、一人

在り、其の說、前人の未だ發せざる所を發す、然れども、亦據有り、周書異域傳に、鄯善は、古の樓蘭國なり、長安を去ること五千里、治す所の城、方一里、地、沙鹵多く、水草少し、北は卽ち白龍堆沙路、魏の太武の時、阻渠安國に攻められ、其の王、西、且末に奔る、西北に流沙あり、數百里、夏日には熱風あり、行旅の患を爲す、風の至らんと欲する、唯だ老駝之れを知る、卽ち鳴きて而して聚り立ち、其の口鼻を沙中に埋む、人每に以て候と爲す、亦卽ち氈を將つて鼻口を擁蔽す、其風迅駛し、斯須にして過ぎ盡く、若し防がざれば、必ず危斃に至ると、按ずるに、多紀先生の醫賸に、醫書數種を擧げて、邪の口鼻より入るの言を證す、該博と謂ふべし、然るに周書を引かず、故に此に表出す。

溫疫論原病に云ふ、昔三人あり、霧を冒して早行す、空腹の者は死す、酒を飮む者は病む、食に飽く者は病まずと、按ずるに、博物志に、王恭・張衡・馬均、昔、重霧を冒して行く、一人は恙無く、一人は病み、一人は死す、其の故を問ふ、

死、問其故、無恙人曰、我飲酒、病者食、死者空腹、竇革酒譜引本草云、酒味辛苦甘、大熱有毒、主行藥勢、殺百蟲惡氣、昔有三人、晨犯霧露而行、空腹者死、食粥者病、飲酒者無疾、明酒禦寒邪、過於穀氣矣、酒雖能勝寒邪通和諸氣、苟過則成大疾、吳氏之說與此二書相反、別有所據乎、抑不可信也、鄕俗出入疫家者、多借酒力以避疫氣、遂無傳染之患。

通鑑、嘗有一人士、參和士開疾、値醫云、王傷寒極重、應服黃龍湯、注、陶弘景曰、今近城寺別塞空罌口、內糞倉中、久年得汁、甚黑而苦、名爲黃龍湯、治溫病垂死者、皆差、按溫疫論、載陶氏黃龍湯云、此症下與不下皆死、用此或可回生、尙勝坐以待斃、湯名本此、肘後方、

恙無き人曰く、我、酒を飲む、病む者は食す、死する者は空腹と、竇革の酒譜に、本草を引きて云ふ、酒味は辛苦甘、大熱毒あり、藥勢を行らすことを主る、百蟲の惡氣を殺す、昔、三人あり、晨に霧露を犯して行く、空腹の者は死す、粥を食ふ者は病む、酒を飲む者は疾無し、明に酒は寒邪を禦ぐこと、穀氣に過ぎたり、酒は能く寒邪に勝ち、諸氣を通和すと雖ども、苟も過ぐれば、則ち大疾を成す、吳氏の說、此の二書と相反す、別に據る所あるか、抑も信ずべからざるなり、鄕俗、疫家に出入する者、多くは酒力を借りて以て疫氣を避く、遂に傳染の患無し。

通鑑に、嘗て一人の士あり、和士開の疾に參す、醫に値ふ、云く、王の傷寒極めて重し、應に黃龍湯を服すべし、注に陶弘景曰く、今、城に近きの寺、別に空罌の口を塞ぎ、糞倉の中に內るれば、年を久しくして汁を得、甚だ黑くして而して苦し、名づけて黃龍湯と爲す、溫病の死に垂んとする者を治す、皆差ゆ、按ずるに、溫疫論に、陶氏の黃龍湯を載せて云ふ、此の症下ると下らざると、皆死す、此れを用ふれば、或は生を回へすべし、尙、坐して以て斃るゝを待つに勝る、湯の名此に本づく、肘後方に、糞汁を絞りて

絞糞汁飲、數合至一二升、謂之黄龍湯、又小柴胡湯、亦名黄龍湯、見千金方。

王阮亭曰、越處女與勾踐論劍術曰、妾非受於人也、而忽自有之、司馬相如答盛覽曰、賦家之心、得之於内、不可得而傳、雲門禪師曰、汝等不記己語、反記吾語、異日稗販我耶、數語皆詩家三昧、余謂不啻詩家、亦可以爲醫者三昧矣。

余讀釋策彦南遊稿、其所履歷、令人豔羨、蓋吾邦有韻紀行中第一壯觀、但恨佳篇不多、淮陰侯祠云、秦楚平來未賞功、雲夢游獵失良弓、當時若用蒯通計、漢祖乾坤掌握中、楚項廟云、執鋭被堅亡暴秦、豈圖天下屬寬仁、監司休掃廟前草、又有春風生美人、（許渾詩、千載興

飲む、數合より一二升に至る、之れを黄龍湯と謂ふ、又、小柴胡湯も亦黄龍湯と名づくと、千金方に見ゆ。

王阮亭曰く、越の處女、勾踐と劍術を論じて曰く、妾は人に受くるに非ざるなり、而して忽ち自ら之れを有す、司馬相如盛覽に答へて曰く、賦家の心、之れを内に得、得て傳ふべからずと、雲門禪師曰く、汝等己の語を記せず、反りて吾の語を記す、異日我を稗販するかと、數語皆詩家の三昧と、余謂ふ、啻に詩家のみならず、亦以て醫者の三昧と爲すべし。

余、釋策彦の南遊稿を讀む、其の履歴する所、人をして豔羨せしむ、蓋、吾が邦、有韻紀行中の第一壯觀、但だ恨むらくは、佳篇多からず、淮陰侯の祠に云ふ、「秦楚平げ來つて未だ功を賞せず、雲夢游獵良弓を失ふ、當時若し蒯通の計を用ひば、漢祖の乾坤掌握の中、」楚項廟に云ふ、「鋭を執り堅を被つて暴秦を亡す、豈に圖らんや天下寬仁に屬す、監司掃ふことを休めよ廟前の草、又春風の美人を生ずる有らん、」（許渾の詩に、千載の興亡浪りに愁ふる莫れ、漢家の功業亦荒丘、空しく餘す原上虞姬の草、舞盡きて

亡英雄愁、漢家功業亦荒丘、空餘原上虞姬草、舞盡東風未肯休、朱靜庵詩、力盡重瞳霸氣消、楚歌聲裡恨超超、貞魂化作原頭草、不逐東風入漢郊、竝用虞美人草、以詠虞姬、策彥詩不及遠矣、送魏提擧詩云、聖代祇今多龍華、休官何事獨歸家、晚春一別兩行淚、半恨啼鵑半落花、金山寺云、解道金山山裡寺、上方隔在翠微間、龍爲行者點燈去、鷗與殘鶯結社閑、茶鼎烹泉銷世味、蒲團坐砌杜禪關、過船日暮重多少、稛載鐘聲樹影還、張祜詩、一宿金山寺、微茫水國分、僧歸夜航月、龍出曉堂雲、樹影中流見、鐘聲兩岸聞、因悲在城市、終日醉醺醺、結句用此、又佳句云、遮莫西東語音異、良媒幸有管城侯、眼似老年看不見、六橋風景霧中花、杜詩、老年花作霧中看、一聯云、客愁滴破松堂雨、僧夢燃殘茶竈烟、此祖岑嘉州孤燈燃客夢之句、風斯在下矣。

全浙兵制有日本風土記、中載邦人詩十餘

東風未だ肯て休まず」、朱靜庵の詩に、力盡きて重瞳霸氣消す、楚歌聲裡恨迢々、貞魂化して原頭の草と作る、東風を逐ふて漢郊に入らず、竝に虞美人草を用ひて以て虞姬を詠す、策彥の詩及ばざること遠し)魏提擧を送る詩に云ふ「聖代祇だ今龍華多し、官を休めて何事ぞ獨り家に歸る、晚春一別兩行の淚、半は啼鵑を恨み半は落花」金山寺に云ふ「解道く金山々裡の寺、上方は隔てゝ翠微の間に在り、龍は行者の爲めに燈を點じて去り、鷗は殘鶯と社を結んで閑なり、茶鼎泉を烹て世味を銷し、蒲團砌に坐して禪關を杜ぐ、過船日暮重ねて多少、鐘聲樹影を稛載して還る、」張祜の詩に「一宿す金山寺、微茫として水國分る、僧は歸る夜航の月、龍は出づ曉堂の雲、樹影中流に見ゆ、鐘聲兩岸に聞ゆ、因つて悲む城市に在るを、終日醉ふて醺々、結句此れを用ふ、又、佳句に云ふ「遮莫れ西東語音の異なる、良媒幸に管城侯有り、眼は老年に似て看れども見えず、六橋の風景霧中の花、(杜詩に、老年の花は霧中の看を作す、)一聯に云ふ、「客愁滴破す松堂の雨、僧夢燃殘す茶竈の烟」此れ岑嘉州の「孤燈客夢を燃す」の句を祖とす、風斯れ下に在り。

全浙兵制に、日本風土記有り、中に、邦人の詩十餘首を載

首、因擧異同以備參考、詠西湖云、一株楊柳一株花、本是唐朝賣酒家、唯有吾邦風土異、春風無處不桑麻、（此首或云、策彥作、堯山堂外記云、交趾使遊西湖絶句、一株楊柳幾枝花、醉飲西湖賣酒家、我國繁華不如此、春風遍地是桑麻、）昔年曾見此湖圖、不意人間有此湖、今日卻從湖上過、畫工猶自欠工夫、春日感懷云、中原二月綺如塵、異卉奇葩景物新、可是吾天仁更濶、小塘幽草亦成春、奉邊將云、棄子拋妻入大唐、將軍何事苦堤防、鬪津橋上團圓月、天地無私一樸光、保叔塔云、保叔緣何不保夫、造成七級石浮圖、縱然一派西湖水、說得清時也是汚、被張太守禁舟中嘆懷云、老鶴徘徊日出東、咲看宇宙作樊籠、只因飛入堯天濶、恨在扁舟一葉中、四友亭云、四友亭名萬古香、清

す、因りて異同を擧げて以て參考に備ふ、西湖を詠ずるに云ふ「一株の楊柳一株の花、本と是れ唐朝の賣酒家、唯だ吾が邦風土の異なる有り、春風處として桑麻ならざるは無し」（此の首、或は云ふ、策彥の作と、堯山堂外記に云ふ、交趾の使、西湖に遊ぶ絶句に、一株の楊柳幾枝の花、醉飲す西湖賣酒の家、我が國の繁華此くの如くならず、春風遍地是れ桑麻）「昔年曾て見る此の湖の圖、意はざりき人間に此の湖有るを、今日卻つて湖上より過ぐ、畫工猶自ら工夫を欠ぐ」春日感懷に云ふ「中原二月綺にして塵の如し、異卉奇葩景物新なり、是れ吾が天の仁更に濶なる可し、小塘の幽草も亦春を成す」邊將に奉ずるに云ふ「子を棄て妻を拋つて大唐に入る、將軍何事ぞ提防に苦む、鬪津橋上團圓の月、天地私無し一樸の光」保叔塔に云ふ「保叔何に緣つて夫を保せざる、造り成す七級の石浮圖、縱然一派西湖の水、說き得たり清時も也た是れ汚る」張太守に禁ぜられ、舟中嘆懷に云ふ「老鶴徘徊、日、東に出づ、笑つて看る宇宙樊籠と作る、只だ飛んで堯天の闊きに入るに因つて、恨らくは扁舟一葉の中に在るを」四友亭に云ふ「四友亭の名萬古香し、淸香曾て遠に遐方に到る、我來つて見えず庭中の主、松竹靑々梅自ら貴なり」花

香曾遞遐方、我來不見庭中主、松竹青青梅自黃、題花鳥畫云、嬌鳥奇花誰畫成、花無香氣鳥無聲、任君舒卷從君看、花不凋零鳥不驚、鳩鵲爭鳴云、鳩一聲兮鵲一聲、鳩聲啼雨鵲聲晴、老天若也難分判、一半晴晴一半陰、（恐是一半陰陰一半晴之誤、陰字失韻）答風俗問云、君問吾風俗、吾風俗最淳、衣冠唐制度、禮樂漢君臣、玉甕藏新釀、金刀割細鱗、年年二三月、桃李一般春、（按衣冠一聯、僧奝然對宋太祖之作、宋史不載全篇、疑是後人續成前後、譯史紀餘、嗜哩嘛哈答大明高皇帝問日本風俗云、國比中原國、人同上古人、衣冠唐制度、禮樂漢君臣、銀甕篘新酒、金刀膾錦鱗、年年二三月、桃李一般春、）普福迷失、樂淸被獲、感懷云、來遊上國看中原、細嚼青松咽冷泉、慈母在堂年八十、孤兒爲客路三千、心依北闕浮雲外、身在西山返照邊、處處朱門桃李巷、不

鳥の畫に題して云ふ「嬌鳥奇花誰か畫き成す、花に香氣無く鳥に聲無し、君に任して舒卷し君に從して看る、花は凋零せず鳥は驚かず」鳩鵲爭鳴に云ふ「鳩一聲鵲一聲、鳩聲は雨に啼き鵲聲は晴、老天也た分判し難きが若し一半は晴晴一半は陰る」（恐くは是れ「一半は陰々一半は晴」の誤りならん、陰の字、韻を失す）風俗の問に答へて云ふ「君は吾が風俗を問ふ、吾風俗最も淳なり、衣冠は唐の制度、禮樂は漢の君臣、玉甕新釀を藏す、金刀細鱗を割く、年々二三月、桃李一般の春」と（按ずるに、衣冠の一聯は、僧奝然の宋太祖に對ふるの作、宋史に、全篇を載せず、疑らくは是れ後人前後を續成す、譯史紀餘に、嗜哩嘛哈、大明高皇帝の日本の風俗を問ふに答へて云ふ、國は中原の國に比す、人は上古の人に同じ、衣冠は唐の制度、禮樂は漢の君臣、銀甕、新酒を篘し、金刀、錦鱗を膾にす、年々二三月、桃李一般の春）普福迷失して樂淸獲らる感懷に云ふ「上國に來遊して中原を看る、青松を細嚼し冷泉を咽む、慈母堂に在り年八十、孤兒客と爲る路三千、心は依る北闕浮雲の外、身は在り西山返照の邊、處々の朱門桃李の巷、知らず何の日か是れ歸年」春雪に題して云ふ「昨夜東風北風に勝る、春雪を釀し來つて長空に滿つ、梨花樹上

知何日是歸年、題春雪云、昨夜東風勝北風、釀來春雪滿長空、梨花樹上白加白、桃杏枝頭紅不紅、鶯閣幾時能出谷、燕愁何日得泥融、塞冰鎖却鞦韆架、路阻行人去不通、萍云、錦鱗密密不容鍼、只爲根兒做不深、曾與白雲爭水面、豈容明月下波心、幾番浪打應難滅、數陣風吹不復沈、多少魚龍藏在底、漁翁無處下鉤尋、堅瓠集、明初胡虚白咏萍云、重重疊疊砌魚鱗、根帶渾無半寸深、偏爲太陽遮水面、不容明月印波心、千層浪打依然聚、幾度風吹不肯沈、多少錦鱗藏葉底、教人無計下鉤尋、寄園寄所寄引莫氏八林云、明朝欲征安南國、作一萍詩當檄文、曰、穿田渡水冐秧針、到底原來種不深、空有根苗空有葉、敢生枝節敢生心、但知聚處焉知散、祇識浮時不識沈、大抵中天風勢惡、歸湖海竟難尋、安南國得檄、即次韻云、錦鱗密密莫容針、帶葉連枝不許深、常與白雲爭水面、豈容明月墜波心、千條雨線穿難破、萬頃風濤滾不沈、多少魚龍藏水底、漁郎無計把鉤尋、育王云、偶來覽勝鄮峯境、山路行行雪作堆、風

に白、白を加へ、桃杏枝頭に紅、紅ならず、鶯は問ふ幾時か能く谷を出づ、燕は愁ふ何の日か泥の融するを得ん、塞冰鎖卻す鞦韆の架、路行人を阻てゝ去つて通ぜず、萍に云ふ「錦鱗、密々鍼を容れず、只だ根兒の爲に做す深からず、曾て白雲と水面を爭ふ、豈に容さむや明月の波心に下るを、幾番の浪打つて應に滅し難かるべし、數陣の風吹いて復沈まず、多少の魚龍藏れて底に在り、漁翁鉤を下して尋ぬるに處無し」(堅瓠集に、明初の胡虚白、萍を詠じて云ふ「重々疊々魚鱗に砌す、根蔕渾て半寸の深無し、偏に太陽の水面を遮るが爲に、明月の波心に印するを容さず、千層浪打つて依然として聚る、幾度か風吹いて肯て沈まず、多少の錦鱗葉底に藏し、人をして鉤を下して尋ぬるに計無からしむ」と、寄園寄所寄に、莫氏八林を引きて云ふ、明朝、安南國を征せんと欲す、一の萍の詩を作りて檄文に當てゝ曰く「田を穿ち水を渡り秧針を冐す、到底原來種うること深からず、空しく根苗有り空しく葉有り、敢て枝節を生じ敢て心を生ぜん、但だ聚る處を知る焉ぞ散ずることを知らん、祇だ浮ぶ時を識つて沈むことを識らず、大抵中、天風勢惡し、掃ふて胡海に歸して竟に尋ね難し」と、安南國檄を得て即ち次韻して云ふ、

攪空林譏虎嘯、雲埋老樹斷猿哀、擡頭東塔又西塔、移歩前臺更後臺、正是如來眞境界、朧天香散一枝梅、徐氏筆精、倭夷入貢駐船杭城外湧金門、咏柳云、湧金門外柳如金、三日不來成綠陰、折取一枝城裡去、教人知道是春深、又、西風古道摧楊柳、落葉不如歸意多、寄園寄所寄引西墅雜記云、成化甲午倭人入貢見欄前蜀葵花、不識人問之題詩云、花如木槿花相似、葉比芙蓉葉一般、五尺闌干遮不盡、尚留一半與人看、按花譜、葵花一名一丈紅、三四句隱用之、陸次雲譯史紀餘、釋金俊和宋學士贈詩云、一曲錯買離郷舶、抹過鯨波萬里間、震旦扶桑無異土、參方飽看浙西山、金俊姓神、氏秀、日本國高井縣人、

深きを計らず、常に白雲と水面に爭ふ、豈に容さんや明月の波心に墜つるを、千條の雨線穿つて破り難く、萬頃の風濤滾して沈まず、多少の魚龍水底に藏す、漁郎鉤を把つて尋ぬるに計無し」、育王に云ふ、「偶來つて覽勝す鄮峯の境、山路行々雲、堆を成す、風は空林を攪して譏虎嘯き、雲は老樹を埋みて斷猿哀しむ、頭を擡す東塔又西塔、步を移す前臺更に後臺、正に是れ如來の眞境界、朧天香散す一枝の梅、」徐氏筆精に、倭夷入貢し、杭城外の湧金門に駐船す、柳を詠じて云ふ、「湧金門外柳、金の如し、三日來らず綠陰を成す、一枝を折り取つて城裡に去る、人をして是れ春深を知道せしむ、」又、「西風古道楊柳を摧く、落葉は歸意の多きに如かず、」寄園寄所寄に、西墅雜記を引きて云ふ、成化甲午、倭人入貢す、欄前の蜀葵花を見て、識らず、人之れを問ふ、詩を題して云ふ、「花は木槿の如く花相似たり、葉は芙蓉に比して葉一般、五尺の欄干遮り盡さず、尚一半を留めて人に與へて看せしむ、」按ずるに、花譜に、葵花一名は一丈紅、三四句之れを隱用す、陸次雲の譯史紀餘に、釋の金俊、宋學士の贈詩に和して云ふ、「一曲錯買す離郷の舶、抹し過ぐ鯨波萬里の間、震旦扶桑異土無し、參方飽まで看る浙西の山、」金俊、姓は神、氏は秀、日本

詩見宋學士集中、査爲仁蓮坡詩話、汪琬贈人句云、家臨綠水長州苑、人在青山短簿祠、與沐景顒滄海遺珠集所載、日本使臣天祥題虎邱寺、樓臺半落長洲苑、簫鼓時來短簿祠之句、似暗合、細味之用意各別、詩格亦自不同、釋黃泉山堂清話云、福省海濱有漂船、其中人物儀具極淸楚、省主知貴人、以舠舲置前通信、其人卽賦詩曰、日出扶桑是我家、飄搖七日到中華、山川人物般般異、唯有寒梅一樣花、其末書曰、某日本國王某王之子、因月夜泛舟、不覺至此、省主見嘆曰、異方之人亦有才如此可嘉、命有司以盛禮款待、具大船送回、予及至此邦、詢其人、竝無有知之者、江村北海曰、曹學佺明詩選載日本僧天

國高井縣の人、詩は宋學士の集中に見ゆ、査爲仁の蓮坡詩話に、汪琬の人に贈る句に云ふ「家は綠水長州の苑に臨み、人は青山短簿の祠に在りて」、沐景顒の滄海遺珠集に載する所の、日本の使臣、天祥の虎邱寺に題する「樓臺半は落つ長洲の苑、簫鼓時に來る短簿の祠」の句と、暗合するに似たり、細に之れを味ふに、用意各別なり、詩格も亦自ら同じからず、釋の黃泉、山堂淸話に云ふ、福省の海濱に漂船あり、其の中、人物儀具極めて淸楚、省主、貴人なるを知りて、舠舲を以て前に置き、通信せしむ、其の人、卽ち詩を賦して曰く「日、扶桑に出づ是れ我が家、飄搖七日中華に到る、山川人物般々異なり、唯だ有り寒梅一樣の花」、其末に書して曰く某は日本國王某王の子、月夜舟を泛ぶるに因りて、覺えず此に至ると、省主見て嘆じて曰く、異方の人も亦才有ること此くの如し、嘉すべしと、有司に命じ、盛禮を以て款待す、大船を具へて送回す、予、此の邦に至るに及びて、其の人を詢ふに、竝に之れを知る者有る無し、江村北海曰く、曹學佺の明詩選に、日本の僧、天祥の詩十一首、機先の詩二首を載す、二僧、中土に賞せられ、而して我邦に湮晦す、甚だ歎惜すべしと、朝鮮の徐剛中の著す所の東人詩話に、「淸磬月高くして遠寺を知

鮮詩十一首、機先詩二首、二僧被賞乎中土、而湮晦乎我邦、甚可嘆惜、朝鮮徐剛中所著東人詩話、以清磬月高知遠寺、長林雲盡辨遙山、爲日本僧梵岭詩、余未考梵岭何人。

茅亭客話、勾居士名令玄、蜀郡人、有敬禮瓦屋和尚塔偈曰、大空無盡劫成塵、玄步孤高物外人、日本國來尋彼岸、洞山林下過迷津、流流法亂誰無分、了了教知我最親、一百六十三歲後、方于此塔葬全身、瓦屋和尚名能光、日本國人也、嗣洞山悟本禪師、天復年初入蜀、僞永泰軍節度使鹿虔扆捨碧鷄坊宅、爲禪院居之、至孟蜀長興年末遷化、時齒一百六十三、故有此句、按天復元年當吾延喜改元、瓦屋和尚不詳其人、錄竢追考。

り、長林雲盡きて遙山を辨ず」と以て、日本の僧、梵岭の詩と爲す、余、未だ梵岭の何人なるかを考へず。

茅亭客話に、勾居士、名は令玄、蜀郡の人、瓦屋和尚の塔に敬禮するの偈有り、曰く、「大空無盡劫して塵と成る、玄步す孤高物外の人、日本國より來つて彼岸を尋ね、洞山林下過きて津に迷ふ、流々法亂れて誰か分つこと無し、了々敎知つて我最も親しむ、一百六十三歲の後、方に此の塔に于いて全身を葬らん」、瓦屋和尚、名は能光、日本國の人なり、洞山の悟本禪師に嗣ぐ、天復年初、蜀に入る、僞永泰軍節度使、鹿虔扆、碧鷄坊の宅を捨てゝ禪院と爲し、之れに居らしむ、孟蜀長興年末に至りて遷化す、時に齒一百六十三、故に此の句ありと、按ずるに、天復元年は、吾が延喜改元に當る、瓦屋和尚は、其の人を詳にせず、錄して追考を竢つ。

或以日域爲本邦之稱非、日域猶言天下也、魏書李孝伯傳、世祖太武皇帝、英叡自天籠罩日域。

賀蘭進明曰、晉用王衍爲三公、祖尚浮虛、致中原板蕩、今房琯專爲迂濶大言、以立虛名、所引用皆浮華之黨、眞王衍之比也、琯布衣時、與杜甫善、及爲宰相、請自帥師討賊、敗於陳濤斜、此役、琯用車戰、果是迂濶、甫有悲陳濤詩、又其詠懷云、杜陵有布衣、老大意轉拙、寄身一何愚、竊比稷與契、所謂浮華之黨、甫亦不免其責也、（朱竹垞曰、劉健不喜詩、謂人曰、縱爲李杜不過一酒徒耳、然其英廟挽歌、可謂佳作、此語蓋有所激而發也。）

余性嗜酒旁好詩、恨乏韻致、近者不自量、欲專攻歐陽公五代史加之評注、他未暇也、韓

或は日域を以て本邦の稱と爲すは、非なり、日域は猶天下と言ふがごときなり、魏書李孝伯傳に、世祖太武皇帝、英叡天よりし、日域を籠罩す。

賀蘭進明曰く、晉、王衍を用ひて三公と爲し、浮虛を祖尙す、中原の板蕩を致す、今、房官專ら迂闊大言を爲し、以て虛名を立つ、引用する所は、皆浮華の黨、眞に王衍の比なり、琯布衣の時、杜甫と善し、宰相と爲るに及びて、請ひて自ら師を帥ゐて賊を討じ、陳濤斜に敗る、此の役、琯、車戰を用ふ、果して是れ迂闊、甫に悲陳濤の詩あり、又、其の詠懷に云ふ「杜陵に布衣有り、老大意轉た拙なり、身を寄す一に何ぞ愚なる、竊に稷と契とに比す、」と謂はゆる浮華の黨甫も亦其の責を免れざるなり。(朱竹垞曰く、劉健詩を喜まず、人に謂ひて曰く、縱ひ李杜と爲るも、一酒徒に過ぎざるのみと、然れども、其の英廟の挽歌は、佳作と謂ふべし、此の語、蓋し激する所有りて發せしならん。)

余、性酒を嗜む、旁ら詩を好む、恨らくは、韻致に乏しきを、近ごろ、自ら量らず、專ら歐陽公の五代史を攻め、之れに評注を加へんと欲す、他、未だ暇あらざるなり、韓文公の

文公詩云、多情懷酒伴、餘事作詩人、他日若編吾詩、當以夢亭餘事名之、蘓穎濱亦曰、讀書須學爲文、餘事作詩耳、與此少異。

文者邦人之所難、紀事最難、初學以省助字爲先務、明史簡潔可以爲法、如左國史漢、不易學也。

魏書皇始六年、島夷桓玄廢其主司馬德宗而自立、天賜元年島夷劉裕起兵誅桓玄、按司馬氏簒魏爲天子、而北魏亦自立稱帝、當時史體當然。

韓文公示姪孫湘詩云、一封朝奏九重天、夕貶潮陽路八千、欲爲聖明除弊事、肯將衰朽惜殘年、雲横秦嶺家何在、雪擁藍關馬不前、知汝遠來應有意、好收吾骨瘴江邊、柳柳州

詩に云ふ「多情酒伴を懷ひ、餘事詩人と作る」と、他日、若し吾が詩を編せば、當に夢亭餘事を以て之れに名づくべし、蘓穎濱も亦曰く、書を讀む、須らく文を爲ることを學ぶべし、餘事詩を作らんのみと、此れと少しく異なり。

文は、邦人の難しとする所、紀事最も難し、初學は、助字を省くを以て先務と爲す、明史簡潔、以て法と爲すべし、左國史漢の如きは、學び易からざるなり。

魏書に、皇始六年、島夷の桓玄、其の主、司馬德宗を廢し而して自立す、天賜元年、島夷の劉裕、兵を起して桓玄を誅すと、按ずるに、司馬氏、魏を簒ひて天子と爲る、而して北魏も亦自立して帝と稱す、當時の史體當に然るべし。

韓文公、姪孫湘に示す詩に云ふ「一封朝に奏す九重の天、夕に潮陽に貶せられて路八千、聖明の爲に弊事を除かんと欲す、肯て衰朽を將つて殘年を惜んや、雲は秦嶺に横つて家何にか在る、雪は藍關を擁して馬前まず、知る汝遠來應に意有るべし、好し吾が骨を收めよ瘴江の邊に」

別舍弟宗一詩、云、零落殘魂倍黯然、雙垂別淚越江邊、一身去國六千里、萬死投荒十二年、桂嶺瘴來雲似墨、洞庭春盡水如天、欲知此後相思夢、長在荊門郢樹烟、二詩同韻、工力相敵、韓詩落句劣于柳、柳詩起句讓于韓、又奉和庫部盧四兄曹長元日朝廻云、天仗宵嚴建羽旄、春雲送色曉雞號、金爐香動螭頭暗、玉佩聲來雉尾高、戎服上趨承北極、儒冠列侍映東曹、太平時節身難遇、郎署何須歎二毛、雍容雅麗、勝杜少陵和賈舍人早朝大明宮之作、高廷禮正聲取彼而不取此何也、宿龍宮灘云、浩浩復湯湯、灘聲抑更揚、奔流疑激電、驚浪似浮霜、夢覺燈生暈、宵殘雨送涼、如何連曉語、一半是思鄉、送嚴大夫云、

と、柳柳州の舍弟宗一に別るゝ詩に云ふ「零落す殘魂倍々黯然、雙垂の別淚越江の邊、一身國を去る六千里、萬死荒に投ず十二年、桂嶺瘴來つて雲、墨に似たり、洞庭春盡きて水、天の如し、此の後相思の夢を知らんと欲せば、長く荊門郢樹の烟に在り」と、二詩同韻、工力相敵す、韓詩の落句は、柳に劣る、柳詩の起句は韓に讓る、又、庫部盧四兄曹長、元日朝より廻るに奉和するに云ふ「天仗宵嚴羽旄を建つ、春雲色を送つて曉雞號す、金爐香動いて螭頭暗く、玉佩聲來つて雉尾高し、戎服上趨、北極を承け、儒冠列侍、東曹に映ず、太平の時節身遇ひ難し、郎署何ぞ須ひん、二毛を歎ずるを」と、雍容雅麗、杜少陵の賈舍人、早に大明宮に朝するの作に和するに勝る高廷禮の正聲、彼を取りて此れを取らざるは、何ぞや、龍宮灘に宿するに云ふ「浩々復た湯々、灘聲抑更に揚、奔流疑ふらくは激電、驚浪浮霜に似たり、夢覺めて燈、暈を生じ、宵殘して雨、涼を送る、如何せん連曉の語、一半は是れ思鄉と、嚴大夫を送るに云ふ「蒼々八桂森たり、玆の地湘南に在り、江は青羅帶と作り、山は碧玉簪の如し、戶多く翠羽を輸す、家自ら黃柑を

蒼蒼森八桂、茲地在湘南、江作青羅帶、山如碧玉簪、戸多輸翠羽、家自種黃柑、遠勝登仙去、飛鸞不假驂、酒中留上李相公云、濁水汙泥清路塵、還曾同席掌絲綸、眼穿長訝雙魚斷、耳熱何辭數爵頻、銀燭未消窓送曙、金釵半醉座添春、知公不久歸鈞軸、應許閑官寄病身、此三詩雖絕妙、已開宋人門戶、秋字云、淮南悲木落、而我亦傷秋、況與故人別、那堪羈宦愁、榮華令異路、風雨苦同憂、莫以宜春遠、江山多勝遊、宛然蘇州語氣、可見大家無不具諸體也、三堂新題二十一詠、不及王維輞川諸篇、

劉盛不好讀書、唯讀孝經論語曰、誦此能行足矣、安用多誦而不行乎、蘇綽戒子威曰、讀

種う、遠く勝る登仙し去るに、飛鸞驂を假らず」と、酒中留めて李相公に上るに云ふ「濁水汙泥清路の塵、還た曾て席を同うして絲綸を掌る、眼穿つて長に訝る雙魚の斷ゆるかと、耳熱して何ぞ辭せん數爵の頻なるを、銀燭未だ消せず窓は曙を送り、金釵半は醉ふて座に春を添ふ、知る公久しからずして鈞軸に歸るを、應に許すべし閑官病身を寄す」と、此の三詩絕妙なりと雖ども、已に宋人の門戶を開く、秋字に云ふ「淮南木の落つるを悲み、而して我も亦秋を傷む、況んや故人と別る、那ぞ堪へん羈宦の愁、榮華令、路を異にし、風雨苦、憂を同くす、宜春の遠きを以てする莫れ、江山勝遊多し」と、宛然たる蘇州の語氣、大家の諸體を具せざる無きを見るべし、三堂新題二十一詠は、王維輞川の諸篇に及ばず。

劉盛、讀書を好まず、唯だ孝經、論語を讀む、曰く、此れを誦して能く行はゞ足らん、安ぞ多く誦し而して行はざることを用ひんやと、蘇綽、子威を戒めて曰く、孝經一巻を讀まば、以て身を立て國を治むるに足る、何ぞ多きを用ひ

孝經一卷、足以立身治國、何用多爲、陳萊湖漫成云、茆屋誰家絃誦聲、未曾日午掩山扃、應知多學還多事、只敎兒童 孝經、蓋用劉蘇二子意、學不知要、猶不學也。

溫庭筠贈彈箏者詩云、天寶年中事玉皇、曾將新曲敎寧王、鈿蟬金雁皆零落、一曲伊州淚萬行、寧王名憲、玄宗兄也、開元七年封寧王、二十九年薨、庭筠太中間人、自天寶元年至太中初、凡百五年、上溯開元、則更加二十餘年、疑是作者設題以寓感慨、非實有其人也、玄宗兄弟五王相次薨逝、至天寶間、已無存者、楊太眞以天寶四載入宮、元愼連昌宮詞云、百官隊仗避岐薛、李義山詩云、薛王沈醉壽王醒、張祜詩云、閑把寧王玉笛吹、皆誤

るを爲さんと、陳萊湖の漫成に云ふ「茆屋誰が家か絃誦の聲、未だ曾て日午、山扃を掩はず、應に知るべし多學は還た多事なるを、只だ兒童をして孝經を讀ましむ」と、蓋、劉・蘇二子の意を用ふ、學びて、要を知らざれば、猶學ばざるがごときなり。

溫庭筠、箏を彈ずる者に贈る詩に云ふ「天寶年中玉皇に事ふ、曾て新曲を將つて寧王に敎ふ、鈿蟬金雁皆零落、一曲の伊州淚萬行」と、寧王名は憲、玄宗の兄なり、開元七年、寧王に封ず、二十九年に薨ず、庭筠は太中間の人、天寶元年より太中の初に至るまで、凡そ百五年、上、開元に溯れば、則ち更に二十餘年を加ふ、疑らくば、是れ作者題を設けて以て感慨を寓す、實に其の人有るに非ざらん、玄宗の兄弟五王、相次ぎて薨逝す、天寶間に至りて、已に存する者無し楊太眞、天寶四載を以て宮に入る、元稹の連昌宮の詞に云ふ「百官隊仗岐薛を避く」、李義山の詩に云ふ「薛王は沈醉し壽王は醒む」、張祜の詩に云ふ「閑に寧王の玉笛を把つて吹く」と、皆誤れり、庭筠も亦寧王を以て天寶間の人と爲すに似たり。

庭筠亦似、以事王爲天寶間人。

高楚鄰詩云、作詩無知音、不如不作妙、作詩徒苦心、碎鑿渾沌竅、余詩固拙、徒苦思耳、時無同調、不作爲妙。

鍾山語錄、皇甫冉詩、暝色赴春愁、下得赴字最好、若下起字、卽小兒語矣、足見吟詩要一字兩字工也、按王世貞、秋陰生檜早、暝色赴花遲、蓋祖皇甫句、生字欠工夫、李長吉詩、眼逐春暝醉、亦佳。

望海錄引燕居筆記曰、東坡賞心十六事、淸溪淺水行舟、凉雨竹窓夜話、暑至臨流濯足、雨後登樓看山、柳陰堤畔間行、花塢樽前微笑、隔江山寺聞鐘、月下東鄰吹簫、晨興半炷名香、午倦一方藤枕、開甕忽逢陶謝、接客不

高楚鄰の詩に云ふ「詩を作つて知音無し、作らざるの妙なるに如かず、詩を作るは徒に苦心、渾沌の竅を碎鑿す」と、余、詩固より拙なり、徒に苦思するのみ、時に同調無し、作らざるを妙と爲す。

鍾山語錄に、皇甫冉の詩に「暝色春愁を赴く」と、赴の字を下し得て最好し、若し起の字を下さば、卽ち小兒の語なり、吟詩の要、一字兩字の工を見るに足るなり、按ずるに、王世貞の「秋陰、檜を生ずること早く、暝色、花を赴くること遲し」と、蓋皇甫の句を祖とす、生の字、工夫を缺ぐ、李長吉の詩に「眼は春暝を逐ふて醉ふ」も、亦佳なり。

望海錄に、燕居筆記を引きて曰く、東坡の賞心十六事、淸溪の淺水に舟を行る、凉雨竹窓夜話、暑至り流に臨みて足を濯ふ、雨後樓に登りて山を看る、柳陰堤畔に間行す、花塢樽前に微笑す、江を隔てゝ山寺に鐘を聞く、月下東鄰に簫を吹く、晨に興きて半炷の名香、午に倦みて一方の藤枕、甕を開きて忽ち陶謝に逢ふ、客に接して衣冠を著けず、名花の盛んに開くを乞ひ得、飛び來る佳禽自ら

著衣冠、乞得名花盛開、飛來佳禽自語、客至汲泉煎茶、撫琴聽者知音。

騎虎之勢必不得下、隋獨孤后語也、五代史郭崇韜傳稱爲俚語、晉書溫嶠傳、騎猛獸安可中下哉、此唐史臣、避高祖諱改虎曰猛獸、此語相傳久矣。

古樂府讀曲歌、晉信濶弦朔、方悟千里遙、朝霜語白日、知我爲歡消、初余以譚元春土鼓語木鐘句爲新、及見此詩、覺其陳腐。

玉溪清話、梁武帝得鍾繇破碑、愛其書、命周興嗣次韻成文、或又云、武帝欲學書、命殷鐵石選二王千文、名周興嗣次韻、二說不同、然皆武帝時事也、按次韻、選次韻字以成文也、與後世詩人次韻異、梁書蕭子範傳、南平王

語る、客至りて泉を汲み茶を煎る、琴を撫して聽く者音を知る。

騎虎の勢必ず下ることを得ずとは、隋の獨孤后の語なり、五代史郭崇韜傳に、稱して俚語と爲す、晉書溫嶠傳に、猛獸に騎る、安ぞ中下すべけんやと、此れ唐の史臣、高祖の諱を避け、虎を改めて猛獸と曰ふ、此の語、相傳ふること久し。

古樂府の讀曲歌に、「晉信濶なること弦朔、方に悟る千里遙なるを、朝霜白日に語る、我が歡を爲すを知つて消ゆ」初め余、譚元春の「土鼓木鐘に語る」の句を以て新と爲す、此の詩を見るに及びて、其の陳腐なるを覺ゆ。

玉溪清話に、梁の武帝、鍾繇の破碑を得て、其の書を愛す、周興嗣に命じて、次韻して文を成さしむ、或は又云ふ、武帝、書を學ばんと欲し、殷鐵石に命じて、二王の千文を選せしめ、周興嗣を召して次韻せしむと、二說同じからず、然れども、皆武帝の時の事なり、按ずるに、次韻は、韻字を選次して以て文を成すなり、後世詩人の次韻と異なり、梁書蕭子範傳に、南平王、子範をして千字文を製せしむ、

使子範製千字文、其辭甚美、命蔡遠注釋之、自是別本。

吾邑福井某不知字、嘗遊青樓、一妓狡黠、調某曰、賤妾欲書七字、偶忘其畫、何如書得、先作一畫、停筆問之、不應、强請、某執其手、左曲作亅、滿座絕倒、北齊書庫狄干傳、干不知書署名爲干字、逆上畫之、時人謂之穿錐、又有武將王周者、署名爲先吉而後成其外、此種之人、實不辨一丁者。

む、其の辭甚だ美なり、蔡遠に命じて、之れを注釋せしむと、自ら是れ別本。

吾が邑の福井某、字を知らず、嘗て青樓に遊ぶ、一妓、狡黠某を調して曰く、賤妾、七の字を書せんと欲す、偶其の畫を忘る、何如んか書し得んと、先づ一畫を作り、筆を停めて之れを問ふ、應ぜず、强ひて請ふ、某其の手を執りて、左に曲げて亅に作る、滿座絕倒す、北齊書庫狄干傳に、干、書を知らず、名を署し干の字を爲るに、上に逆して之れを畫す、時の人、之れを穿錐と謂ふ、又、武將王周といふ者あり、名を署するに、先づ吉を爲り、而して後に其の外を成す、此の種の人は、實に一丁を辨ぜざる者なり。

鈕雨亭隨筆卷中　終

門人 中村業 奥百千之 同校